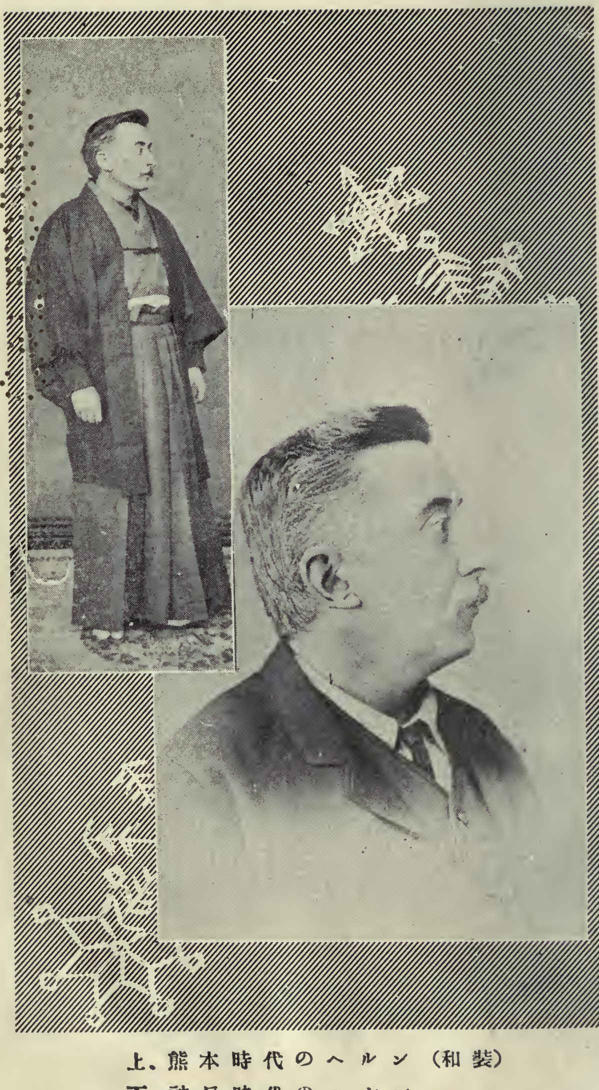
UC-NRLF
$B 264 892

SIGILLVM · VNIVERSITATIS · CALIFORNIENSIS
FIAT LVX
MDCCCLXVIII
EX LIBRIS
CASE
B

Digitized by the Internet Archive
in 2007 with funding from
Microsoft Corporation

http://www.archive.org/details/diariesletters00hearuoft



上、熊本時代のヘルン（和裝）
下、神戸時代のヘルン

LAFCADIO HEARN
DIARIES & LETTERS

TRANSLATED AND ANNOTATED

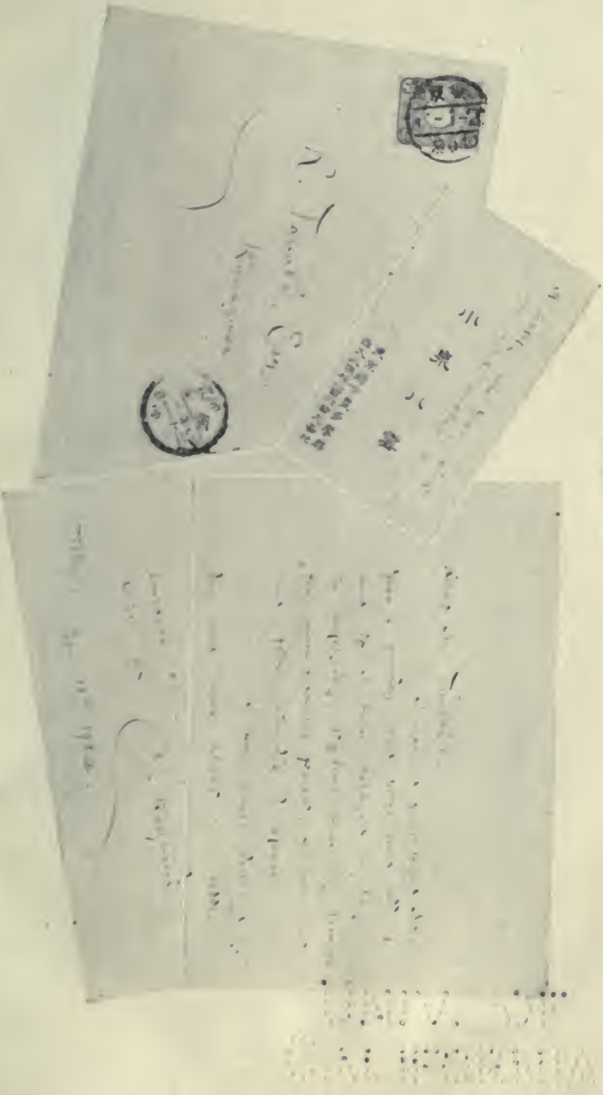
BY

Prof. R. TANABE

UNIV. OF
CALIFORNIA

1920
HOKUSEIDO
TOKYO

DS804
H315



ヘルンの手跡（譯者におくりし手紙の一部）

上、西大久保邸ヘルンの書齋（十二疊間）の一部、中、ヘルンの著書
下、同じく書齋の一部、高い机は執筆の時使用せしもの

UNIV. OF
CALIFORNIA

中央、故西田千太郎氏、上、松江時代の學生醫學博士石原喜久太郎氏（東京帝大醫學部教授）、右、同じく工兵中佐藤崎八三郎氏（伏見工兵大隊長）、左、同じく大谷正信氏（四高教授）

上、故籠手田安定氏、下、熊本時代の學生安河内麻吉氏（現福岡縣知事）

UNIV. OF
CALIFORNIA

明治二十七年七月熊本高等中學卒業生寫眞

右より第一段一人目、安河内麻吉氏、三段五人目、隈本繁吉氏、七人目、小橋一太氏、四段八人目、故有馬純臣氏、五段二人目、ヘルン、四人目、理學博士大幸勇吉氏、五人目、杉山岩三郎氏、六人目、故秋月胤永氏、七人目、中川元(校長)八人目、櫻井房記氏、

UNIV. OF CALIFORNIA

上、熊本第五高等學校、下、松江中學校(右)師範學校(左)その後兩方こも移轉して今は商業學校

UNIV. OF CALIFORNIA

序　言

畧　傳

Lafcadio Hearn は自分の名をカナでヘルンと書き、印章をもヘルンとした。表紙にある「鷺」(heron) の定紋はヘロンのヘルンに通ずるところから Hearn がつくつたものである。

ラフカディオ、ヘルンは一八五〇年、ギリシヤ、アイオニヤ列島リユカデイヤに生れた。父は當時ギリシヤ駐在の英國軍醫、母はギリシヤ人であつた。父母と共に父の郷里アイルランドのダブリンに歸つたが母は故ありて離婚してギリシヤに歸つた。ヘルンの母に對する同情はその後東洋の一切の事物に同情を有する原因となつた。これヘルンの說くところによれば母の血統にアラビヤ人の血があると思はれたからであつた。

その後富有なる大叔母に養はれて、ウエールス、及び英國にて成長し、ローマ舊敎の學校に入學中、運動場にて遊戯の際一眼失明した。殘りの一眼はその後近視二度半になつた。のちフランスにも遊學した。ついで此大叔母の破產のために獨立自活の道を求めて十九歲の時アメリカ、シンシナーティに渡り新聞記者となつて約八年とゞまつた。更に南方ニユ、オルレアンスに移つてタイムス、デモクラット等の編輯に從事して約十年の記

M112257

者生活をおくつた。それからハーパース、モンスリーのために通信員となつて西印度に赴いて約二年居た。かへつて再びハーパース、モンスリーのために通信員となつて、一八九〇年（明治二十三年）四月、日本に來ることになつた。

多年の望みを達して日本に來たヘルンは暫らく、東京、横濱、鎌倉の間を往來して居たが、さらに日本の內地を見ようとして、ニユ、オルレアンスに以前博覽會事務官であつた服部一三氏（當時文部省普通學務局長）チエムバレン氏その他の盡力によつて、明治二十三年九月出雲松江の中學校の英語教師となつて赴任した。小泉氏の娘と結婚したのはその年十二月であつた。翌二十四年十一月熊本第五高等學校に赴任して滿三年の期終るや、神戶クロニクルの招きに應じて記者となつた。歸化して日本臣民となり夫人の性と出雲の古歌に因んで「小泉八雲」と名のつたのは此時代であつた。明治二十九年外山正一博士（當時文科大學長）の懇篤なる招きに應じて文科大學英文科の講師となつて三十六年三月まで勤續した。三十七年四月より早稻田大學の講師となつて在職中、九月二十六日、日露戰役中、心臟病にて急になくなつた。此人の傳記は「事實は小說よりも奇」なることを思はせる程不思議に波瀾に富めるものであつた。詳しくは拙著「小泉八雲」（早稻田大學出版部）について見られたい。

ヘルンの著書はつぎの通りである。

1. One of Cleopatra's Nights, and other Fantastic Romances (飜譯)
2. Stray Leaves from Strange Literature
3. Gombo Zhebes
4. The Temptation of St. Anthony (飜譯)
5. Some Chinese Ghosts
6. Chita: A Memory of Last Island
7. Karma
8. Youma. The Story of a West Indian Slave
9. Two Years in the French West Indies
10. The Crime of Sylvestre Bonnard (飜譯)
11. Dairy of an Impressionist
12. Glimpses of Unfamiliar Japan 2 vols.
13. Out of the East
14. Kokoro
15. Gleanings in Buddha-Fields
16. Exotics and Retrospectives
17. In Ghostly Japan
18. Shadowings
19. A Japanese Miscellany
20. Japanese Fairy Tales 4 vols.
21. Kotto

22. Kwaidan
23. Japan: An Attempt at Interpretation
24. The Romance of the Milky Way and other Studies and Stories
25. Interpretations of Literature 2 vols.
26. Appreciation of Poetry
27. Life and Literature

外に書簡集數種。

以上ヘルンの著書は飜譯、紀行、小說、論文、隨筆等の各方面に渡つて居るが、その大部分即ち12. Glimpses より 24. The Milky Way に到るまでは悉く材料を日本に取つたものである。英文學に於て第一流の名文家たるヘルンの率直にしてしかも流麗なる文體を以て洞察と同情のある著作をなすや、讀者は悉く日本の同情者とならざるを得ない。今日に於て世界に於ける日本の同情者はヘルンの著書の感化によらないものは甚だ少いと云はれて居る。大正三年　今上天皇陛下御即位式の行はれた時、從四位を贈られたのはその功勞を認められたからであつた。

解　題

I. From the Diary of an English Teacher
(英語敎師の日記から)

Glimpses の第二卷に出て居る。グリムプセスは日本に於ける第一印象で、重に出雲を中心とし

て純日本の事を叙し、外人に解し難き日本の風俗、日本人の心理等に日本人にも新しき解釋說明を施したるものである。此一篇は松江に赴任してからヘルンの眼に映じた日本學生生活を叙したものである。坪內逍遙博士はこれを評して「かの出雲中學の教師としての日記の如きものを讀んでは誰れしも愛敬の心を生ぜざるを得ない。如何にも深切な優しい人柄が浮上つて見える。如何に心性を直覺することに秀でた人で、如何に觀察が穿細であるかゞ見える」と云つた。そのうち志田、横木の二秀才の死を憐れむところ、殊に横木が最後に學校を見に行く一章（二十一章）の如きは、讀む度毎に新しい涙を誘はれずには居られない。

II. With Kyushu Students

（九州學生と）

Out of the East に出て居る。Out of the East は重に熊本時代の記事からなつて居る。さきの一篇が松江中學生生活の記事である如く、此一篇は第五高等學校の學生生活の記事である。このうちにある學生の作文は多く又批評賞讃等を附してチエムバレン氏の私信にもそのまゝ出て居る。西洋武士道 Chivalry と、ユウリピデイスの神劇とに關する學生の批評はそれ等に關する學生の會話作文より著者が或思想を說明せんがために一教室內に起つたやうに敷衍したものであらう。

III. 手紙

落合氏への手紙

落合貞三郎氏は面白き又有益なる手紙を多く贈られて居る。こゝには醫學を勉强するための心得とも云ふべきものを一通のせた。

チエムバレン氏への手紙

ヘルンが日本に來た頃はチエムバレン氏は文科大學の國語國文學の敎授であつた。出雲へ行つたのも此人の世話であつた。グリムプセスも此人(及び マクドーナルド氏) へ捧げて (dedicate) 居る。ヘルンの死後出版された書簡集のうち、ビスランドの集めた大部のもの三册のうち三分の一以上はチエムバレン氏への分であつた。讀者はこゝにある僅かに三通の手紙によりても又別方面から當時の熊本學生生活の興味あるグリムプスを得ることができよう。最後の安河内氏との問答は別にニユ、ヨークの友人 Ellwood Hendrick 氏へも殆んど同じ文句で書きおくり、又 Out of the East 中の一篇「柔術」と題するものゝ終りにも書いて居る。即ち安河内氏の口をかりて、東洋文明の西洋文明に優れることを說いて居るやうである、安河内氏と同級及びその前後の級に於て其後著名になつた人々は小松内務次官、黒板博士、林、赤星等の地方長官を初め其數中々に多い、しかもヘルンが特に此人に望みを置きしところ注目すべきではないか。

ヘルンは日本學生の同情者であつた。日本學生の欠點弱點を認めて居る。何事も記憶力にのみ訴へて思考することの少きことを憂へて居る。しかし手紙に（又最後の著書「神國日本」にも）實例をあげて日本學生の忍耐心の强きこと (patient heroism) を感嘆して居る。それから西洋の一般學生よりも學科の負擔多くして疎食過勞のために夭折するものゝ多きことを嘆じて居る。同時に敎師が學生のために献身的に働いて居ること、父兄が子弟の勉學のために犧牲になつて居ること等の實例をあげて居る。しかし譯者はそれ等の手紙は割愛した。

譯者はこゝに全編に渡りて小泉夫人、松江の部に於て藤崎中佐、熊本の部に於て安河內知事及び村川堅固博士の示敎に負ふところ多きことを感謝します。關係文書寫眞等を貸與されたる小泉夫人、及び安河內知事、石原博士、大谷正信君、に御禮を申します。

大正九年一月　　四大久保にて

譯註者

目　次

I. From the Diary of an English Teacher (英語教師の日記から) 1

II. With Kyushu Students(九州學生と) 248

III. Letters——

To Ochiai (落合貞三郎氏へ) ... 336

To Basil Hall Chamberlain (ベーシル、ホール、チエムバレン氏へ) 370

Every day has its revelations. What seem to be mountains turn out to be only clouds; the horizon forever recedes. Of Japan, I would say with Kipling's pilot: "And if any man comes to you, and says, 'I know the Javva currents,' don't you listen to him; for those currents is never yet known to mortal man!"

To estimate the Japanese student by his errors, his failures, his incapacity to comprehend sentiments and ideas alien to the experience of his race, is the mistake of the shallow: to judge him rightly one must have learned to know the silent moral heroism of which he is capable.

—Lafcadio Hearn

FROM THE DIARY OF AN ENGLISH TEACHER.

I

MATSUE, September, 2, 1890.[1]

I AM under contract to serve as English teacher in the Jinjō Chūgakkō,[2] or Ordinary Middle School, and also in the Shihan-Gakkō, or Normal School, of Matsue, Izumo, for the term[3] of one year.

The Jinjō Chūgakkō is an immense two-storey[4] wooden building in European style, painted a dark grey-blue. It has accommodation[5] for nearly three hundred day-scholars.[6] It is situated in one corner of a great square of ground, bounded[7] on two sides by canals,

【註】 1. 1890 は明治二十三年、九月二日は初めて登校せし日、當時は九月が學年の初めで七月が終りであつた。 2. 今の中學校を尋常中學校と云ひ、高等學校を高等中學校とよんだ。 3.

英語教師の日記から

一

一八九〇、九月二日、松江にて、

自分は出雲松江の尋常中學校及び師範學校に於て一ヶ年間英語教師として奉職する契約をして居る。

尋常中學校は暗青灰色に塗つた歐風の大きな木造二階の建物である。これには約三百の通學生を收容する設備がある。二方は運河、二方は甚だ靜かな街路で境になつた大きな方形の地面

term 期限。 4. storey は story とも綴る、階層。 5. accommodation 設備。 6. day-scholars 通學生、夜學校でない晝の學校に出る生徒。 7. bound 境する。

and on the other two by very quiet streets. This site is very near the ancient castle.

The Normal School is a much larger building occupying the opposite angle of the square. It is also much handsomer, is painted snowy white, and has a little cupola[1] upon its summit. There are only about one hundred and fifty students[2] in the Shihan-Gakkō, but they are boarders.[3]

Between these two schools are other educational buildings, which I shall learn more about later.

It is my first day at the schools. Nishida Sentaro,[4] the Japanese teacher of English, has taken me through the buildings, introduced me to the Directors, and to all my future colleagues, given me all necessary instructions about hours and about text-books, and furnished my desk with all things necessary. Before teaching begins, however, I must be introduced to

【註】 1. cupola 圓屋根。 2. students を學生と譯して大學生のことゝし、その他を生徒と日本できめて居るのはそれは一種の習慣なれども此著者は中學生でも師範生でも皆 students にして居る。

の一方に建つて居る。此敷地は舊城に甚た近い。

師範學校は同じ地面の他の一角を占めた更に大きな建物である。同時に又更に立派である、眞白に塗つて、それから頂上に小さい圓屋根がある。師範學校には僅かに百五十程の生徒しかないが皆寄宿生である。

此二つの學校の間にまだ外にいくつかの教育に關する建物がある、これ等について自分は追々分るようにならう。

此日は自分が學校に出た第一の日である。西川千太郎氏は自分をつれて此等の學校に案內し、校長及び同僚となるべき人々に悉く紹介し、授業時間のこと、教科書のことにつき必要な注意を悉く與へ、凡て必要なものを自分の机にのせてくれなどした。しかし授業の初まる前にかねて官房書記

3. boarder 寄宿生. 4. 西川千太郎(今は故人)英語の教師にして當時の教頭、現福岡大學教授工學博士西川楢氏の令兄。

the Governor of the Province, Koteda Yasusada,[1] with whom my contract has been made, through the medium of his secretary.[2] So Nishida leads the way to the Kenchō, or Prefectural office, situated in another foreign-looking edifice across the street.

We enter it, ascend a wide stairway, and enter a spacious room carpeted in European fashion,—a room with bay[3] windows and cushioned chairs. One person is seated at a small round table, and about him are standing half a dozen others: all are in full[4] Japanese costume, ceremonial costume,—splendid silken hakama, or[5] Chinese trousers, silken robes, silken haori or overdress, marked with their mon or family crests: rich and dignified attire which makes me ashamed of my commonplace Western garb. These are officials of the Kenchō, and teachers: the person seated is

【註】 1. 籠手田安定（今は故人)、山岡鐵舟の高弟、故武士の面影のある人、熱心な國粹保存家であつた。 2. through the medium of his secretary. 知事と直接に契約したのではなし書記を通じてのこと故初對面である。 3. bay-window 凸出した窓、光線

を通じて自分と契約のできて居た縣知事籠手田安定氏に紹介して貰はねばならない。そこで西田氏は自分を往來の向側の別の歐風の建物にある縣廳へ案內する。

縣廳に入り、廣い階段を上り、歐風に敷物をしきつめた一室に入る、その室には出窓もあれば、ふとんのついた椅子もある。ひとりの人が小さい圓卓に對して椅子にかけて居る、その周圍に五六人の人が立つて居る、何れも日本の禮服をきて居る、—立派な絹の袴、絹のきもの、絹の紋付羽織、—自分の平凡な洋服を恥ぢ入らせる立派な威嚴のある服裝である。これ等は縣廳の役人と敎師である、椅子にかけたのは知事である。知事は自分

な多く受けるやうに張出しになつた窓。 4. full costume = fu'l dress 正裝、禮裝。 5 or 即ちと云ふこと、袴の說明、あとの羽織、紋、も同じ。

the Governor. He rises to greet me, gives me the hand-grasp of a giant: and as I look into his eyes, I feel I shall love that man to the day of my death. A face fresh and frank as a boy's, expressing much placid force and large-hearted kindness,—all the calm of a Buddha. Beside him, the other officials look very small: indeed the first impression of him is that of a man of another race. While I am wondering whether the old Japanese heroes were cast in a similar mould, he signs to me to take a seat, and questions my guide[1] in a mellow basso.[2] There is a charm in the fluent depth of the voice pleasantly confirming the idea suggested by the face. An attendant brings tea.

"The Governor asks," interprets Nishida, "if you know the old history of Izumo."

I reply that I have read the Kojiki, translated by Professor Chamberlain, and have therefore some knowledge of the story of

【註】 1. my guide 西田氏。

に挨拶せんがために立つて巨人の握手を與へる、自分は此人の眼を見て自分は一生此人が好きであるやうな氣がする。溫和な力と大やうな親切の多く表はれた一佛の靜けさが悉く表はれた一小兒のやうに鮮やかな正直な顏である。此人の側にあつては外の人々も甚だ小さく見える、實際此人を初めて見た時は別人種の如き感じがする。自分は古への日本の英雄は此人と同じ型ではあるまいかと考へて居る時、此人は自分に椅子を取るように合圖して軟い低い聲で自分の通譯の勞を取れる人に話しかける。その顏を見た時に自分が豫想した通りの流暢な深い聲に一種の魔力がある。給仕が茶をもつてくる。

西田氏通譯する、「知事はあなたが出雲の昔しの歷史を御存じかときかれるのです」

自分はチエムバレン教授の譯にかゝる古事記を讀んで、日本最古の國の話しを少しは心得居る

2 basso = bass 低音ベースの伊太利語。

Japan's most ancient province. Some converse in Japanese follows. Nishida tells the Governor that I came to Japan to study the ancient religion and customs, and that I am particularly interested in Shintō and the traditions of Izumo. The Governor suggests that I make visits to the cerebrated shrines of Ki:zuki,[1] Yaegaki,[2] and Kumano,[3] and then asks :—

"Does he[4] know the tradition of the origin of the clapping of hands before a Shintō shrine?"

I reply in the negative; and the Governor says the tradition is given in a commentary[5] upon the Kojiki.

"It is in the thirty-second section of the fourteenth[6] volume, where it is written that Ya-he-Koto-Shiro-nushino-Kami clapped his hands."

〔註〕 1. 杵築、出雲大社のあるところ。 2. 八重垣は松江市より北一里半許りの八重垣神社。 3. 熊野、意宇郡、熊野村の熊野神社。 4. Does he ...... の he は西田氏を通じての問であるからで Do you ...... と同じ、日本語の「あなた」も語源から云へば he である。 5. a commentary upon the Kojiki 本居宣長「古事記傳

ことを答へる。日本語で話しが暫らくつゞく。西田氏は自分は昔しの宗教と風俗を知りたいので日本に來たこと、殊に神道及び出雲の傳說に興味をもてることを知事に語る。知事は自分に杵築、八重垣、熊野の名高き神社に詣でてはいかがと云つて次ぎに問ふ

「あなたは神社の前で手をうつ起りの傳說を御存じか」

自分は知らないことを答へる、そこで知事はその傳說は古事紀傳に出て居ると云ふ。

「第十四卷第三十二章にあります、八重言代主神が手をうつたことが書いてあります」

のこと、書物の名の前には定冠詞を置く。 6. 十四卷三十二章と云ふうち十四卷は古事記傳の卷、三十二章はチエムバレンの翻譯の方でできた分ち方、手をうつことの古き文書に見えたのはこれが初めてと云ふ意味であるがこれを讀めば、手をうつことはそれから起つたやうに見える。

I thank the Governor for his kind suggestions and his citation.[1] After a brief silence I am graciously dismissed[2] with another genuine hand-grasp; and we return to the school.

〔註〕 1. citation 引證して説明してくれたこと。

自分は知事の有難い忠告や教へに對して御禮を云ふ。しばらくの沈默ののち又眞率なる握手をして丁寧に送り出される、そして自分等は學校にかへる。

---

2. to be dismissed 歸ることを許される、送り出される。

II

I HAVE been teaching for three hours in the Middle School, and teaching Japanese boys turns out[1] to be a much more agreeable task than I had imagined. Each class has been so well prepared for me beforehand by Nishida that my utter ignorance of Japanese makes no difficulty in regard to teaching: moreover, although the lads cannot understand my words always when I speak, they can understand whatever I write upon the blackboard with chalk. Most of them have already been studying English from childhood, with Japanese teachers. All are wonderfully docile and patient. According to old custom, when the teacher enters, the whole class rises and bows to him. He returns the bow, and calls the roll.[2]

【註】 1. turns out = results, shows in the end. ...... となる。

二

自分は中學校に於て三時間教へた處である、そして日本の生徒を教へることは自分の想像したよりは面白いことが分つてくる。各級は豫じめ西田氏がよく準備して置いてくれるので自分の全く日本語を解しないことが教へることに何等の困難をも來さない。其上生徒は自分が話す時には自分の言葉をいつも悉くは解せないでも白墨で黒板の上にかくことは何でも分る。生徒の多數は幼時より日本の教師について、すでに英語を學んで居る。皆非常に順良で又辛抱强い。昔しからの習慣に從つて教師が入り來る時には全級立つて頭を下げる。教師は禮をかへしてのち出席簿を調べる。

2. the roll 人名簿

Nishida is only too[1] kind. He helps me in every way he possibly can, and is constantly regretting that he cannot help me more. There are, of course, some difficulties to overcome. For instance, it will take me a very, very long time to learn the names of the boys, —most of which[2] names I cannot even pronounce, with the class-roll before me. And although the names of the different classes have been painted[3] upon the doors of their respective[4] rooms in English letters, for the benefit of the foreign teacher, it will take me some weeks at least to become quite familiar with them. For the time being[5] Nishida always guides me to the rooms. He also shows me the way, through long corridors, to the Normal School, and introduces me to the teacher Nakayama[6] who is to act there as my guide.

I have been engaged to teach only four

〔註〕 1. only too=exceedingly 非常に。 2. which names=whose names, those names. 3. painted ペンキでかいてある。

西田氏は非常に親切である。できることは何でもして自分を助けてくれる、つねに及ばざるを恐れて居る。勿論こゝにもうち勝つべき艱難がいくつかある。たとへは生徒の名の分るまでには餘程の時を要するのである、それらの名の多數は自分の前に生徒名簿を置きながら發音することもできないのである。又各組の名は各教室の入口に外國教師のためにそれぞれ英語でかいてはあるが、自分に分るやうになるまでには少なくとも數週間を要するのである。それまでのところ西田氏はたえず自分を案内してくれる。氏は又長い廻廊をへて師範學校に行く道を教へて、そこで自分に案内の勞をとつてくれる中山と云ふ教師に自分を紹介する。

自分は師範學校では只四時間だけ教へる約束

4. resp c'ive それぞれの。 5. for the time b ing = for the present さし當り、當分の内. 6. 中山彌一郎(今は故人)。

times a week at the Normal School; but I am furnished there also with a handsome desk in the teachers' apartment, and am made to feel at home[1] almost immediately. Nakayama shows me everything of interest in the building before introducing me to my future pupils. The introduction is pleasant and novel as a school experience. I am conducted along a corridor, and ushered into a large luminous whitewashed[2] room full of young men in dark blue military uniform. Each sits at a very small desk, supported by a single leg, with three feet. At the end of the room is a platform with a high desk and a chair for the teacher. As I take my place at the desk, a voice rings out in English: "*Stand up!*" And all rise with a springy[3] movement as if moved by machinery. "*Bow down!*" the same voice again commands,—the voice of a young student wearing a captain's stripes[4] upon his

【註】 1. to feel at home = to feel at ease as in one's own house 氣樂に、寛いだ氣持になる。 2. white-washed 白く塗つてある。

になつて居る、しかしそこでも教官室で美しい机をあてがはれ、直ちに我家へ歸つたやうな感じを與へられる。中山氏は自分のこれからの生徒に紹介する前に、學校にある面白いものを悉く自分に見せる。生徒への紹介は學校に關する經驗としては愉快に、かつ、珍らしいものである。自分は廊下を通つて案内され、組の制服をつけた青年の滿ちた白壁の大きな明るい一室に導かれる。さきが三叉（ミツマタ）になつた一本足でさゝへてある極めて小さい机に向つて銘々坐る。室の一方に教師の分の高い机と椅子とのある教壇がある。此机のところに自分が席をとると一人が英語で聲を上げる「起立」。即ち一同はバネ仕かけで動くかのやうに飛び上るやうな擧動で立つ。「敬禮」再びさきの聲が命令する、それは袖に級長の筋のある若い生徒の聲である、そこで一同自分に敬禮する。自分は

3. springy ばねのやうな、彈力ある。 4. captain' stripes 組長、級長の筋。

sleeve; and all salute me. I bow in return; we take our seats; and the lesson begins.

All teachers at the Normal School are saluted in the same military fashion before each class-hour,—only the command is given in Japanese. For my sake only, it is given in English.

これに答へて頭を下げる、一同席に復する、それから授業が初まる。

師範學校の教師は毎授業時間の初めにこれと同じ軍隊風の敬禮を受ける、たゞ命令は日本語でされる。自分だけには英語でされるのである。

III

September 22, 1890.

THE Normal School is a State institution.[1] Students are admitted upon examination and production of testimony[2] as to good character; but the number is, of course, limited. The you g men pay no fees, no boarding-money, nothing even for books, college-outfits,[3] or wearing-apparel. They are lodged, clothed, fed, and educated by the State; but they are required in return, after their graduation, to serve the State as teachers for the space of five years. Admission, however, by no means assures graduation. There are three or four examinations each year; and the students who fail to obtain a certain high average of examination marks must leave the school, however

【註】 State institution 國立と云ふ程のこと、實は縣立、この點では中學も同じいが市立、郡立、私立の師範は先づない。

三

一八九〇、九月二十二日

師範學校は縣立である。生徒は品行方正を證する履歴書を出し、試驗をへて入學を許されるが人數には勿論限りがある。生徒は月謝も寄宿料も書籍代をさへも、旅費も、衣服代も拂ふに及ばない。國家の費用で衣食住と學問を受けて居る代り卒業ののち五ヶ年間教員として國家に奉公すべき義務がある。しかし入學すれば必ず卒業するものとは定まらない。年々三回乃至四回の試驗がある、一定の高い標準の試驗點を得ない生徒は如何にその品行が模範的で如何に勉强に熱心でも學

2. testimony as to …… に關する證書、證明書。 3. college-outfit 學校の旅費、支度料。

exemplary their conduct or earnest their study. No leniency can be shown where the educational needs of the State are concerned,[1] and these call for natural ability and a high standard of its proof.[2]

The discipline is military and severe. Indeed, it is so thorough that the graduate of a Normal School is exempted by military law from more than a year's service in the army:[3] he leaves college a trained soldier. Deportment is also a requisite: special marks are given for it; and however gawky[4] a freshman[5] may prove at the time of his admission, he cannot remain so. A spirit of manliness is cultivated, which excludes roughness but develops self-reliance and self-control. The student is required, when speaking, to look his teacher in the face, and to utter his words not only distinctly, but sonorously. Demeanour

【註】 1. ...... are concerned......の關係する處では。 2. these call for natural ability and a high standard of its proof. these = the educational needs: call for = demand 要求する、 its proof その證明、國家に必要なる教育的事業には生れながらの才能が要る、それも高い標準で證明されるやうな才能でなければならない。

校を去らねばならない。國家の教育事業と云ふ點から何等の容赦も示されない、そして此教育事業は生れつきの才能とその才能を證明する高い標準を要求する。

その訓練は軍隊的で、峻嚴である。實際師範學校の卒業生は軍隊で一年以上も歸休することを軍法によつて許さるゝ程その訓練は完全である、それ程完全な軍人となつて學校を出るのである。行狀も又一の必要物である、特別の評點がこのために設けてある、入學の當時如何に無作法でも、そのまゝであることは許されない。男らしい精神は養成される、そして粗野の風は排せられ、獨立自制の風は發達するやうになる。生徒は言語を發する時には教師の顔を見なければならない、言語は明確であるのみならず又高聲でなければなら

3 以前は師範學校卒業生には兵役はなかつたが後六週間現役をやればよいことになつた、此當時は六週間現役制度のできたばかりの頃であらう。 4 gawky — clumsy, awkward 無作法で。 5 freshman 新入生、大學や專門學校での言葉。

in class is partly enforced by the class-room fittings themselves. The tiny tables are too narrow to allow of being used as supports for the elbows ; the seats have no backs against which to lean, and the student must hold himself rigidly erect as he studies. He must also keep himself faultlessly[1] neat and clean. Whenever and wherever he encounters one of his teachers he must halt, bring his feet together, draw himself erect, and give the military salute. And this is done with a swift grace difficult to describe.

The demeanour of a class during study hours is if anything[2] too faultless. Never a whisper is heard ; never is a head raised from the book without permission. But when the teacher addresses a student by name, the youth rises instantly, and replies in a tone of such vigour as would seem to unaccustomed ears almost starling by contrast with the stillness and self-repression of the others.

〔註〕 1. faultlessly 完全に。 2. if anything = if at all 強いて

ない。敎場での行儀は敎室内の器具によつても幾分よくしないわけに行かないようになつて居る。小さい机は餘り狹くて肘をかけることができない、腰かけにはよりかゝるところがない、それで生徒は勉强中は固く眞直に身體をもたねばならない。生徒は又極めて淸潔にサッパリと身を整ひ置かねばならない。どこで又いつ敎師に遇つても止まつて足をそろへ體を眞直にして兵式の敬禮をしなければならない。しかもこれは書くこともできぬ程のすばやい美しさでなされるのである。

授業時間中の生徒の態度は强いて云へば餘りによすぎる。さゝやきの聲も聞えない、許可なしには書物から頭をあげることもない。しかし敎師が名を呼んで生徒にあてるや否や、その少年は直ちに立つて、慣れない耳には外の生徒の靜肅沈默と對照して殆んどビックリする程力のある調子で答へるのである。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

何か云へば。

The female department of the Normal School, where about fifty young women are being trained as teachers, is a separate two-storey quadrangle[1] of buildings, large, airy, and so situated, together with its gardens, as to be totally isolated from all other buildings and invisible from the street. The girls are not only taught European science by the most advanced methods, but are trained as well in Japanese arts,—the arts of embroidery, of decoration, of painting, and of arranging flowers. European drawing is also taught, and beautifully taught, not only here, but in all the schools. It is taught, however, in combination with Japanese methods; and the results of this blending may certainly be expected to have some charming influence upon future art-production. The average capacity of the Japanese student in drawing is, I think, at least fifty per cent. higher than that of European students. The soul of the race is essen-

【註】 1. quadrangle 四角形。

師範學校の女子部には五十人程の若い婦人が教員としての訓練をうけて居るがそれは別の二階作りの四角な大きな風通りのよい建物で、附屬の庭園と共に外の建物と全然別になつて、往來より見えないやうになつて居る。これ等の少女は最新の方法で西洋の科學を學ぶと共に日本の藝術即ち刺繡、裝飾、繪畫、生花をも敎はる。洋畫も又敎はる、しかも立派に敎はる、それはこゝばかりでない、到る處の學校で。しかし日本風の方法と聯合して敎へてある、此聯合の結果は必ずや將來の美術作品に多少のよい影響を與ふることを期待してもよからう。繪畫に於ける日本學生の平均能力は歐洲學生のそれよりは少なくとも五割は高いと自分は思ふ。日本人種の魂は根本的に美術

tially artistic; and the extremely difficult art of learning to write the Chinese characters, in which all are trained from early childhood, has already disciplined the hand and the eye to a marvellous degree,—a degree undreamed of in the Occident,—long before the drawing-master begins his lessons of perspective.[2]

Attached to the great Normal School, and connected by a corridor with the Jinjō Chūgakkō likewise, is a large elementary school for little boys and girls: its teachers are male and female students of the graduating classes, who are thus practically trained for their profession before entering the service of the State. Nothing could be more interesting as an educational spectacle to any sympathetic foreigner than some of this elementary teaching. In the first room which I visit a class of very little girls and boys—some as quaintly pretty as their own dolls—are bending at their desks over sheets of coal-black paper which

[註] 1. to a marverous degree 驚くべき度合に。 2. perspective

的である、その上幼時より敎へ込まれる極めて六ツかしい漢字の書法は、繪畫の先生が透視畫法の講義を初めるズット昔しに旣に眼と手とを極度に（殆んど西洋人には夢にも分らない程の程度に）訓練して居るのである。

此大師範學校に附屬して、又中學校にも廊下でつらなつた小さい男兒女兒の大きな小學校がある、敎師は卒業の時期に達した男女の學生である、かくして國家の奉公に入る前に彼等の天職を實地に練習するのである。敎育に關する見物としては此小學敎育程、同情のある外國人にとつて興味のあるものはない」自分の見る第一の敎室では極めて小さい女兒男兒の一組が（中には此子供等自身の人形の如く不思議に美しいのが居る）眞黑な草紙を机上に置いて屈んで居るところである、

透視畫法。

you would think they were trying to make still blacker by energetic use of writing-brushes and what we call Indian-ink. They are really learning to write Chinese and Japanese characters, stroke by stroke. Until one stroke has been well learned, they are not suffered to attempt another—much less a combination.[1] Long before the first lesson is thoroughly mastered, the white paper has become all evenly black under the multitude of tyro[2] brush-strokes. But the same sheet is still used; for the wet ink makes a yet blacker mark upon the dry, so that it can easily be seen.

In a room adjoining, I see another child-class learning to use scissors—Japanese scissors, which, being formed in one piece, shaped something like the letter U, are much less easy to manage than ours. The little folk are being taught to cut out patterns, and shapes

【註】 1. much less a combination 一字をかくことはなほさら許されない、a combination は stroke を集めたもの故字のこと。

所謂墨と筆とを一心に使つてその黒い草紙を一層黒くしようとでも努めて居るのだらうと他人には思はれる。實は彼等は一筆一筆漢字と假名とを書くことを習つて居るのである。一筆がよくできたあとでなければ又つぎの一筆を下すことは許されない、一字をかくことはなほさらのことである。第一回の課業は充分了らないズツト以前に白紙は無數の未熟の筆のあとで悉く一様に黒くなつて居る。しかし同じ紙はやはり用ひられる、ぬれた墨はかはいた墨の上では更に黒いあとをつけて容易に見られるからである。

つぎの室でハサミを使用することを習へる一組の子供を見る、日本のハサミは一つになつて居て餘程U文字の形ちにできて居るが自分等のハサミより餘程あつかひにくいやうである。小さい子供はひな型又はこれから學ぶ特別の物や符號

2. tyro 初學者(名詞)。

of special objects or symbols to be studied. Flower-forms are the most ordinary patterns; sometimes certain ideographs[1] are given as subjects.

And in another room a third small class is learning to sing; the teacher writing the music notes (*do*, *re*, *mi*) with chalk upon a blackboard, and accompanying the song with an accordion. The little ones have learned the Japanese national anthem (*Kimi ga yo wa*) and two native songs set to Scotch airs,[2]—one of which calls back to me, even in this remote corner of the Orient, many a charming memory: *Auld Lang Syne.*[3]

No uniform is worn in this elementary school: all are in Japanese dress, — the boys in dark-blue kimono, the little girls in robes of all tints, radiant as butterflies. But in addition to their robes, the girls wear hakama,

【註】 1. ideographs 表意的文字（漢字などもこれである）、意味のある符號。 2. two native songs set to Scotch airs スコツトランドの節に合せた二つの日本の歌、一つは「螢の光り」一つは「美しき我兒はいづこ」である、前者は Auld Lang Syne 後者は Blue

を切り出すことを教はらうとして居る、花の形は最も普通のひな形であるが時としは何かある符號なども題として與へられる。

又ある教室では別の小さい組が唱歌を習つて居る、教師は黑板に白墨で音譜（ド、レ、ミ、）をかき、そして手風琴に歌を合せて居る。子供は日本國歌（君が代）及びスコットランドの節に合せてできた二つの日本の唱歌をすでに知つて居る、其一つをきいて自分は此極東の片田舍に於てもズット昔しの種々の樂しい思出にかへるのである。

此小學校では制服をきない、皆日本服を着て居る、男の子供は藍色のきものを着て、小さい女の子供は蝶々のやうに光つた色々の色のきものを着て居る。きものゝ上に女の子供は袴をはいて居

Bell より取つたものときく。 3. Auld Lang Syne. スコツトランドの方言で オールド、ラング、サイン とよむ、 Old long since と云ふこと、昔しの事、ことに幸福であつた時のこと、 many a charming m:mory にもあたる。

and these are of a vivid, warm sky-blue.[1]

Between the hours of teaching, ten minutes are allowed for play or rest. The little boys play at Demon-Shadows[2] or at blindman's-buff or at some other funny game: they laugh, leap, shout, race, and wrestle, but, unlike European children, never quarrel or fight.[3] As for the little girls, they get by themselves, and either play at hand-ball, or form into circles to play at some round game, accompanied by song. Indescribably soft and sweet the chorus of those little voices in the round.

Kango-kango shō-ya,
Naka yoni shō-ya,
Don-don to kunde
Jizō-San no midzu wo
Matsuba no midzu irete,
Makkuri kaéso.[3]

[註] 1. warm sky-blue. 繪畫の方で赤、黄を基にした色を warm, 青を土臺にした色を cold と云ふが もとより 比較的のことである、こゝでは少し赤なり黄なりを帶びた青空色と云ふことにて今紫、うす紫に當る、當時紫の袴が日本全國に流行した。 2. Demon Shadows 鬼ごつこを こんな風に譯したもの、こんな名の遊戯はなし、花文字で書いたわけも固有名詞のやうにするため、3. 著者は これに註を加へて「かう書いてから二年日本の諸學校

る、そして此袴は鮮やかなうす紫である。

授業時間の間に十分間を休憩なり遊戯なりに與へてある。男の子供は鬼ごつこやかくれんぼうや又はその他の面白い遊戯をする、笑ふ、はね廻る、叫ぶ、駈けつこをする、相撲をとる、けれども歐洲の子供のやうに喧嘩やつかみ合ひはしない。小さい女の子供の方は又別に一處になつて手まりをついたり、又は何か大勢で歌につれて一處に遊戯をするために圓形をつくる。圓くなつて一處に歌ひ合ふ可愛い聲はたとへ難くやさしく又美はしい。

かんごかんごしようや
仲よにしようや
どんどんさくんで
地藏さんの水を
松葉の水入れて
まつくりかへそ

に教師として教へたが一つも學生間の爭闘を見たことがない、すでに八百人程教へ居る」と云つて居る、 4. 東京邊の子供のする「かごめ、かごめ、かごの中の鳥は……」と云ふ遊戯に似たものと云ふ、歌の意味は分らない處あるが「仲よにしようや」は「仲よく致しませう」なるべく「まつくりかへそ」は「ひくつりかえそ」と云ふことのよし。

I notice that the young men, as well as the young women, who teach these little folk, are extremely tender to their charges.[1] A child whose kimono is out of order,[2] or dirtied by play, is taken aside and brushed and arranged as carefully as by an elder brother.

Besides being trained for their future profession by teaching the children of the elementary school, the girl students of the Shihan-Gakkō are also trained to teach in the neighbouring *Kindergarten*. A delightful *Kindergarten* it is, with big cheerful sunny rooms, where stocks of the most ingenious educational toys are piled upon shelves for daily use.

「註」 1. charges 預けられもの、即ち教へて居る生徒。 2. Kindergarten = Garden of children. 外國語なる故にイタリック

自分は此等の生徒を教ふる若い婦人も若い男子も自分等の教へ子には非常にやさしいことを見とめる。遊戯のために着物が亂れたり汚れたりして居る子供はわきへ連れ出されて眞身の兄にされるやうに丁寧にそれを直したり塵をはらつたりして貰ふ。

小學生を教へて彼等の未來の天職の準備とするまだその上に師範學校の女學生はその近くの幼稚園にも教ふることを習ふ。大きな陽氣な日當りのよいいくつかの室のある愉快な幼稚園である、そこでは極めてよい思ひつきの教育玩具が毎日使用するために棚の上に澤山積んである。

でかいてある、Friedrich Frœbel 1782—1852) が始めてつくつたもの。

IV

October 1, 1890.

NEVERTHLESS I am destined to see little of the Normal School. Strictly speaking, I do not belong to its staff:[1] my services being only lent by the Middle School, to which I give most of my time. I see the Normal School students in their class-rooms only, for they are not allowed to go out to visit their teachers' homes in the town. So I can never hope to become as familiar with them as with the students of the Chūgakkō, who are beginning to call me "Teacher" instead of "Sir," and to treat me as a sort of elder brother. (I objected to the word "master,"[2] for in Japan the teacher has no need of being masterful.)[3]

【註】 1. staff 幕僚、屬僚など云ふ意味にもなるがこゝでは職員全體のこと。 2. master 先生のことなれども英語の意味から

四

一八九〇、十月一日

しかし自分は師範學校について知るところ少ないのは止むを得ない。嚴密に云へば自分はその敎官の一員ではない、自分の時間の大部分は此中學校にあるのである。中學校が自分のつとめをたゞ貸して居るに過ぎない。自分は師範學校の生徒は敎室で見るだけである、彼等は松江に於ける先生の私宅を訪ふために外出することは許されないからである。それで自分は中學校の生徒に對するやうに師範學校の生徒に對して親しくなることは望まれない、中學校の生徒は自分に「Sir」(あなた)と呼ばないで先生と呼んで自分を云はゞ兄のやうに遇するやうになりかゝつて居る(自分は敎師(Master)と云ふ字を用ふることを好まない、日本では敎師ぶる必要はないからである)。そ

云へば主人、支配者。 3. masterful 專橫なる、威壓する、我な通す。

And I feel less at home in the large, bright, comfortable apartments of the Normal School teachers than in our dingy, chilly teachers' room at the Chūgakkō, where my desk is next to that of Nishida.

On the walls there are maps, crowded with Japanese ideographs; a few large charts representing zoological facts in the light of evolutional science; and an immense frame filled with little black lacquered wooden tablets,[2] so neatly fitted together that the entire surface is uniform as that of a blackboard. On these are written, or rather painted, in white, names of teachers, subjects, classes, and order of teaching hours; and by the ingenious tablet arrangement any change of hours can be represented by simply changing the places of the tablets. As all this is written in Chinese and Japanese characters, it remains to me a mystery, except in so far as the general plan and purpose are concerned.[3]

【註】 1. dingy きたない、陰氣な。 2. lacquered wooden tablets. 漆で塗つた木の小板、ふだ。 3. so far as ...... are concerned 全體

して自分は師範學校の大きな明るい居心のよい教官室に居るよりも、自分の机が西田氏のと相ならんで居る餘り奇麗でない寒い敎官室に居る方がもつと氣樂である。

壁に日本文字の澤山ある地圖がある、進化論の見方から動物學の事實を示した二三の大きな圖もある、小さい黑い漆塗りの小板のギッシリつまつた大きな枠がある、それがみな一面にはまつて居るから全體の表面が黑板の表面のやうに一樣になつて居る。此等の黑い小板に白く敎師の名、課目、組、時間割など書いてある、むしろ塗つてある、此巧みな板の配列で時間の變りなどは板さへ置き換へれば分る。何れも漢字とカナで書いてあるから、自分には全體の案と目的に關する點を除

の案と目的の關係して居る範圍(そこまでの處は分るがあとは分らない)。

I have learned only to recognise the letters of my own name, and the simpler form of numerals.

On every teacher's desk there is a small hibachi of glazed[1] blue-and-white ware, containing a few lumps of glowing charcoal in a bed of ashes. During the brief intervals between classes each teacher smokes his tiny Japanese pipe of brass, iron, or silver. The hibachi and a cup of hot tea are our consolations for the fatigues of the class-room.

Nishida and one or two other teachers know a good deal of English, and we chat together sometimes between classes. But more often no one speaks. All are tired after the teaching hour, and prefer to smoke in silence. At such times the only sounds within the room are the ticking of the clock, and the sharp clang of the little pipes being rapped upon the edges of the hibachi to empty out the ashes.

【註】 1. glazed 藥をかけて燒いてある、即ち素燒でない。

いてあとは分らない。自分は自分の名の文字と數字のやさしいのだけしか學んで居ない。

銘々の先生の机に藥のかゝつた青白色の瀬戸物の小さい火鉢がある、火床に少しの赤い火がはいつて居る。しばらくの休憩時間に各教師は眞鍮、鐵、銀の小さいキセルでタバコを吸ふて居る。此火鉢とあつい茶の一杯は教場の疲勞を慰むるのである。

西田氏と外に一二人の教師は英語が達者なので自分等は此休み時間に時々談笑するが大概は皆默つて居る。何れも授業時間で疲勞するから默つてタバコを吸ふ方を好む。こんな時には聞えるものは時計のひゞきと火鉢のふちで吹がらを落す小さいキセルの鋭い音ばかりである。

V

October 15, 1890.

TO-DAY I witnessed the annual athletic contests (*undō-kwai*) of all the schools in Shimane Ken.[1] These games were celebrated in the broad castle grounds of Ninomaru. Yesterday a circular race-track had been staked off,[2] hurdles[3] erected for leaping, thousands of wooden seats prepared for invited or privileged spectators,[4] and a grand lodge[5] built for the Governor, all before sunset. The place looked like a vast circus, with its tiers of plank seats rising one above the other,[6] and the Governor's lodge magnificent with wreaths and flags. School children from all the villages and towns within twenty-five miles had arrived in surprising multitude. Nearly six thousand boys and girls

【註】 1. 島根縣全體の學校は少し大げさ。 2. stake off 杭で仕切る。 3. hurdles 跳越用の垣、hurdlerace などいふときの hurdle.

五

一八九〇、十月十五日

自分は今日島根縣全體の學校の例年の運動會を見た。此競技は二の丸の城内の大廣場で行はれた。昨日圓形の競走場は仕切られ、高飛びのためにシガラミは建てられ、參觀人や來賓のために數百の木の腰かけは準備せられ、見事な假屋は知事のために設けられた、何れも日暮までに成就した。周圍は板の腰かけの層で段々と高くなり、知事の席には飾りや旗のある此運動場は廣大なる圓戲場のやうに見える。十里以内の町村から集つた學童の數は驚くべき數である。殆んど六千の男女の生徒は此競爭に加はるために集まつた。兩

4 invited or privileged spectators 招かれた或は特權のある見物人。
5. lodge 假屋、小屋， 6. one above the other 一段一段と高く。

were entered to take part in the contests Their parents and relatives and teachers made an imposing[1] assembly upon the benches and within the gates. And on the ramparts overlooking the huge enclosure a much larger crowd had gathered, representing perhaps one third of the population[2] of the city.

The signal to begin or to end a contest was a pistol-shot. Four different kinds of games were performed in different parts of the grounds at the same time, as there was room enough for an army; and prizes were awarded to the winners of each contest by the hand of the Governor himself.

There were races between the best runners in each class of the different schools; and the best runner of all proved to be Sakane,[3] of our own fifth class, who came in first by nearly forty yards without seeming even to make an effort. He is our champion athlete, and as good as he is strong,—so that it made

【註】 1. imposing 仰山なる。 2. 當時(明治二十三年頃)は松江

親、親戚、教師は腰かけの上や門の内で非常な群集をなして居た。此一大區劃を見下せる城壁の上には、恐らくこれだけで松江市の人口の三分の一にも當る程の更に大多數の群集が集まつて居た。

各競技の始めと終りの合圖はピストルの發射であつた 此運動場内は一軍團をも容るゝ程の廣さがあるから、各所に同時に四種の運動が行はれた、そして賞品は知事手づから各競爭の勝利者に授けた。

各學校の各組に於ける撰手競爭があつた、全體のうちで自分等の五年級の坂根が一等ときまつた、坂根は綽々たる餘裕あるが如く四十ヤードも他に先んじて決勝點に入つた。彼は自分等の學校の運動撰手である、强壯であるが同時に温良であ

市の人口は二萬七八千程ありしならん。 3· 坂根。

me very happy to see him with his arm full of prize books. He won also a fencing contest decided by the breaking of a little earthenware saucer tied to the left arm of each combatant. And he aslo won a leaping match between our older boys.

But many hundreds of other winners there were too, and many hundreds of prizes were given away. There were races in which the runners were tied together in pairs, the left leg of one to the right leg of the other.[1] There were equally funny races, the winning of which depended on the runner's ability not only to run, but to crawl, to climb, to vault,[2] and to jump alternately.[3] There were races also for the little girls,—pretty as butterflies they seemed in their sky-blue hakama and many-coloured robes,—races in which the contestants had each to pick up as they ran three balls of three different colours out of a number scattered over the turf. Besides this, the

【註】 1. 二人三脚のこと。 2. to vault 手をかけたり、竿をつい

る、それで自分は彼が兩腕に一杯賞品の書物をかゝへて居るのを見て甚だ嬉しく思つた。彼は各劍士の左腕に結びつけた小さい土器を割るので勝負のきまる擊劍の仕合にも勝つた。又彼は大きな生徒のうちに入つて跳躍の競爭にも勝つた。

しかし勝利者は外にも數百人あつた、そして數百の賞品は與へられた。一人の左足と一人の右足とを結び合せて二人づゝになつて走る競爭もあつた。同じく奇妙な競爭があつた、此競爭に勝つためには走るばかりでなく交る交る這うたり、よぢ上つたり、跳びこえたり、飛んだりする技倆によらねばならない。少女の競爭もあつた(空色の袴とさまざまの色の着物をきて蝶々のやうに美しく見えた)、競走者は芝生に散らしてある無數の球のうちから色のちがつた球を三つ拾ふて走らねばならないと云ふのであつた。此外に少女の所

たりしてとびこえること　3. 障礙物競走のこと。

little girls had what is called a flag-race, and a contest with battledores and shuttlecocks.[1]

Then came the tug-of-war.[2] A magnificent tug-of-war, too,—one hundred students at one end of a rope, and another hundred at the other. But the most wonderful spectacles of the day were the dumb-bell exercises. Six thousand boys and girls, massed in ranks[3] about five hundred deep; six thousand pairs of arms rising and falling exactly together; six thousand pairs of sandalled feet advancing or retreating together, at the signal of the masters of gymnastics, directing all from the tops of various little wooden towers; six thousand voices chanting at once the "one, two, three," of the dumb-bell drill: "*Ichi, ni,—san, shi,—go, roku,—shichi, hachi.*"

Last came the curious game called "Taking the Castle." Two models of Japanese towers, about fifteen feet high, made with paper stretched over a framework of bamboo,

〔註〕 1. battledores and shuttlecocks 羽子板と羽根。 2. tug-of-war

謂旗競爭もあつた、それから羽根をつく仕合もあつた。

つぎに綱引があつた。しかも綱の一方に百人、他方に百人の大きな綱引であつた。しかし此日の最も賛歎すべき運動は啞鈴體操であつた。五百人程のあつさの列をつくつた六千の男女の生徒が方々の小さい木造の塔から一同を指揮せる體操教師の合圖に随つて、一萬二千の腕が全く同時に上下し、一萬二千の草履をはいた足が進んだり退いたりした、六千の聲が同時にそろふて啞鈴體操の「一、二、三」を唱へて居た、「一、二、一三、四、一五、六、一七、八」

最後に「城の取りあひ」といふ珍らしい仕合になつた。竹の枠(ワク)に紙をはつた一丈五尺程の日本の塔の二つの模型が場内の各一方に建てられた。城

綱引。 3. ranks 横列隊、file 側面縦隊。

were set up, one at each end of the field. Inside the castles an inflammable liquid had been placed in open vessels, so that if the vessels were overturned the whole fabric would take fire. The boys, divided into two parties, bombarded the castles with wooden balls, which passed easily through the paper walls; and in a short time both models were making a glorious blaze. Of course the party whose castle was the first to blaze lost the game.

The games began at eight o'clock in the morning, and at five in the evening came to an end. Then at a signal fully ten thousand voices pealed out the superb national anthem, "*Kimi ga yo*," and concluded it with three cheers for their Imperial Majesties, the Emperor and Empress of Japan.

The Japanese do not shout or roar as we do when we cheer. They chant. Each long cry is like the opening tone of an immense musical chorus; *A-a-a-a-a-a-a-a!*

の内部に蓋のない器に燃燒液があつた、もし此器がくつがへれば全建築が火になるわけである。二組に分れた少年が紙の壁を造作なくつき破る木の球で城を砲擊した、忽ちのうちに兩方の塔が盛んに火焰を上げた。勿論さきに城の燒けた方が此仕合に負けたのであつた。

運動は午前八時に始まり、午後五時に終つた。それから合圖に隨つて一萬の聲が壯嚴な「君が代」を歌ひ出した、そして日本の天皇及び皇后兩陛下の萬歲を三唱して終りを告げた。

日本人は自分等の歡聲を上げる時のやうに叫んだり、どなつたりはしない。日本人のは歌ふのである。長い叫びは何れも大きな音樂の合唱の初めの調子のやうに「アアアアアアアアア」である。

VI

IT is no small surprise to observe how botany, geology, and other sciences are daily taught even in this remotest part of old Japan. Plant physiology and the nature of vegetable tissues are studied under excellent microscopes, and in their relations to chemistry; and at regular intervals the instructor leads his classes into the country to illustrate the lessons of the term by examples taken from the flora of their native place. Agriculture, taught by a graduate of the famous Agricutural School[1] at Sapporo, is practically illustrated upon farms purchased and maintained by the schools for purely educational ends. Each series of lessons in geology is supplemented by visits to the mountains about the lake,[2] or to the tre-

【註】 1. 札幌農學校、今の札幌の東北大學農科大學の前身。

六

舊日本の此最も偏僻な地方にでも、植物學、地質學その他の科學が日々敎へらるゝ有樣を見ることは頗る驚くべきである。植物生理學や植物の組織の性質は立派な顯微鏡の下に研究される、しかも化學と關係して硏究されて居る、そして一定の時期に敎師は各級を田舍に率ゐて標本となるべきその地方の花卉草木を採集してその學期の課業を說明する。有名なる札幌農學校の卒業生の敎ふる農學は全く敎育の目的で學校が買ふて維持して居る田畠で實際に說明される。地質學の課業は湖水の近傍の山々又は海岸の恐るべき斷岸

2. the lake 宍道湖。

mendous cliffs of the coast,[1] where the students are taught to familiarise themselves with forms of stratification and the visible history of rocks. The basin of the lake, and the country about Matsue, is physiographically studied, after the plans of instruction laid down in Huxley's[2] excellent manual. Natural History, too, is taught according to the latest and best methods, and with the help of the microscope. The results of such teaching are sometimes surprising. I know of one student, a lad of only sixteen, who voluntarily collected and classified more than two hundred varieties of marine plants for a Tōkyō professor. Another, a youth of seventeen, wrote down for me in my note-book, without a work of reference at hand, and, as I afterward discovered, almost without an omission or error, a scientific list of all the butterflies to be found in the neighbourhood of the city.

【註】 1. the coast 出雲の海岸には潜戸(くけど)新潜戸など云ふ日本でも有名な絶壁や洞窟あり。 2. Huxley (1825—1895) は有

絶壁を訪れて參考とされる、そこでは學生は地層の形狀又は岩石の歷史のそこにあらはれたるものを親しく學ぶ。湖水を入るゝ凹地層及び松江近傍の地方はハックスレーのすぐれたる小冊子に示してある敎案に隨つて地相學的に研究するところとなつて居る。生物學も又最新最良の方法によつて、又顯微鏡の助けによつて敎へられて居る。かくの如き敎授の結果は時に驚くべきものがある。自分は一人の生徒僅か十六歲の少年が自ら進んである東京の大學敎授のために海產植物の二百種以上を集めて分類したのを知つて居る。又一人、十七歲の少年が手近に一冊の參考書もなく、そして後に自分の發見したところでは一つの誤りも、とり落しもなく、自分のために松江の近傍で見出さるゝ凡ての蝶類の科學的目錄を自分の手帳に書いてくれた。

名なる生 學者、(生物學者なるが故に化石、その他の研究より physiography の著述あり)。

VII

THROUGH the Minister of Public Instruction, His Imperial Majesty has sent to all the great public schools of the Empire a letter bearing date of the thirtieth day of the tenth month of the twenty-third year of Meiji. And the students and teachers of the various schools assemble to hear the reading of the Imperial Words on Education.

At eight o'clock we of the Middle School are all waiting in our own assembly hall for the coming of the Governor, who will read the Emperor's letter in the various schools.

We wait but a little while. Then the Governor comes with all the officers of the Kenchō and the chief men of the city. We rise to salute him: then the national anthem is sung.

七

文部大臣をへて、陛下は明治二十三年十月三十日の日附の勅語を帝國のあらゆる公立學校に賜はつた。そこで各種の學校の學生教師集つて教育勅語の捧讀をきくのである。

八時に中學校の自分等は、中學校の講堂に集つて知事の來校をまつて居る、知事は各種の學校でこれから勅語を讀むのである。

まつこと只暫らくにして、知事は縣廳の凡ての官吏と松江市民の重なるものを率ゐて來る。一同起立して知事に挨拶する、つぎに國歌は合唱される。

Then the Governor, ascending the platform, produces the Imperial Missive,—a scroll of Chinese manuscript sheathed[1] in silk. He withdraws it slowly from its woven envelope, lifts it reverentially to his forehead, unrolls it, lifts it again to his forehead, and after a moment's dignified pause begins in that clear deep voice of his to read the melodious syllables after the ancient way, which is like a chant:—

"*CHO-KU-GO.*"[2] *Chin omommiru ni waga kôso kôsô kuni wo. . . .*

"We consider that the Founder of Our Empire and the ancestors of Our Imperial House placed the foundation of the country on a grand and permanent basis, and established their authority on the principles of profound humanity and benevolence.

"That Our subjects have throughout ages deserved well of the state[3] by their loyalty and

【註】 1. sheathed 包んである、覆ふてある。 2. 此勅語の英譯は當時東京で發行された The Museum と云ふ雜誌にあつたのをこゝにとつたものゝよし、これは著者の斷りなり。 3. to deserve well

それから知事は壇に上つて勅語を取り出す、絹表装の巻物になつた漢字交りの書きものである。知事は徐ろに織物の包装からこれを引き出して恭しく額に捧げ、これをほどいて再び又額に捧げ、しばらく厳粛に一息ついて後、彼の朗らかな深い聲で流暢なる辭句を古風な讀み方で讀み初める、その讀み方は一種歌のやうである—

「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク

of the state (厥ノ美ヲ濟セル) 國家に功勞ある、國家から賞せらるべき。

piety and by their harmonious co-operation is in accordance with the essential character of Our nation; and on these very same principles Our education has been founded.

"You, Our subjects, be therefore filial to your parents; be affectionate to your brothers; be harmonious as husbands and wives; and be faithful to your friends; conduct yourselves with propriety and carefulness; extend generosity and benevolence towards your neighbours; attend to your studies and follow your pursuits; cultivate your intellects and elevate your morals; advance public benefits and promote social interests; be always found in the good observance[1] of the laws and constitution of the land; display your personal courage and public spirit for the sake of the country whenever required; and thus support the Imperial prerogative,[2] which is coexistent with the Heavens[3] and the Earth.

"Such conduct on your part will not only

【註】 1. observance 守ること。 2. prerogative 帝王の大權、特權。 3. Heaven が複數の時は多く天の意味になり、單數の時は

孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此

レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ

存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋

友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修

メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ

公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵

ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ

皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣

民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス

多く天國、神、の意味になる。

strengthen the character of Our good and loyal subjects, but conduce also to the maintenance of the fame of your worthy forefathers.

"This is the instruction bequeathed by Our ancestors and to be followed by Our subjects; for it is the truth which has guided and guides them in their own affairs and in their dealings towards aliens.

"We hope, therefore, We and Our subjects will regard these sacred precepts with one and the same heart in order to attain the same ends."

Then the Governor and the Head-master speak a few words,—dwelling upon[1] the full significance of His Imeperial Majesty's august commands, and exhorting all to remember and to obey them to the uttermost.[2]

After which the students have a holiday, to enable them the better to recollect what they have heard.

【註】 1. to dwell upon = to speak about at great length or with great fullness. 長く又は詳しく說く。 2. to the uttermost = to the

ルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

それから知事と校長は短い話しをする、勅語の深い意味について注意し、かつ一同にこれを記憶し且つ固く守るべきことをすゝめる。

そのあとで生徒は其日休みとなる、すでに聞いたところを一層よく反省するためである。

---

highest degree. 極度に。

VIII

ALL teaching in the modern Japanese system of education is conducted with the utmost kindness and gentleness. The teacher is a teacher only: he is not, in the English sense of mastery, a master. He stands to his pupils in the relation of an elder brother. He never tries to impose his will upom them: he never scolds, he seldom criticises, he scarcely ever punishes. No Japanese teacher ever strikes a pupil: such an act would cost him his post at once. He never loses his temper:[1] to do so would disgrace[2] him in the eyes of his boys and in the judgment of his colleagues. Practically speaking, there is no punishment in Japanese schools. Sometimes very mischievous lads are kept in the schoolhouse during recreation

【註】 1. to lose one's temper 怒る。 2. to disgrace = to put to

八

近代日本の敎育制度では凡て敎育は極めて親切に温和に施される。敎師は只敎師である、英語の意味で云ふマスターと云ふものに當らない。生徒に對してたゞ先生即ち兄の關係を有するだけである。敎師は生徒に對して自分の意志を押し通さうとはしない、罵ることは決してしない、批評がましいことも餘りしない、罰することも餘りない。日本の敎師で生徒を打つものは決してない、そんな事をしたら其人は直ちに自分の位置を捨てねばならない。敎師は決して怒らない、もし怒つたら生徒の面前及び同僚の心中に自分の價値を下げることになる。實際日本の學校には罰はない。時々大のイタヅラものが休憩時間に校舍內に

shame, to dishonor. 面目を失はしむる、恥をかゝす。

time; yet even this light penalty is not inflicted directly by the teacher, but by the director of the school on complaint of the teacher. The purpose in such cases is not to inflict pain by deprivation of enjoyment, but to give public illustration[1] of a fault; and in the great majority of instances, consciousness of the fault thus brought home[2] to a lad before his comrades is quite enough to prevent its repetition. No such cruel punition as that of forcing a dull pupil to learn an additional task, or of sentencing him to strain his eyes copying four or five hundred lines, is ever dreamed of. Nor would such forms of punishment, in the present state of things, be long tolerated by the pupils themselves. The general policy of the educational authorities everywhere throughout the empire is to get rid of[3] students who cannot be perfectly well managed without punishment; and expulsions, nevertheless, are rare.

【註】 1. illustration=example 例示。 2. home 心底まで、しつ

留め置かれることもある、しかも此輕い罰も直接教師が課するのではない、教師の苦情をきいて校長が課するのである。こんな場合でもその目的のあるところは娯樂を奪ふて苦痛を與ふるのでなく、一過失を示して一般の戒めとするに過ぎない、そして多數の例によれば、一人の少年が自分の仲間の前で自分の過失を深く自覺せしめらるゝことは、過失をくりかへすことを妨ぐるだけの力は充分ある。鈍い生徒に餘計の課業を强ゆるやうな或は四五百行を寫して眼を勞せしむるやうな殘酷な罰は夢にも見られない。又かりにこんな種類の罰則があつたとしても現在の狀態ではもはや生徒自身が許して存し置かないであらう。日本國中到るところの教育當局者の大概のやり方は罰しでもしなければ充分に制し切れない生徒はその學校に置かないのである、しかし放校と云ふこともまれにしかない。

かりさ。 3. to get rid of—to free one's self from. 追ひ拂ふ。

I often see a pretty spectacle on my way home from the school, when I take the short cut[1] through the castle grounds. A class of about thirty little boys, in kimono and sandals, bareheaded, being taught to march and to sing by a handsome young teacher, also in Japanese dress.[2] While they sing, they are drawn up[3] in line; and keep time[4] with their little bare feet.[5] The teacher has a pleasant high clear tenor:[6] he stands at one end of the rank and sings a single line of the song. Then all the children sing it after him. Then he sings a second line, and they repeat it. If any mistakes are made, they have to sing the verse again.

It is the Song of Kusunoki Masashigé, noblest of Japanese heroes and patriots.

【註】 1. cut 近道、横斷路。 2. 此一文章は不完全になつたまゝにしてある。 3. to draw up 整列する。 4. to keep time 足拍子

學校から家に歸る道すがら城内の廣場を通つて近路をする時に自分は屢々美はしいものを見る。着物をきて、草履をはいて、帽子を冠らない三十人ばかりの小さい少年の一組がやはり日本服をきた立派な若い日本の教師に行進しかつ歌ふことを習つて居る。歌ふ時に列をつくつてそして小さい素足で拍子をとつて居る。教師は愉快なハツキリした高調子の聲の人である、列の一方に立つて歌を一行づゝ歌ふ、つぎに凡ての少年がそれにならつてそれを歌ふ。今度はそのつぎの一行を歌ふ、又それを一同がくりかへす。もしまちがへは又改めてその歌を歌ひ直さねばならない。

それは日本の英雄愛國者のうちの最も貴い楠正成の歌である。

を合せる、拍子を合せて歌ふ。 5. bare feet 素足、sandals（草履）をはいて居るが足袋はないから。 6. tenor 男子の高い調子の聲。

IX

I HAVE said that severity on the part of teachers would scarcely be tolerated by the students themselves,—a fact which may sound strange to English or American ears. Tom Brown's school[1] does not exist in Japan; the ordinary public school much more resembles the ideal Italian institution so charmingly painted for us in the "Cuore" of De Amicis.[2] Japanese students furthermore claim and enjoy an independence contrary to all Occidental ideas of disciplinary necessity. In the Occident the master expels the pupil. In Japan it happens quite as often that the pupil expels the master. Each public school is an earnest, spirited little republic, to which director and teachers stand

【註】 1. Tom Brown's school, Thomas Hughes (1823—97) の小說 Tom Brow 's School-days に表はれた Rugby の學生生活、それには爭闘も友情も、惡戯も勉强もある。 2. Cuoré これは日本にも

九

自分は敎師の方で嚴に失すること あれば學生の方で中々容赦しないと云つて置いたが此事は英人や米人の耳に變にきこえるかも知れない。トム、ブラウンの學校は日本に存在しない、それより通常の公立學校は、デ、アミチスの「クオレ」にあんなに面白く寫してある理想的以太利の學校によほど似て居る。其上日本の生徒は一種の獨立をうけて居てそれを當然と心得て居る、これは西洋の人が嚴しい訓練に必要と考へて居ることゝ全く反對のことである。西洋では敎師は生徒を放校するが、日本では丁度それ程生徒が敎師を放逐することがある。各公立學校は熱心な元氣のよい小共和國で校長と敎師はそれに對して單に大統領

「愛の學校」「學窗日誌」など種々の飜譯あり、抜萃もありて人の知るところ、イタリーの小說家 Edmondo De Amicis (1846——)の作。

only in the relation of president and cabinet. They are indeed appointed by the prefectural government upon recommendation by the Educational Bureau at the capital; but in actual practice they maintain their positions by virtue of their capacity and personal character as estimated by their students, and are likely to be deposed by a revolutionary movement whenever found wanting.[1] It has been alleged that the students frequently abuse their power. But this allegation has been made by European residents, strongly prejudiced in favour of[2] masterful English ways of discipline. (I recollect that an English Yokohama paper, in this connection, advocated the introduction of the birch.[3]) My own observations have convinced me, as larger experience has convinced some others,[4] that in most instances of pupils rebelling against a teacher, reason is upon their side. They will

【註】 1. whenever found wanting 缺乏せりと見出さるゝ時はいつでも。 2. st·ongly prejudiced in favour of ...... をひいきして、……の味方をして、ひどく偏見を抱いた……。 3. birch かばの

と內閣の關係を有するのである。實際校長と敎師は東京の文部省の推薦によつて縣廳が任命したのではあるが事實に於ては彼等の能力及び人格が學生によつて認められて初めてその位地を維持するのである、もし能力なり人格なりに缺くるところがあると思はれる場合には一種の革命的運動によつて放逐されがちである。生徒は彼等の力を時々亂用するとよく云はれて居る。しかし此說は嚴格なる英國風の訓練を非常に過信して居る西洋人の口から出るのである。（これについて、橫濱の一英字新聞が樫の棒主義を輸入することを主張したことを思ひ出す。）自分の觀察は自分につぎのことを知らしめた、そして多く經驗をつんだ他の人々もさう信じて居る、即ち敎師に反抗する生徒の大概の場合に於て道理が生徒側にあ

木の杖、即ちそれでなぐること、體罰、英國の學生は餘程大きくなるまで體罰をうける。 4 もつと大きな經驗が他の人々を悟らしめたやうに。

rarely insult a teacher whom they dislike, or cause any disturbance in his class: they will simply refuse to attend school until he be removed. Personal feeling may often be a secondary, but it is seldom, so far as I have been able to learn, the primary cause for such a demand. A teacher whose manners are unsympathetic, or even positively disagreeable, will be nevertheless obeyed and revered while his students remain persuaded[1] of his capacity as a teacher, and his sense of justice; and they are as keen to discern ability as they are[2] to detect partiality. And, on the other hand, an amiable disposition alone will never atone with them either for want of knowledge or for want of skill to impart it.[3] I knew one case, in a neighbouring public school, of a demand by the students for the removal of their professor of chemistry. In making their complaint, they frankly declared: "We like him.

【註】 1. remain persuaded 納得して居る…得心してある…。 2. they are のつぎに keen を入れて見る。 3. … will never atone with them either for want of knowledge or for want of skill to

るのである。生徒が嫌いな教師を侮辱したり、或は教場で邪魔をしたりすることは殆んどない、たゞその教師の止められるまでは學校に出ないのである。個人的感情は自分の知り得る限りではこんな要求の第二の原因となることは時にはあるかも知れぬが第一原因となることは殆んどない。擧動が冷淡であるとか、或は更に進んで不親切であると云はれる教師でも、教師としての資格、或は公平の念があると生徒の信じて居るうちは、生徒はその教師に服し又尊敬する、そして生徒は教師の不公平を發見するに鋭敏なると共に、その才能を認むことも鋭敏である。又一方に於ては教師の性質がよいと云ふだけでは智識の不充分なこと及び智識を傳へる熟練の不足と云ふことを償ふことにはならない。自分は近傍のある公立學校で化學の教諭を止めて貰ひたいと生徒の要求した例を聞いた。此不平を述べる時、彼等は打明けて云つた「私共は此先生が好きです。先生は親切

impart it. atone for は償ふ、with them は學生等に取つては、it は knowledge 學生等にとつては智識の缺乏と智識を傳へる熟練の不足を償ふにたりない。

He is kind to all of us; he does the best he can. But he does not know enough to teach us as we wish to be taught. He cannot answer our questions. He cannot explain the experiments which he shows us. Our former teacher could do all these things. We must have another teacher." Investigation proved that the lads were quite right. The young teacher had graduated at the university; he had come well recommended: but he had no thorough knowledge of the science which he undertook to impart,[1] and no experience as a teacher. The instructor's success in Japan is not guaranteed[2] by a degree,[3] but by his *practical* knowledge and his capacity to communicate it simply and thoroughly.

〔註〕 1. to impart=to communicate. 傳へる、教へる。 2. to guar-

です。先生のできるだけをつくし居られるのです。が先生は私共の習ひたいと思ふだけ私共に敎へることはできません。質問に答へることができません。先生のなさる實驗の說明ができません。前の先生はこんなことは皆できました。私共は別の先生が欲しいのです。」調べて見ると生徒側の云ひ分は全く事實ときまつた。此若い敎師は大學の卒業生であつた。よい推薦を受けて來たのであるが敎へようとする科學の周到なる智識と敎師としての經驗とを缺いて居た。日本では敎師は學位があるので成功するとはきまらない、たゞ實際の智識とその智識を容易に又充分に傳へる技倆とによつて成功するのである。

antee = to make sure or certain. 保證する。 3. a degree 學位。

X

November 3, 1809.

TO-DAY is the birthday of His Majesty the Emperor. It is a public holiday throughout Japan; and there will be no teaching this morning.[1] But at eight o'clock all the students and instructors enter the great assembly hall of the Jinjō Chūgakkō to honour the anniversary of His Majesty's august[2] birth.

On the platform of the assembly hall a table, covered with dark silk, has been placed and upon this table the portraits of Their Imperial Majesties, the Emperor and the Empress of Japan, stand side by side upright, framed in gold. The alcove[3] above the platform has been decorated with flags and wreaths.

【註】 1. this morning 今日と云ふ程のこと、morning は正午まで。

十

一八九〇、十一月三日

今日は天皇陛下の誕生日である。日本國中の大祭日である、此日は授業はない。が八時に學生教師悉く天長節を祝するために尋常中學校の大講堂に集まる。

講堂の教壇に黒い絹をかけたテーブルが置いてある、此テーブルの上に天皇、皇后兩陛下の御眞影が金の枠に入れて相ならべて眞直に安置してある。教壇の上になつた部分は旗と花環で装飾してある。

一 august 尊き、敬語なり。 二 alcove 床の間のやうになつた部分。

Presently the Governor enters, looking like a French general in his gold-embroidered uniform of office, and followed by the Mayor of the city, the Chief Military Officer, the Chief of Police, and all the officials of the provincial government. These take their places in silence to left and right of the platform. Then the school organ suddenly rolls out the slow, solemn, beautiful national anthem; and all present chant those ancient syllables, made sacred by the reverential love of a century of generations:—

Ki-mi ga-a yo-o wa
Chi-yo ni-i-i ya-chi-yo ni sa-za-ré
I-shi no
I-wa o to na-ri-te
Ko-ke no
Mu-u su-u ma-a-a-dé.[2]

The anthem ceases. The Governor advances with a slow dignified step from the right side of the apartment to the centre of

【註】 1. a century of generations. 百代、one generation は凡そ百年の三分の一、又は三十年を云ふ故に約三千年。 2. 著者の英譯 "May Our Gracious Sovereign reign a thousand years,—reign ten

そのうちに市長、聯隊區司令官、警部長、その他凡ての縣官を引きつれて知事がくる、金モールの大禮服をつけた知事はフランスの將官のやうに見ゆる。此等の人々は敎壇の左右に默して坐につく。つぎに學校のオルガンが突然ゆるやかな嚴肅な美はしい國歌を奏し初むる、凡ての列席者は百代の敬愛をうけて尊くなつて居るこの古への歌句をうたふ。

きみがあ世をは
　ちよにいいやちよにさざれー
　　いしの
いわをさなりて
　　こけの
　むうすうまあおで

國歌が終る。知事は講堂の右側から徐々たる威嚴のある步調で敎壇と御眞影の前方の場所の中

thousand years,—reign till the little stone grow into a mighty rock thick-velveted with ancient moss!"

the open space before the platform and the portraits of Their Majesties, turns his face to them, and bows profoundly. Then he takes three steps forward toward the platform, and halts, and bows again. Then he takes three more steps forward, and bows still more profoundly. Then he retires, walking backward six steps, and bows once more. Then he returns to his place.

After this the teachers, by parties of six, perform the same beautiful ceremony. When all have saluted the portrait of His Imperial Majesty, the Governor ascends the platform and makes a few eloquent remarks[1] to the students about their duty to their Emperor, to their country, and to their teachers. Then the anthem is sung again; and all disperse to amuse themselves for the rest[2] of the day.

【註】 1. remarks 演說、言。 2. the rest そのあと、殘り。

央に進み、御眞影に向つて鄭重なる敬禮をする。つぎに教壇の方へ三歩進んで止り、再び敬禮する。つぎに更に三歩進んで最敬禮をする。つぎに六歩退いて又敬禮をする。それから席にかへる。

そのあとで教師は六人づゝ同じ美はしい敬禮をする。悉く御眞影に對して敬禮を終つた時、知事は壇に上つて生徒に向ひ、天皇、國家、及び教師に對する學生の本分について少しの巧妙なる注意を與ふ。それから再び國歌をうたふ、そして一同はその日の殘りを面白く過さうとして退散する。

XI

March 1, 1891.

THE majority of the students of the Jinjō Chūgakkō are day-scholars only (*externes*, as we would say in France): they go to school in the morning, take their noon meal at home, and return at one o'clock to attend the brief afternoon classes. All the city students live with their own families; but there are many boys from remote country districts who have no city relatives, and for such the school furnishes boarding-houses, where a wholesome moral discipline is maintained by special masters.[1] They are free, however, if they have sufficient means, to choose another boarding-house (provided[2] it be a respectable one), or to find

【註】 1. special masters 舍監など云ふ人々が特に世話をする故か

十一

一八九一、三月一日

尋常中學校の生徒の過半數はたゞ通學生（フランスでならエキステルンと云ふところだ)である。午前學校に行き、正午に歸りて晝飯をたべ、再び短い午後の課業に出るために一時にかへる。市の生徒は悉くその家庭に居るが市中に親戚をもたない偏僻な田舍から來て居る多數の生徒がある、そこでこれ等のために學校には寄宿舍の設けがある、そこでは特別な敎師が居て健全な道德的訓練を行ふて居る。しかし餘力あつて別に下宿（但し風儀のよいものに限る）を選ぶことも又はどこかよい家庭に宿を求むることも彼等の自由に任

く云ふ。 2. provided = on condition もし……なれば。

quarters[1] in some good family; but few adopt either course.

I doubt whether in any other country the cost of education—education of the most excellent and advanced kind—is so little as in Japan. The Izumo student is able to live at a figure[2] so far below the Occidental idea of necessary expenditure that the mere statement of it can scarcely fail to surprise the reader. A sum equal in American money to about twenty dollars[3] supplies him with board and lodging *for one year.* The whole of his expenses, including school fees, are about seven dollars[4] a month. For his room and three ample meals a day he pays every four weeks only one yen eighty-five sen,—not much more than a dollar and a half in American currency.[5] If very, very poor, he will not be obliged to wear a uniform; but nearly all students of the higher classes do wear uniforms, as the cost

〔註〕 1. quarters 宿所、寓所。 2. figure = price 値段。 3. 此 twenty dollars は二十圓、當時は下前料一ヶ月一圓五十錢程であつた、寄宿舍では一圓八十五錢なりしさつぎに記される。 4 そ

せてある、しかし此二つの何れかを選ぶものは餘りない。

自分は日本程教育の費用が安價なるところは何れの國にかあらうかと疑ふ。しかも其教育は最も優秀なるそして進歩した教育である。出雲の學生は、それを記述しただけで讀者を驚かすこと疑を容れない程、西洋人の必要なる費用なるものの考よりも遙かに少い金額で生活することを得るのである。米貨殆んど二十弗に相應する高があれば一ヶ年の下宿料に充分である。授業料をこめて一切の費用は一ヶ月七弗程である。間代と一日三度の充分なる食事のために四週間毎に一圓八十五錢を拂ふに過ぎない。即ち米貨一弗半よりも多くはない。もし非常に貧窮なれば制服を着るにも及ばない、しかし上級の殆んど凡ての生徒は制服を

れ故 seven dollars 即ち七圓は勿論過大なり。 5. currency 通貨、時價、相場。

of a complete uniform, including cap and shoes of leather, is only about three and a half yen for the cheaper quality. Those who do not wear leather shoes, however, are required, while in the school, to exchange their noisy wooden geta for zori or light straw sandals.

つけて居る、帽、革の靴をこめて一切の制服の費用は安い方にすれば三圓半程にすぎない。革の靴をつけないものは學校にある時騒々しい下駄を輕い草履にはきかへねばならない。

XII

BUT the mental education so admirably imparted in an ordinary middle school is not, after all, so cheaply acquired by the student as might be imagined from the cost of living and the low rate of school fees. For Nature exacts a heavier school fee, and rigidly collects her debt—in human life.[1]

To understand why, one should remember that the modern knowledge which the modern Izumo student must acquire upon a diet of boiled rice and bean-curd was discovered, developed, and synthetised by minds strengthened upon a costly diet of flesh. National underfeeding[2] offers the most cruel problem which the educators of Japan must solve in

【註】 1. 月謝や生活費は安いが勉學のために健康を害し、若死にするものある故結局高くつくといふ意味である。

十二

しかし尋常中學校に於てさほど立派に與へらるゝ知育は、結局、生活の安いこと、授業料の安いことなどから想像せらるゝやうに、さほど安くは得られない。即ち自然は更に高い授業料を要求して、嚴重に、人の生命に於てその負債をとり立てるからである。

この道理を理解するためには、先づ現今の出雲の學生が米飯と豆腐を喰べながら學ばねばならない近世の學問は贅澤なる肉食によつて強健になつた頭腦によつて發明され發達され總合されたのであることを知らねばならない。西洋が日本になげ與へた文明を消化することが充分できるためには、一般の疎食と云ふことは日本の教育者が

2. underfeeding 不十分なる喰物。

order that she may become fully able to assimilate the civilisation we have thrust upon her. As Herbert Spencer has pointed out, the degree of human energy, physical or intellectual, must depend upon the nutritiveness of food; and history shows that the well-fed races have been the energetic and the dominant.[1] Perhaps mind will rule in the future of nations;[2] but mind is a mode of force, and must be fed—through the stomach.[3] The thoughts that have shaken the world were never framed upon bread and water: they were created by beefsteak[4] and mutton-chops,[5] by ham[6] and eggs, by pork[7] and puddings,[8] and were stimulated by generous[9] wines, strong ales, and strong coffee. And science also teaches us that the growing child or youth requires an even more nutritious diet than the adult; and that the student especially needs

【註】 1. dominant 優勢の。 2. mind will rule ...... 將來は體力よりも腦力が支配するようにならう。 3. mind is a mode of force, ... 腦力さても一種の活力なれば、よいものを喰べないではよい智慧も出ない。 4. beefsteak 燒いた牛肉のきれ。 5. mutton-

解かねばならない難問題である。ハーバート、スペンサーが示した通り人間の元氣の多少は肉體的精神的何れを問はず喰物の滋養如何によるものである、そして歴史は美喰の人種は氣力旺盛で、且つ、優勝なることを示してゐる。列國民の將來に於て恐らく頭腦が勢力を占むるであらう、しかも頭腦も活力の一つであるからやはり胃を通じて養はれねばならない。全世界を動かした思想でパンと水とでできたものはかつてなかつた、此等の思想はビフテキとマトンチョツプ、ハムエツグ、豚肉とプデンによつてつくられ、さらに強い葡萄酒、強い麥酒、強いコーヒーによつて刺激されたのである。又科學は生長ざかりの少年青年は大人よりも更に一層の滋養物を要すること、殊に又學生は頭腦の勞働より起る肉體的疲勞を

chops 羊の肋骨のついた厚き肉のきれ。 6. ham 豚の腿肉を鹽漬にし燻製にしたもの。 7. pork 豚肉。 8. pudding 麥粉、卵、牛乳、乾葡萄、其他を加へて蒸したるもの、勿論種類も製法も多し。 9 generous 醇なる、強い。

strong nourishment to repair the physical waste involved[1] by brain-exertion.

And what is the waste entailed[2] upon the Japanese schoolboy's system[3] by study? It is certainly greater than that which the system of the European or American student must suffer at the same period of life. Seven years of study are required to give the Japanese youth merely the necessary knowledge of his own triple system of ideographs,[4]—or, in less accurate but plainer speech, the enormous alphabet of his native literature. That literature, also he must study, and the art of two forms of his language,—the written and the spoken: likewise, of course, he must learn native history and native morals. Besides these Oriental studies, his course includes foreign history, geography, arithmetic, astronomy, physics, geometry, natural history, agriculture, chemistry, drawing, and mathema-

【註】 1. involved 惹起されたる。 2. entail 蒙らす、及ぼす。
3. system = the entire body 全身體、神經系統、消化系統など云

恢復するために強い滋養を要することを教ふる。

しかも勉學のために日本の學校生徒の身體が受くる疲勞は如何程であるか。それは歐米の學生の身體が同じ年頃に於て受けるものよりはたしかに大きいのである。日本の少年に漢字の三重の方式や、正確ではないがもつと簡單な言葉で云へば日本文學にある莫大なる文字について必要なる知識だけを具へるために七年の勉學が必要である。その文學も學ばねばならない、國語の二種類の技術即ち言文の二體を學ばねばならない、勿論、同じく、國史と國民道德を學ばねばならない。これ等東洋の學問の外にさらに履修すべき學科に外國歴史、地理、算術、天文、物理、幾何、生物學、農學、化學、圖畫、及び數學がある。最も困

ふものを集めた全體の身體。 4. triple system of ideographs 表意文字の三重の方式即ち漢字の眞行草の三體。

tics. Worst of all, he must learn English,—a language of which the difficulty to the Japanese cannot be even faintly imagined by anyone unfamiliar with the construction of the native tongue,—a language so different from his own that the very simplest Japanese phrase cannot be intelligibly rendered into English by a literal translation of the words or even the form of the thought.[1] And he must learn all this upon a diet no English boy could live on; and always thinly clad[2] in his poor cotton dress without even a fire in his schoolroom during the terrible winter, only a hibachi containing a few lumps of glowing charcoal in a bed of ashes. Is it to be wondered at that even those Japanese students who pass successfully through all the educational courses the Empire can open to them[3] can only in rare instances show results of their long training as large as those manifested by students of the West?

1. 「お氣の毒」「以ての外」「骨折」 など云ふ 普通の日本語を英語に直譯したら、何の事か分らない、最もこれは日本語の熟字なれども。 2. clad = clothed. 3. those Japanese students who ...... to

ることには、英語を習はねばならない、此英語の日本人に困難なことは日本語の組立てを知らない人には想像もできない、此英語なるものが日本語と非常に違つて居るので、極めて簡短な日本語の句でも、言葉の直譯や、或は思想の形ちだけの直譯だけでは、とても理解することはできない。そして日本の學生は英國の少年がとても生きて居られぬやうな喰物をたべながら凡て此等の學問を學ばねばならない。其上いつでも貧しい木綿の着物をうすくきて、大寒の時でも教場にはたゞ灰の中に赤い炭の少し入つて居る火鉢が一つあるだけで外に何の火の氣もない。日本帝國が彼等に與へた課程を立派に通過した學生でも、その長い勉强の結果は西洋の學生によつて表はされた結果と同じ程度には殆どならないのは不思議のことであらうか。追々に學生の境遇もよくなりか

them はそのつぎの can show …… の subject なり。

Better conditions are coming; but at present, under the new strain,[1] young bodies and young minds too often give way.[2] And those who break down are not the dullards, but the pride of schools, the captains of classes.

〔註〕 1. strain 緊張、努力。 2. give way 退く、まける、break

けて居る、しかし現在の處新しい過勞のために若い身體若い頭腦の破壞し去ること餘りに多い。しかも破壞し去るのは鈍い人々でなく、かへつて學校の花、級中の秀才である。

down. The ice *gave way* and the horses were drowned.

XIII

YET, so far as the finances of the schools allow, everything possible is done to make the students both healthy and happy,—to furnish them with ample opportunities both for physical exercise and for mental enjoyment. Though the course of study is severe, the hours are not long: and one of the daily five is devoted to military drill,—made more interesting to the lads by the use of real rifles and bayonets, furnished by government. There is a fine gymnastic ground near the school, furnished with trapezes,[1] parallel bars,[2] vaulting horses,[3] etc., and there are two masters of gymnastics attached to the Middle School alone. There are rowboats, in which the boys can take their pleasure on the beautiful lake whenever the

【註】 1. trapeze ブランコ。 2. parallel bars 平行木。 3. vaulting

十三

しかし學校の經濟の許す限り生徒を健康にかつ愉快にするためのあらゆる方法、運動及び娛樂の種々の機會を與ふるためのあらゆる方法は講じてある。勉學の課程は嚴重だが時間は長くはない、そして每日五時間のうちの一時間は兵式體操に捧げてある、政府から授けてある本當の銃や劍を用ふるので生徒には一層興味がある。學校の近くに立派な運動場がある、ブランコや平行木や木馬などが備へてある、中學校だけの體操敎師が二人ある。ボートがある、天氣さへよければいつでも美しい湖上で面白くこぎ廻ることができる。知

horses 木馬。

weather permits. There is an excellent fencing-school conducted by the Governor himself, who, although so heavy a man, is reckoned one of the best fencers of his own generation.[1] The style taught is the old one, requiring the use of both hands to wield the sword; thrusting is little attempted, it is nearly all heavy slashing. The foils are made of long splinters of bamboo tied together so as to form something resembling elongated fasces:[2] masks and wadded[3] coats protect the head and body, for the blows given are heavy. This sort of fencing requires considerable agility, and gives more active exercise than our severer Western styles. Yet another form of healthy exercise consists of long journeys on foot to famous places. Special holidays are allowed for these. The students march out of town in military order, accompanied by some of their favorite teachers, and perhaps a servant to cook for

【註】 1. 籠手田氏は名高き撃劍の名手なること前にも記せり。
2. elongated fasces 棒を束ね其間より斧の刃を現せしもの、長官外

事自ら監督して居る劍道の道場がある、知事は目方の重い人だが知事の時代の最も巧妙な擊劍家の一人と云はれて居る。敎へられて居る型は古風のものである、劍を使ふに兩手を用ふるのである、突くことは餘りない、殆んど悉く重い亂打である。竹刀は竹の長いサヽラを結んで昔しローマのフアシーズを長くした形ちに似たやうにできて居る、面とさしこの上衣はその打擊がひどいから頭と胴を保護して居る。此種類の擊劍は非常の敏捷を要する、そして自分等の西洋のもつとはげしい流儀よりも一層盛んな運動になる。しかし又別種類の健康なる運動は著名の地へ遠足をすることである。このために特別の休暇ができて居る。生徒は列をつくり、愛する數人の先生に伴はれ、ことによれば彼等のために料理をしてくれる小使をつれて町から出かける。かくして百哩或は

出の時隨行員が擔ひて先頭せしもの（ローマ史）。 3. wadded 綿をつめてある。

them. Thus they may travel for a hundred, or even a hundred and fifty miles and back; but if the journey is to be a very long one, only the strong lads are allowed to go. They walk in waraji, the true straw sandal, closely tied to the naked foot, which it leaves perfectly supple and free, without blistering[1] or producing corns.[2] They sleep at night in Buddhist temples; and their cooking is done in the open fields, like that of soldiers in camp.

For those little inclined to such sturdy exercise there is a school library which is growing every year. There is also a monthly school magazine, edited and published by the boys. And there is a Students' Society, at whose regular meetings debates are held upon all conceivable[2] subjects of interest to students.

【註】 1. blisteling 水腫れになること、水腫れのまめ。 2. corns

百五十哩も旅をする、そして又かへる、しかしもし其旅行が非常に長い場合にはたゞ强壯な生徒だけが行くことを許される。ワラジ即ち素足にチャンと結んである本當のワラのはきものででかける、ワラジは全く足を伸縮自在ならしめる、豆をつくつたり雞眼(タコ)をでかしたりなどしない。夜は寺に寢る、そして料理は野營の兵士の料理のやうに廣野にたてなされる。

かやうのはげしい運動を餘り好かないものには學校の書庫がある。これは年々に增加して行く。生徒が編輯し發行する月刊の學校雜誌がある。又生徒會がある、その定期の會には生徒に興味があると思はるゝあらゆる問題について討論が催される。

堅いまめ。 2. conceivable 考へ得べき、想像し得べき。

XIV

April 4, 1891.

THE students of the third, fourth, and fifth year classes write for me once a week brief English compositions upon easy themes which I select for them. As a rule[1] the themes are Japanese. Considering the immense difficulty of the English language to Japanese students, the ability of some of my boys to express their thoughts in it is astonishing. Their compositions have also another interest for me as revelations, not of individual character, but of national sentiment, or of aggregate[2] sentiment of some sort or other. What seems to me most surprising in the compositions of the average Japanese student is that they have no personal *cachet*[3] at all. Even the handwriting

〔註〕 1. as a rule = as a general thing, on the whole 概して、一般に。 2. aggregate = combined 集合の。 3. *cachet* カシエー、

十四

一八九一、四月四日

三四五年級の生徒は自分の出すやさしい題について短い英文を一週一回書いて見せる。概して問題は日本に關するものである。日本の生徒にとつて英語の非常に六ツかしいことを考へて見れば自分の生徒のうちの或者が彼等の思想を英語で表す技倆は驚くべきである。彼等の作文は個人の性格ではなく國民感情又は或種の集合的感情の表はれたるものとして自分にとつて又別種の興味がある。普通の日本の生徒の作文に於て自分に最も驚くべきことゝ思はれるのは、彼等は全く個人的特色をもたないことである。二十の英作

佛語、seal 著しきしるし。

of twenty English compositions will be found to have a curious family resemblance; and striking exceptions are too few to affect the rule.[1] Here is one of the best compositions on my table, by a student at the head of his class. Only a few idiomatic errors have been corrected:—

"THE MOON."

"The Moon appears melancholy to those who are sad, and joyous to those who are happy. The Moon makes memories of home come to those who travel, and creates home-sickness. So when the Emperor Godaigo, having been banished to Oki by the traitor Hōjō, beheld the moonlight upon the seashore, he cried out, '*The Moon is heartless!*'

"The sight of the Moon *makes an immeasurable feeling in our hearts*[2] when we look up at it through the clear air of a beauteous night.

〔註〕 1. 著しき除外例は餘りに少くして此規則を動かすに足りない。 2. *makes an* ...... 無量の感を...... の直譯なるべし、少し

文の手蹟までも奇妙に親類的相似を有せることが分る、此斷言を動かすことができない程に、著しい除外例が先づない。こゝに自分の机上に最もよい作文の一つがある、その級中の一番の生徒の書いたものである。たゞ云ひまはし方について僅かの誤りを直したに過ぎない。

月

「月ハ悲メル人ニハ悲シク見エ、幸福ナ人ニハ愉快ニ見エル。月ハ旅行スル人ニ故鄕ヲ思ハセテ懷鄕病ヲ起サセル。故ニ逆臣北條ノタメ隱岐ニ流サレタ後醍醐天皇ハ海岸ニテ月光ヲ見テ「月ハツレナシ」ト叫ビ給ウタ。

我等ハ雲ナキ月ヲ見ルトキ、我等ノ心ニ名狀シ難キ感情ヲ起ス。

變つた云ひ方なるが故にイタリックにしてある、注意すべきところも同じ。

"Our hearts ought to be pure and calm like the light of the Moon.

"Poets often compare the Moon to a Japanese [metal] mirror (*kagami*); and indeed its shape is the same when it is full.

"The refined man amuses himself with the Moon. He seeks some house looking out upon water, to watch the Moon, and to make verses about it.

"The best places from which to see the Moon are Tsukigashi,[1] and the mountain Obasute.

"The light of the Moon shines alike upon foul and pure, upon high and low. That beautiful Lamp is neither yours nor mine, but everybody's.

"When we look at the Moon we should remember that its waxing and its waning are the signs of the truth that the culmination of all things is likewise the beginning of their decline."

【註】 Tsukigashi 月ヶ瀬の出雲訛り、月ヶ瀬こ云ふから月もよか

我等ノ心ハ月光ノ如ク澄ミ且ツ平靜デアルベキデアル。

詩人ハヨク月ヲ日本ノ鏡ニ比ベル、滿月ノ時ニハ其形ハ全ク同ジデアル。

風流ナ人ハ月ヲ見テ樂ム、カヽル人ハ月ヲ見ルタメニ水ニ臨ンダ家ヲサガシ、ソシテ月ニ關スル詩歌ヲツクル。

月ヲ見ルニ最モヨキ場所ハ月ケ瀨ト姨捨山デアル。

月光ハ美醜貴賤ヲ普ク照ラス。此美ハシキ明光ハ自他ノモノデナク、一切平等凡テノ人ノモノデアル。

月ヲ見ル時ソノ滿チ又缺クルハ凡テノモノヽ頂上ハ又ソノ降下ノ初マリデアルコトノ道理ヲ示シテ居ルト思ハネバナラナイ』

らうさ出雲の學生が考へた。

Any person totally unfamiliar with Japanese educational methods might presume that the foregoing composition shows some original power of thought and imagination. But this is not the case. I found the same thoughts and comparisons in thirty other compositions upon the same subject. Indeed, the compositions of any number of middle-school students upon the same subject are certain to be very much alike in idea and sentiment—though they are none the less[1] charming for that. As a rule the Japanese student shows little originality in the line[2] of imagination. His imagination was made for him long centuries ago—partly in China, partly in his native land. From his childhood he is trained to see and to feel Nature exactly in the manner of those wondrous artists who, with a few swift brush-strokes, fling down upon a sheet of paper the colour-sensation[3] of a chilly dawn, a fervid noon, an autumn evening. Through all his

【註】 1. none the less = nevertheless それにも拘らず、そのためにより少くなることはない)。 2. in the line of ... の方面で。

日本の教育法に全く通じない人なら、何人でも以上の作文を見て、それに思想と想像の多少の斬新な力を示して居ると思ふであらう。しかし事實はさうでない。自分は同じ題の他の三十の作文に於て同じ思想及び比喩を見出した。實際中學生の同じ題の作文が如何程多數でも、必ずその思想感情に於て甚だ相似て居るのである、しかしそのために面白味が少ないと云ふわけではない。概して日本の學生は想像の方面に於ては殆んど獨創力を現はして居ない。その想像は數百年前、幾分は支那に於て、幾分は日本に於て、彼の爲に既に作つてあるのである。幼年時代から彼は二三の早い筆で一枚の紙に寒い朝、熱い日中、秋の夕の感じを容易に描き出すあの不思議な美術家が見たと

3. colour-sensation 網膜(眼の　)を刺激して起る感覺、即ち光りと色彩の感覺。

boyhood he is taught to commit to memory[1] the most beautiful thoughts and comparisons to be found in his ancient native literature. Every boy has thus learned that the vision of Fuji against the blue[2] resembles a white half-opened fan, hanging inverted in the sky. Every boy knows that cherry-trees in full blossom look as if the most delicate of flushed summer clouds were caught in their branches. Every boy knows the comparison between the falling of certain leaves on snow and the casting down of texts upon a sheet of white paper with a brush. Every boy and girl knows the verses comparing the print of cat's-feet on snow to plum-flowers,[3] and that comparing the impression of bokkuri on snow to the Japanese character for the number "two."[4] These were thoughts of old, old poets; and it would be very hard to invent prettier ones. Artistic power in composition is chiefly shown by the correct memorising and clever combina-

〔註〕 1. to commit to memory = to learn by heart, to memorize 暗記する。 2. the blue = the sky 天空、蒼天。 3. 初雪や猫の足跡

同じやうに自然を見、又感ずるやうに訓練されて居る。少年時代から彼は古文學に見出さるゝ最も美はしい思想や比喩を記憶するように教へられて居る。どの少年も青空に立てる富士の形は逆さにした半開の扇に似て居ることを知つて居る。どの少年も滿開の櫻花は最も美しい紅の夏の雲が枝のうちに捕へられたやうに見ゆることを知つて居る。どの少年も雪の上に木の葉が散つたのと白紙の上に筆で文字の散らし書きにしてあるのとの比喩を知つて居る。どの少年少女も雪の上の猫の足跡が梅の花に似て居ること、雪の上の木履のあとが二の字に似て居ると云ふ比喩の歌句を知つて居る。これ等はずつと古への詩人歌人の思想である、もつと美はしいものを發明することは甚だ難いであらう。作文に於ける能事は此等の古への思想を正しく記憶し巧みに配列することで

梅の花、(關東では犬の足跡と云ふが、北陸、山陰その他ではかく云ふ)。 4. 二の字ふみ出す木履かな(これも二の字二の字の下駄のあとと云ふ處もある。

tion of these old thoughts.

And the students have been equally well trained to discover a moral[1] in almost everything, animate or inanimate. I have tried them with a hundred subjects — Japanese subjects— for composition; I have never found them to fail in discovering a moral when the theme was a native one. If I suggested "Fireflies," they at once approved the topic, and wrote for me the story of that Chinese student who, being too poor to pay for a lamp, imprisoned many fireflies in a paper lantern, and thus was able to obtain light enough to study after dark, and to become eventually a great scholar. If I said "Frogs," they wrote for me the legend of Ono-no-Tōfū, who was persuaded[2] to become a learned celebrity[3] by witnessing the tireless perseverance of a frog trying to leap up to a willow-branch. I subjoin a few specimens of the moral ideas which

【註】 1. moral 寓意、教訓、意味 (小說、物語などに含まれたる)。
2. was persuated = was convinced, was induced...さ云ふ氣になった。

終つて居る。

又同じやうによく學生は生物であれ無生物であれ殆んど凡てのものに「教訓」を見出すやうに教へられて居る。自分は百ばかりの題(日本の題)を與へて彼等を試みた。題が日本のものであれば自分は彼等が必ず教訓を見出すことを知つた。自分が「螢」と云へば彼等は直ちにその題を選んで燈火を買へない支那の學者が提灯のうちに多數の螢を入れ、夜になつて勉強するだけの光りを得て、後に大學者になることを得たと云ふ話しを自分のために書いた。自分が「蛙」と云つたとき、彼等は柳の枝に飛びつかうとした蛙の撓まない忍耐を目撃して大學者にならうと志を起した小野道風の物語を自分のために書いた。自分がかく誘ひ出した教訓の少しの例を附加して置く。原文

3. a celebrity = a celebrated person 著名の人。

I thus evoked.[1] I have corrected some common mistakes in the originals, but have suffered a few singularities to stand :—

"THE BOTAN.

"The *botan* [Japanese peony] is large and beautiful to see; but it has a disagreeable smell. This should make us remember that what is only outwardly beautiful in human society should not attract us. *To be attracted by beauty only may lead us into fearful and fatal misfortune.* The best place to see the *botan* is the island of Daikonshima[2] in the lake Nakaumi. There in the season of its flowering all the island is red with its blossoms."

"THE DRAGON.

"When the Dragon tries to ride the clouds and come into heaven there happens immediately a furious storm. When the Dragon dwells on the ground it is supposed to take

【註】 1. evoked = called out 呼び出した。

に於て普通のいくつかの誤りを直して置いたが少し變つた處はそのまゝにして置いた。

牡丹

『牡丹ハ大キク又見テ奇麗デアル、ガ、イヤナ香ヒガアル。コレハ自分ニ人間社會ニ於テ只外見上美麗ナモノデ自分等ノ心ヲ動カシテハナラヌ事ヲ思ヒ起サスベキデアル。只美ノタメニ心ヲ動カスコトハ自分等ヲ恐ルベキ不幸ナ運命ニ陥入ラシムルコトニナルコトモアル。牡丹ヲ見ルニ最モヨイ場所ハ中海ニアル大根島デアル。花ノ咲ク頃ハ島中一面牡丹デ紅クナル』

龍

『龍ガ雲ニ乘ツテ天ニ行カウトスル時急ニ恐ロシイ嵐ガ起ル。龍ガ地上ニスムトキハ石又ハソノ

2. Daikonshima 大根島(中海)

the form of a stone or other object; but when it wants to rise it calls a cloud. Its body is composed of parts of many animals. It has the eyes of a tiger and the horns of a deer and the body of a crocodile and the claws of an eagle and two trunks like the trunk of an elephant. It has a moral. *We should try to be like the dragon, and find out and adopt all the good qualities of others.*"

At the close of this essay on the dragon is a note to the teacher, saying: "I believe not there is any Dragon. But there are many stories and curious pictures about Dragon."

"MOSQUITOES.

"On summer nights we hear the sound of faint voices; and little things come and sting our bodies very violently. We call them *ka*, —in English 'mosquitoes.' I think the sting is useful for us, because if we begin to sleep, the *ka* shall come and sting us, uttering a

他ノモノヽヤウナ姿ヲシテ居ルト云フコトデアル、シカシ上ル時ニハ雲ヲ呼ブ。龍ノ體ハ種々ノ動物ノ各部分デ出來テ居ル。虎ノ目、鹿ノ角、鰐ノ胴、鷲ノ瓜、ソシテ象ノ鼻ノヤウナ鼻ガ二ツアル。ソコニ敎訓ガアル。自分等ハ龍ノヤウニナラウト勉メテ他人ノ長所ヲ悉ク見テソレヲ具備セネバナラヌ」

龍の此文の終りに先生への手紙がついて居る。それに「私は龍などあるものとは信じません。しかし龍に關する種々の話しや不思議な繪があります」と云つてある。

蚊

『夏ノ夜私共ハカスカナ聲ノヒヽキヲ聞ク、ソシテ小サイモノガ來テ甚ダヒドク私共ノ體ヲ刺ス。コレヲ蚊ト呼ブ、英語デハ「もすきとーず」、私ハ此刺サレルコトハ有益ト思フ、何故ナレバ私共ガソロソロ居眠リヲ初メルト蚊ガ來テ、小サイ

small voice ,—*then we shall be bringed*[1] *back to study by the sting.*"

The following, by a lad of sixteen, is submitted[2] only as a characteristic expression of half-formed ideas about a less familiar subject.

"EUROPEAN AND JAPANESE CUSTOMS.

"Europeans wear very narrow clothes and they wear shoes always in the house. Japanese wear clothes which are very *lenient*[3] and they do not *shoe*[4] except when they walk *out-of-the-door.*[5]

"What we think very strange is that in Europe every wife loves her husband more than her parents. In Nippon there is no wife who more loves not her parents[6] than her husband.

"And Europeans walk out in the road with their wives, which we utterly refuse to, except

【註】 1. bringed は勿論 brought ならざるべからず。 2. submit = put under 下に置く。 3. lenient は gentle, mild の意味にしてゆるやかの意味とすれば少しちがへり。 4. shoe 自動詞には用

聲ヲ發シナガラ刺ス、ソコデ私共ハ刺サレテ勉強スルヤウニサマサレル」

つぎは十六歳の少年のものであるが餘り知らない問題について半解の知識を示したものとして特色があると云ふ點でこゝへ出す。

歐洲と日本との習慣

「歐洲人ハ甚ダ狹イ着物ヲキル、又家ニアツテモ常ニ靴ヲハイテ居ル。日本人ハ甚ダユルイ着物ヲキテ、戸外ヲアルクトキノ外ハ靴ヲハクコトハナイ。

私共ノ非常ニ不思議ニ思フコトハ歐洲デハ凡テ妻ハ兩親ヨリモ夫ヲ餘計ニ愛スルコトデアル。日本デハ夫ヨリモ兩親ヲ多ク愛シナイ妻ハナイ。

又歐洲人ハ妻ト路ヲアルク、私共ハ八幡ノ御祭

ひす、(他動詞にしても多く過去及過去分詞で用ひらる)。 5. out-of-the-door. out-of-doors, outdoors (副詞) ならざるべからず。 6. does not love her parents more……の方普通なること勿論なり。

on the festival of Hachiman.

"The Japanese woman is treated by man as a servant, while the European woman is respected as a master. I think these customs are both bad.

"We think it is very much trouble to treat European ladies; and we do not know why ladies are so much respected by Europeans."

Conversation in the class-room about foreign subjects is often equally amusing and suggestive:—

"Teacher, I have been told that if a Euro pean and his father and his wife were all to fall into the sea together, and that he only could swim, he would try to save his wife first Would he really?"

"Probably," I reply.

"But why?"

"One reason is that Europeans consider it a man's duty to help the weaker first—especially women and children."

"And does a European love his wife more

リノ時ノ外ハソンナ事ハ全クシナイ。

日本婦人ハ男子ノタメニ女中ノ如ク使ハレ、歐洲婦人ハ主人ノ如ク尊敬サレル。私ハコレ等ノ習慣ハ何レモ悪イト思フ。

私共ハ歐洲婦人ヲ遇スルコトハ甚ダ面倒ナコトヽ思フ。ソシテ私共ハ何故婦人ガ歐洲人ニサホドマデニ尊敬サルヽカ、ソノ理由ヲ知ラナイ！

外國の問題に關して教場での會話も亦同じやうに面白く又啓發されることが屢々ある。

「先生、歐洲人が自分の父と妻と一處に海に落ちたと假定して、そして自分だけ泳げる場合には先づ自分の妻をさきに助けようとすると聞いて居ますが本當でせうか」

「多分さうでせう」と自分が答へる。

「何故でせう」

「一つの理由は歐洲人は弱い者を第一に、殊に女や子供を助けるのを男子の義務と考へて居るからです」

「そして歐洲人は自分の父母よりも自分の妻の

than his father and mother?"

"Not always—but generally, perhaps, he does."

"Why, Teacher, according to our ideas that is very immoral."

...."Teacher, how do European women carry their babies?"

"In their arms."

"Very tiring! And how far can a woman walk carrying a baby in her arms?"

"A strong woman can walk many miles with a child in her arms."

"But she cannot use her hands while she is carrying a baby that way, can she?"

"Not very well."

"Then it is a very bad way to carry babies," etc.

方を餘計に愛しますか」

「いつでもさうと云ふわけでないが、しかし先づ大概はさうです」

「でも、先生、私共の考によればそれは甚だ不道德です」

……「先生、歐洲人はどんな風にして赤ん坊をもつてあるきますか」

「抱いてあるきます」

「隨分つかれませう。そして赤坊を抱いて女はどれ程あるけますか」

「強い女なら赤坊を抱いて餘程あるけます」

「しかしそんな風に赤坊を抱いて居ますと手が使はれませんでせう」

「よくは使はれません」

「それではそんな風に赤坊をもつてあるくのは餘程惡いやり方です」……

XV

May 1, 1891.

MY favourite students often visit me of afternoons. They first send me their cards, to announce their presence. On being told to come in they leave their footgear[1] on the doorstep, enter my little study, prostrate themselves; and we all squat down together on the floor,[2] which is in all Japanese houses like a soft mattress. The servant brings zabuton or small cushions to kneel upon, and cakes, and tea.

To sit as the Japanese do[3] requires practice; and some Europeans can never acquire the habit. To acquire it, indeed, one must become accustomed to wearing Japanese costume. But once the habit of thus sitting has been formed, one finds it the most natural

【註】 1. footgear = covering for the feet, as stockings, shoes, or boots. 靴、くつ下、その他はきもの一切。

十五

一八九一、五月一日

自分の愛する學生は午後によく自分を訪問する、彼等は初めに來訪を知らすために名刺を出す。おはいりと云はれて戸口にハキモノをぬぎ自分の小書齋に入り、平伏して御辭儀をする、そして自分等は床の上に一同坐る、此床は凡て日本の家ではやさしいしとねのやうになつて居る。女中が坐ぶとんと菓子と茶を持つて來る。

日本人のやうに坐るには練習が要る、そして歐洲人のうちにはどうしても此習慣のできない人がある。實際此習慣になれるためには先づ日本服を着ることに慣れねばならない。しかし一度かく坐る習慣ができたら、これがあらゆる姿勢のうちで一番自然で又安樂な姿勢であることが分る、そ

2 the floor 疊のある床のこと、故につぎの說明あり。
3 do = sit。

and easy of positions, and assumes it by preference[1] for eating, reading, smoking, or chatting. It is not to be recommended, perhaps, for writing with a European pen,—as the motion in our Occidental style of writing is from the supported wrist; but it is the best posture for writing with the Japanese fude, in using which the whole arm is unsupported, and the motion[2] from the elbow. After having become habituated to Japanese habits for more than a year, I must confess that I find it now somewhat irksome to use a chair.[3]

When we have all greeted each other, and taken our places upon the kneeling-cushions, a little polite silence ensues, which I am the first to break. Some of the lads speak a good deal of English. They understand me well when I pronounce every word slowly and distinctly,—using simple phrases, and avoiding idioms. When a word with which they are not familiar must be used, we refer to a good

【註】 1. by preference 好んで、擇んで。 2. the motion のつぎに is が略してある。 3. これは著者自ら十數年間その死に到る

して食事の時、讀書の時、喫烟の時、談話の時、どうしてもこの方法を好んでとるやうになる。歐風のペンで書く場合には或はこれがよいと勸められない、自分等西洋風の書き方は手首を据えねばならぬのである、しかし日本の筆でかくのには此姿勢が一番よい、筆を使ふのには腕は全く支へられないで、肘の運動でするからである。自分は今一年以上も日本の習慣になれたあとで、椅子を用ふるのが大分面倒になつて來たことを白狀せねばならない。

互に挨拶して坐ぶとんの上に坐つたのち、暫らくつゝましく皆默つて居る、それから先づ自分から口を切る。學生のうちには中々よく英語を話すのがある。簡單な文句を用ひて熟語などさけて一言一句徐ろにハッキリ云へば皆によく分る。彼等の知らない言葉を用ひねばならぬ時には英和字

まで實行せしもの、著述の時椅子にかけしのみ、其他は全く日本風に坐せり。

English-Japanese dictionary, which gives each vernacular[1] meaning both in the kana and in the Chinese characters.

Usually my young visitors stay a long time, and their stay is rarely tiresome. Their conversation and their thoughts are of the simplest and frankest.[2] They do not come to learn: they know that to ask their teacher to teach out of school would be unjust. They speak chiefly of things which they think have some particular interest for me. Sometimes they scarcely speak at all, but appear to sink into a sort of happy reverie. What they come really for is the quiet pleasure of sympathy.[3] Not an intellectual sympathy, but the sympathy of pure good-will: the simple pleasure of being quite comfortable with a friend. They peep at my books and pictures; and sometimes they bring books and pictures to show me,—delightfully queer things,—

【註】 vernacular 自國の。 2. frankest 最も打ちあけたる、かくしだてのない (正直に何でも打ちあける)。 2. 同情と云へば求

書を參考する、それには假名と漢字の兩方でそれぞれ國語の意味がつけてある。

大概自分の客は長座をするがその長座が退屈だと思つたことは殆んどない。彼等の話しと思想は此上もなく簡單で又率直である。彼等は學問をしに來るのではない、學校以外に先生に習ひに來ることは不公平だと云ふことは知つて居る。彼等は自分に特に興味があると思ふことについて重に話しをする。どうかすると殆んど話しをしないことがある、しかし一種の愉快な默想に耽つて居るやうに見える。彼等の來る眞の理由は同情の靜かな喜びを得んがためである。智力上の同情でなく、只全く好意を表す同情である、友人と全く氣樂にして居られる時の愉快である。彼等は自分の書物や繪をのぞく、時々自分に見せるために書物や繪(よほど面白い變つたもの)、自分には買へな

ある、與へると云ふことが續いて起るがこゝでは意氣投合、おなじの同情のためにくると云ふ意味である。

family heirlooms[1] which I regret much that I cannot buy. They also like to look at my garden, and enjoy all that is in it even more than I. Often they bring me gifts of flowers. Never by any possible chance are they troublesome, impolite, curious,[2] or even talkative. Courtesy in its utmost possible exquisiteness[3]—an exquisiteness of which even the French have no conception—seems natural to the Izumo boy as the colour of his hair or the tint of his skin. Nor is he less kind than courteous.[4] To contrive pleasurable surprises for me is one of the particular delights of my boys; and they either bring or cause to be brought to the house all sorts of strange things.

Of all the strange or beautiful things which I am thus privileged to examine, none gives me so much pleasure as a certain wonderful kakemono of Amida Nyorai. It is rather a large picture, and has been borrowed from a

〔註〕 1. heirlooms 相傳の寶。 1. curious=habitually inquisitive. せんさく好きの。 3. exquisiteness=elegance, perfection. 極致。

いのが甚だ殘念なやうな祖先傳來の家寶などを持つて來る。彼等は又自分の庭園を見ることを好んで自分よりもはるかによくその庭にあるものが分り、又賞玩する。よく花をもつて來てくれる。どんな事があつても、ウルサイこと、失禮なこと、物珍らしくせんさく好きであつたり、おしやべりであつたりすることは決してない。此上もなく丁寧に禮儀正しいのは（フランス人でも考へられぬ程の度合で）、毛髮の色や皮膚の色と同じく、出雲の少年に固有なのと見える。禮儀正しいと同じく又親切である。自分を不意に喜ばせようと工夫するのが、自分の少年の特に喜ぶことの一つである、そこで種々變つたものを自分のうちに持つてくるか、或は持つて來て貰ふやうに取計ふ。

かくして自分が見ることの特權を得た奇妙なもの、奇麗なものゝうちで阿彌陀如來のある不思議な掛物程自分を喜ばしたものはない。それは大分大きな掛物で、自分に見せるために或る僧侶か

4. 禮儀正しいことより親切の方が少いことはない、即ち禮儀正しいこと同じく又親切である。

priest that I may see it. The Buddha stands in the attitude of exhortation,[1] with one hand uplifted. Behind his head a huge moon makes an aureole;[2] and across the face of that moon stream winding lines of thinnest cloud.[3] Beneath his feet, like a rolling of smoke, curl heavier and darker clouds. Merely as a work of colour and design, the thing is a marvel. But the real wonder of it is not in colour or design at all. Minute examination reveals the astonishing fact that every shadow and clouding is formed by a fairy[4] text of Chinese characters so minute that only a keen eye can discern them; and this text is the entire text of two famed sutras,—the Kwammuryō-ju-kyō and the Amida-kyō,—"text no larger than the limbs of fleas." And all the strong dark lines of the figure, such as the seams of the Buddha's robe, are formed by the characters of the holy invocation of the Shin-shū sect, repeated thousands of times: "*Namu Amida*

【註】 1. exhortation 説き勸めるこさ、即ち説法。 2. aureole 後光。 3. 極めてうすい雲のうねりくねつた線 (winding lines) が流

ら借りたのである。佛は片手をあげて何か説敎の態度で立つて居給ふ。御頭の後ろに大きな月形の後光がある、その月の面を横切つて極めてうすくたな引ける線が流れ出て居る。御足の下には烟のうづまきのやうに重い黑い雲がうづ卷いて居る。色彩と考案の作品としてのみ見てもそれは驚くべきものである。しかしその眞の不思議は色彩や考案に存するのではない。詳しく檢べると凡ての影、雲は只鋭い眼で初めて認むることができる程小さい漢字の珍らしい經文から出來て居ると云ふ驚くべき事實が分る。そして此經文は二つの名高い經、觀無量壽經と阿彌陀經、の全文で「蚤の手足よりも大きくはない文字」になつて居る。そして御佛のころもの縫目の如き強い黑線と見ゆるものは眞宗の稱名、數千遍くりかへして唱へらるる「南無阿彌陀佛」の文字で出來て居る。昔し、

れる (stream)。 4. fairy = fanciful, graceful 珍奇の。

Butsu!" Infinite patience, tireless silent labour of loving faith, in some dim temple, long ago.

Another day one of my boys persuades his father to let him bring to my house a wonderful statue of Kōshi (Confucius), made, I am told, in China, toward the close of the period of the Ming dynasty. I am also assured it is the first time the statue has ever been removed from the family residence to be shown to anyone. Previously, whoever desired to pay it reverence had to visit the house. It is truly a beautiful bronze. The figure of a smiling, bearded old man, with fingers uplifted and lips apart as if discoursing. He wears quaint Chinese shoes, and his flowing robes are adorned with the figure of the mystic phœnix.[1] The microscopic finish of detail[2] seems indeed to reveal the wonderful cunning[3]

【註】 1. phœnix 神鳥、不死鳥 (神話)、美麗なる鳥にしてアラビヤの沙漠に 500 乃至 600 年生活してのち自ら香料などを集め來り、羽翼を以て扇いで火をつくり自らを燒いて再びその灰燼中よ

何處かのうす暗き御堂で長い忍耐、愛すべき信仰の倦まない沈默の勉强を思はせる。

・

又つぎに自分の學生の一人がその父を說いて孔子の驚くべき像を自分のうちにもたらしめた、此像は明朝の末に支那でできたものと云はれて居る。人に見せるのに家から外へ持ち出されたのはこれが初めてであると聞いた。以前には誰でも此尊像に禮拜しようとするものは、その家を訪はねばならなかつた。それは全く美はしい青銅製である。口を開いて手をあげて何か說いて居るやうな微笑をもらせるアゴヒゲのある老人の形ちである。古風な支那靴をはいて、流るゝやうな着物には不思議な神鳥の繪で飾つてある。肉眼では分らない微細な點まで完全に出來て居るのは全く支那人の手の驚くべき巧みを表して居るやうで

り若く美しき姿となつて再生する、500 乃至 600 年毎にこれをくりかへすと云はれる、故に不死のしるしとなる。 2. 顯微鏡で見なければ分らない微細の點まで完全にできて居ること。 3. cunning 器用、技倆.（惡い方の意味にもなつたのは近世のことなり。）

of a Chinese hand: each tooth, each hair, looks as though it had been made the subject of a special study.

Another student conducts me to the home of one of his relatives, that I may see a cat made of wood, said to have been chiselled by the famed Hidari Jingorō,—a cat crouching and watching, and so lifelike that real cats "have been known to put up their backs and spit[1] at it."

【註】 1. spit つばを吐く、フーッと云ふことなり。

ある、一枚の歯、一本の毛髮も苟くもしないで、悉く研究の結果であるやうに見える。

又一人の學生は自分を親類の家につれてゆき、名高い左甚五郎の刻んだと云ひ傳へられる木彫の猫を見せる、うづくまつて、じつと目を据えた猫である、生きた猫が「これを見て背をたてゝ、つばを吐きかけると云はれて居る」程眞にせまつて居る。

XVI

NEVERTHELESS I have a private conviction that some old artists even now living in Matsue could make a still more wonderful cat. Among these is the venerable[1] Arakawa Junosuke,[2] who wrought[3] many rare things for the Daimyō of Izumo in the Tempō era, and whose acquaintance I have been enabled to make through my school-friends. One evening he brings to my house something very odd to show me, concealed in his sleeve. It is a doll: just a small carven and painted head without a body,—the body being represented by a tiny robe only, attached to the neck. Yet as Arakawa Junosuke manipulates[4] it, it seems to become alive. The back of its head is like the back of a very old man's head; but its

〔註〕 1. venerable 老いて尊敬すべき。 2. 荒川重之助（龜齋）出雲の有名なる彫刻家。 3. wrought＝worked つくつた。

十六

しかし自分は今日松江に住んで居る幾人かの老美術家で更に不思議な猫を作るものがあらうと内心信じて居る。そのうちに老いて尊敬すべき荒川重之助氏がある、此人は天保時代に出雲の大名に種々の珍らしいものを作つた人で、自分は學校の同僚によつて此人と交際することを得たのである。或晩彼は自分に見せるために頗る不思議なものを袖にかくして自分のところへもつて來た、それは人形である、彫刻して彩色を施した首だけで胴はない、胴は首についた小さな着物で代りにしてある。しかも荒川が手を使ふて此人形を動かすと生きて出るやうである。首の後ろは老人

4. manipulate = handle 手で扱ふ。

face is the face of an amused child, and there is scarcely any forehead nor any evidence of a thinking disposition.[1] And whatever way the head is turned, it looks so funny that one cannot help laughing[2] at it. It represents a kirakubo,—what we might call in English "a jolly old boy,"—one who is naturally too hearty and too innocent to feel trouble of any sort. It is not an original, but a model of a very famous original,—whose history is recorded in a faded scroll which Arakawa takes out of his other sleeve, and which a friend translates for me. This little history throws a curious light upon the simple-hearted ways of Japanese life and thought in other centuries:—

"Two hundred and sixty years ago this doll was made by a famous maker of *No*-masks in the city of Kyōto, for the Emperor Go-midzu-no-O.[3] The Emperor used to have it placed beside his pillow each night before he slept,

[註] 1. evidence of a thinking dispos tion 考へる性質傾向の表は

の頭の後ろのやうである、が、顔は嬉しさうな子供の顔である、額は殆んどない、考へ込むやうな風はどこにもない。どちらを向いてもこれを見る人は笑はずには居られぬ程おかしい顔をして居る。これは何にも心配などのない生れつき愉快な無邪氣な「氣樂坊」である、英語では「陽氣な男」とでも云ふのであらう。これは原作ではないが有名な原物を模したものである、その原作の歴史は荒川が今一方のたもとから取り出す色のさめた卷物に書いてある、そして友人はそれを自分に譯してくれる。此小歴史は昔しの日本人の暮らしや考の質樸な風を面白く示して居る。

『此人形は二百六十年前、後水尾天皇のために京都の名高い能面の作者によつて作られた。天皇は御寢の前、毎夜枕の傍にいつもこれを置いて、

れたところ。 2. cannot help laughing 笑ふことを止めることができない、help=avoid, can 又は cannot と伴ふときこの意味になることがある。 3. 此ローマ字中の花文字は原文による。

and was very fond of it. And he composed the following poem concerning it:—

Yo no naka wo Kiraku ni kurase
Nani goto mo Omoeba omou Omowaneba koso.[1]

"On the death of the Emperor this doll became the property of Prince Konoye, in whose family it is said to be still preserved.

"About one hundred and seven years ago, the then[2] Ex-Empress, whose posthumous[3] name is Sei-Kwa-Mon-Yin, borrowed the doll from Prince Konoye, and ordered a copy of it to be made. This copy she kept always beside her, and was very fond of it.

"After the death of the good Empress this doll was given to a lady of the court, whose family name is not recorded. Afterwards this lady, for reasons which are not known, cut off her hair and became a Buddhist nun,—taking the name of Shingyō-in.

"And one who knew the Nun Shingyō-in,

【註】 1. 著者の意譯、 Whoever in this world thinks much, must have care, and that not to think about things is to pass one's life in

甚だこれを愛で給ふた。そしてそれにつきてつぎの歌をおつくりになつた。

世の中を　氣樂にくらせ、
何事も　思へば思ふ、思はればこそ。

天皇崩去の後、此人形は近衛公のものとなつて、今もなほ同家に保存してあるさうである。

百七年程前に當時の皇太后（おくり名は盛化門院）は近衛公から此人形を借り、その寫しを作らせ給ふた。その寫しを側に置いて甚だ愛で給ふた。

此皇太后の崩御の後此人形は或女官に與へられたが、その姓は書いてない。その後此女官は如何なる理由かによりて髪を斷ち尼となり信行院と云ふ名をとつた。

此信行院を知れる近藤充博院法橋と云ふ人忝

untroubled felicity.　2. then …… その當時の …… 形容詞にして then being の略されたもの。　3. posthumous 死後の。

—a man whose name was Kondo-ju-haku-in-Hokyō,[1]—had the honour of receiving the doll as a gift.

"Now I, who write this document, at one time fell sick; and my sickness was caused by despondency. And my friend Kondo-ju-haku-in-Hokyō, coming to see me, said: 'I have in my house something which will make you well.' And he went home and, presently returning, brought to me this doll, and lent it to me,—putting it by my pillow that I might see it and laugh at it.

"Afterward, I myself, having called upon the Nun Shingyo-in, whom I now also have the honour to know, wrote down the history of the doll, and made a poem thereupon."

(Dated about ninety years ago: no signature.)[2]

【註】 1. 法橋は Hokyō でなく Hokkyō (ほつけう) とよむ。

くも此人形を貰つた。

さて此記事をかく自分は一度病氣にかゝつた、自分の病氣は氣欝から起つた。友人近藤充博院法橋自分を訪ふて「あなたの病氣を直すものを持つて居る」と云つて、うちに歸つた。そして直ちに歸つて此人形を自分にもたらして自分に貸した、自分がそれを見て笑ふために自分の枕もとにそれを置いた。

その後自分も信行院尼を幸に知つて居たので、此人を訪ねてのち此人形の歷史を記し、それについて一首の歌をよんだ』

(九十年程前の日附、記名なし)

2. 好古叢誌にこの原文ありときいて居る。

XVII

June 1, 1891.

I find among the students a healthy tone of scepticism in regard to[1] certain forms of popular belief. Scientific education is rapidly destroying credulity in old superstitions yet current among the unlettered,[2] and especially among the peasantry,[3]—as, for instance, faith in mamori and ofuda. The outward forms of Buddhism—its images, its relics,[4] its commoner practices—affect the average student very little. He is not, as a foreigner may be, interested in iconography,[5] or religious folk-lore,[6] or the comparative study of religions; and in nine cases out of ten he is rather ashamed of the signs and tokens of popular faith all around

【註】 1. in regard to, in regard of, with regard to に關して。
2. the unlettered=the ignorant 無學な人々、ある形容詞に定冠詞をつけると複數の普通名詞の意味になる、the rich, the poor の如

十七

ある種類の世間の信仰については學生等は健全な懐疑をもつて居ることが分る。無學な階級殊に農民の間に昔しからあつて今も行はれて居る迷信、たとへばお守りやお札を信ずるやうな事は科學的教育によりて急速になくなりつゝある。佛教の外形—偶像、佛骨（レリツクス）通俗な儀式—は殆んど一般の學生に何等の感動を與へない。學生は外人のやうに、偶像や宗教上の傳説や比較宗教には興味をもたない、十中八九は周圍にある世間の信仰を代表せる種々のものについて寧ろ恥辱を感じて

し。 3. peasantry 農夫達、gentry, nobility など同じ集合名詞。 4. relics 聖骨、靈寶（教主の死後其遺骸の一部又はその他の記念物を禮拜の目的物として保存せるもの）。 5. iconography 偶像、偶像畫等に關する學問， 6. folk-lore 民俗學、傳説昔噺等に關する學問，

him. But the deeper religious sense, which underlies[1] all symbolism,[2] remains with him; and the Monistic Idea[3] in Buddhism is being strengthened and expanded, rather than weakened, by the new education. What is true of the effect of the public schools upon the lower Buddhism is equally true of its effect upon the lower Shintō. Shintō[4] the students all sincerely are, or very nearly all; yet not as fervent worshippers of certain Kami, but as rigid observers of what the higher Shintō signifies,—loyalty, filial piety, obedience to parents, teachers, and superiors, and respect to ancestors. For Shintō means more than faith.

When, for the first time, I stood before the shrine of the Great Deity of Kitzuki, as the first Occidental to whom that privilege had been accorded, not without[5] a sense of awe there came to me the thought: "This is the

【註】 1. underlies = lies under。 2. symbolism 記號、象徵。
3. Monistic Idea 一元的思想（一元論とはあらゆる現象を一元より推論するものにして、唯心論、唯物論などは一元論の種類なり）

居る。しかし凡ての形式の根本にある深い宗教心は彼に存して居る、佛教にある一元的　想は新教育のために薄弱にならないで、かへつて發達生長するやうになつて居る。下等の佛教に及ぼす學校の影響は同じく又下等の神道にも及んで居る。學生の全部、或は殆んど全部は皆眞面目な神道に屬して居る、しかしある一神の熱心な崇拜ではなく、むしろ高等神道が表して居るもの、即ち忠、孝、父母教師長上に對して從順なること、祖先尊敬を眞面目に守るのである。即ち神道は信仰以上を意味する。

自分が初めて、その特權を許された最初の西洋人として、杵築の大社の前に立つた時崇高な念と共にかくの如き思が自分に浮んだ。「これは一人

精神と物質との二元對立を否定するもの。 4. Shintō 神道の信者、are のつぎにくる。 5. not without は即ち with と形ちは同じ。

Shrine of the Father of a Race; this is the symbolic centre of a nation's reverence for its past." And I, too, paid reverence to the memory of the progenitor[1] of this people.

As I then felt, so feels the intelligent student of the Meiji era whom education has lifted above the common plane of popular creeds.[2] And Shintō also means for him—whether he reasons upon the question or not—all the ethics of the family, and all that spirit of loyalty which has become so innate that, at the call of duty, life itself ceases to have value save[3] as an instrument for duty's accomplishment. As yet, this Orient little needs to reason about the origin of its loftier ethics. Imagine the musical sense in our own race so developed that a child could play a complicated instrument[4] so soon as the little fingers gained sufficient force and flexibility to strike the notes. By some such comparison only can one obtain a just idea of what in-

【註】 1. progenitor＝forefather 正系の視先、祖宗。 2. 教育が一般信條の普通程度（平面）以上に引き上げた……。

種の祖先の祉である、これは過去に對するその國民の尊敬の代表的中心である」。かくて自分も又此人民の祖先の記念に尊敬を表した。

自分が當時感じたと同じく、教育をうけて一般信仰の標準以上に上つた明治時代の聰明な學生も又、感ずるのである。そして神道は又(かれが其理由を問ふと否とに關せず)家族間の凡ての道德を代表し、又生命と雖も、義務のためには、その義務を果す一道具としての外何の價値もなくなる程、ぬくべからざるやうに固有となつて居る忠義の精神を代表して居る。未だ此東洋はその高尙なる方の道德の源を理屈に訴へて解釋する必要はない。西洋種族に於て小兒が鍵板を打つだけの力と彈力が小さい指先に出來れば、早速複雜な樂器を彈ずることの出來る程音樂的知覺の發達して居ることを想像せよ。生得の宗教や本能的の義務の、出雲に於て如何なる意味を有せるかは、

3. save=except …… を除いて。 4. complicated instrument 複雜なる樂器。

herent religion and instinctive duty signify in Izumo.

Of the rude and aggressive form of scepticism[1] so common in the Occident, which is the natural reaction after sudden emancipation[2] from superstitious belief, I find no trace among my students. But such sentiment may be found elsewhere, — especially in Tōkyō, — among the university students, one of whom, upon hearing the tones of a magnificent temple bell, exclaimed to a friend of mine: "*Is it not a shame that in this nineteenth century we must still hear such a sound?*"

For the benefit of curious travellers, however, I may here take occasion to observe that to talk Buddhism to Japanese gentlemen of the new school is in just as bad taste[3] as to talk Christianity at home[4] to men of that class whom knowledge has placed above creeds and forms.[5] There are, of course, Japanese scholars willing to aid researches of foreign

【註】 1. 亂暴な喧嘩好きな方の懷疑。 2. emancipation = freedom, deliverance 解放、自由になること。 3. is in bad taste 感心しな

かゝる比喩によつて初めて分るであらう。

西洋に於て、迷信的信仰から急にさめた自然の反動として起つた最も普通の突飛な破壞的な方の懷疑說は、自分の學生のうちに痕跡も認むることはできない。しかし、かゝる感情は外では(殊に東京では)大學生の間などに見出されよう、その一人の大學生は壯嚴な鐘のひゞきを聞いて自分の友人に叫んだ。「十九世紀に於て未だこんな鐘などをきかねばならぬと云ふのは恥ではないか」

しかし、物ずきな旅行者のために此機會を利用して云ふて置く、新しい敎育をうけた日本の紳士に佛敎のことを說くのは、智識のために信條や儀式を超越して居る人々に本國で基督敎を說くと同じく感心せぬことである。勿論宗敎や傳說の研

い．たしなみがない。 4. at home 本國で．即ち英國で。 5. 158ページ註 2. 參照。

scholars in religion or in folklore;[1] but these specialists do not undertake to gratify idle curiosity of the "globe-trotting" description.[2] I may also say that the foreigner desirous to learn the religious ideas or superstitions of the common people must obtain them from the people themselves,—not from the educated classes.

【註】 1. folklore 155 ページ註 6 參照。 2. description=kind, sort. 種類、「世界見物的種類」とは深く研究しない表面的な淺薄

究をする外人を喜んで助けてくれる日本の學者はある、しかし此等の專門家でも「世界見物」的種類のツマラヌ好奇心を滿足させるやうな事はない。又云ふて置く、一般人民の宗教的思想や迷信を學ばうと望む外人は敎育ある人々からでなく、必ず人民自身から學ばねばならない。

な間なさ云ふこさ。

XVIII

AMONG all my favourite students—two or three from each class—I cannot decide whom I like the best. Each has a particular merit of his own. But I think the names and faces of those of whom I am about to speak will longest remain vivid in my remembrance,—Ishihara,[1] Otani-Masanobu,[2] Adzukizawa,[3] Yokogi,[4] Shida.[5]

Ishihara is a samurai, a very influential lad in his class because of his uncommon force of character. Compared with others, he has a somewhat brusque,[6] independent manner, pleasing, however, by its honest manliness. He says everything he thinks, and precisely in the tone that he thinks it, even to the degree[7] of being a little embarrassing some-

【註】 1. 石原は現東京帝大醫科大學助教授醫學博士石原喜久太郎, 2. 正信大谷は金澤高等學校教授大谷正信。 3. 小豆澤は其後改姓した、現伏見工兵大隊長、工兵中佐藤崎八三郎, 4. 横木

十八

各級に二三人づゝある自分の好きな學生のうちで、一番誰が好きとは云へない。銘々それぞれの特長がある。しかしこれから書かうとする人々、石原、大谷正信、小豆澤、横木、志田の姓名や容貌は最も長く自分の記憶にハッキリ殘るであらうと思ふ。

石原は士族で人物が非常にシッカリして居るので級中に甚だ勢力がある。外の人々と比べるといくらか疎暴な獨立な風があるが正直な男らしい處があるので人好きがする。何でも思ふことは皆云つて仕舞ふ、そして思ふ通りの調子で云ふので時々相手を迷惑させる程である。たとへば先生

富三郎。 5. 志田昌吉。 6. brusque 無作法なる、がサツな。
7. even to the degree of ...... の程度にまでも。

times. He does not hesitate, for example, to find fault with[1] a teacher's method of explanation, and to insist upon a more lucid one. He has criticised[2] me more than once; but I never found that he was wrong. We like each other very much. He often brings me flowers.

One day that he had brought two beautiful sprays of plum-blossoms, he said to me:—

"I saw you bow before our Emperor's picture at the ceremony on the birthday of His Majesty. You are not like a former English teacher we had."

"How?"

"He said we were savages."

"Why?"

"He said there is nothing respectable except God,—*his* God,—and that only vulgar and ignorant people respect anything else."

"Where did he come from?"[3]

"He was a Christian clergyman, and said he was an English subject."

【註】 1. to find fault with 批難する、小言を云ふ、欠點を指摘す

の說明の仕方が惡いから、もつと分るやうに云つて下さいなどゝ平氣で云ふ。自分も時々攻擊されたが、石原が惡いと思つたことはなかつた。自分等は互ひに好きである。彼はよく自分に花を持つて來てくれる。

ある日、梅花の小枝を二つ持つて來てくれた時、自分に云つた。

「先生は天長節の式に御眞影に敬禮をなさいましたのを見ました。先生は先の先生とちがひます」

「どうして」

「先の先生は私共を野蠻人だと云ひました」

「何故」

「その先生は神樣(共人の神樣)の外に尊いものはない、そして外のものを尊ぶものは卑しい無學の人民に過ぎないと申しました」

「どこの國の人です」

「耶蘇教の僧侶で、英國の臣民だと申しました」

る。 2. criticise 批評する、批難する。 3. 何處の人です。

"But if he was an English subject, he was bound[1] to respect Her Majesty the Queen. He could not even enter the office of a British consul without removing his hat."

"I don't know what he did in the country he came from. But that was what he said. Now we think we should love and honour our Emperor. We think it is a duty. We think it is a joy. We think it is happiness to be able to give our lives for our Emperor.[2] But he said we were only savages — ignorant savages. What do you think of that?"

"I think, my dear lad, that he himself was a savage,—a vulgar, ignorant, savage bigot.[3] I think it is your highest social duty to honour your Emperor, to obey his laws, and to be ready to give your blood whenever he may require it of you for the sake of Japan. I think it is your duty to respect the gods of your

【註】 he was bound …… せればならかつた。 2. 著者は註して「自分は凡ての級に what is your dearest wish? と云ふ問を出したが丁度二割は陛下のために死ぬことと書いた、あとの大部分はネルソンの如くになりたい日本を偉大にしたいと云ふ間接的な答

「しかし英國臣民なら女王陛下を尊敬しなければならない。英國領事の事務室に入るにも脫帽しなければならない」

「本國でどんな事をなさるか知りません。けれども仰つた事は私の今申した通りでした。ところで私共は陛下を尊敬しなければならないと思ひます。それを本分と思ひます。陛下のために身命を捧げることのできるのを光榮と思ひます。しかし先の先生は只野蠻人、無智蒙昧な野蠻人だと申しました。先生如何御考ですか」

「君、私は其人自身こそ野蠻人、野卑な無學な分らずやの野蠻人だと思ふ。陛下を尊敬し、陛下の法律に隨ひ、日本のために陛下が召し給ふ時いつでも身命をなげうつ覺悟を有するのは君等の最高の義務だと思ふ。たとへ君自らが外の人々の信ずることを悉く信じられなくとも、祖先の神々

でおつたが意味はさきのものと同じでおつた、此精神が日本青年になほ存して居る限りは日本の未來は安全である」との意味を附加して居る。 3. bigot 頑迷の徒。

fathers, the religion of your country,—even if you yourself cannot believe all that others believe. And I think, also, that it is your duty, for your Emperor's sake and for your country's sake, to resent any such wicked and vulgar language as that you have told me of, no matter by whom uttered."[1]

Masanobu visits me seldom and always comes alone. A slender, handsome lad, with rather feminine features, reserved and perfectly self-possessed in manner, refined. He is somewhat serious, does not often smile; and I never heard him laugh. He has risen to the head of his class, and appears to remain there without any extraordinary effort. Much of his leisure time he devotes to botany—collecting and classifying plants. He is a musician, like all the male members of his family. He plays a variety of instruments[2] never seen or heard of in the West, including flutes of marble, flutes of ivory, flutes of bam-

【註】 1. no matter by whom uttered = no matter by whom it was

や國家の宗教を尊敬するのが君等の義務だと思ふ。それから誰が云つたにしても、君から今聞いたやうな野卑な惡口に對して憤慨するのは、國家のため又陛下のため君達のつとめだと思ふ』

正信は滅多に來ないが來る時はいつでも獨りで來る。細つそりした、女性的な顔形ちの美少年で、控え目な、全く落着いた樣子で、上品である。大分眞面目な方で笑ひ顔も餘りしない。聲をあげて笑ふのを自分は聞いたことはない。級の一番になつて、餘りひどく努力もしないでそこに居るやうである。植物を採集したり分類したりしてひまの大部分を植物學に捧げて居る。彼の家族の男子は皆さうだが彼も音樂家である。西洋では見られも聞かれもしない種々の樂器を奏する、そのうちには大理石の笛もある、象牙の笛もある、不思議

uttered. 2. a variety of instruments 種々の樂器。

boo of wonderful shapes and tones, and that shrill Chinese instrument called shō,—a sort of mouth-organ consisting of seventeen tubes of different lengths fixed in a silver frame. He first explained to me the uses in temple music of the taiko and shōko, which are drums; of the flutes called fei[1] or teki; of the flageolet termed hichiriki; and of the kakko, which is a little drum shaped like a spool with very narrow waist. On great Buddhist festivals, Masanobu and his father and his brothers are the musicians in the temple services, and they play the strange music called Ōjō and Batto,[2] —music which at first no Western ear can feel pleasure in, but which, when often heard, becomes comprehensible, and is found to possess a weird charm of its own. When Masanobu comes to the house, it is usually in order to invite me to attend some Buddhist or Shintō festival (*matsuri*) which he knows will interest me.

〔註〕 1. fei は fue の出雲訛り。 2. 皇麞 (Ōjō) 拔頭 (Battō) 共

な形と音色の竹の笛もある、それから笙と云ふ鋭い支那の樂器もある、銀の枠に入れた種々ちがつた長さの管が十七もある一種の吹く樂器である。彼は初めて大鼓、小鼓、笛、篳篥、それから胴の細長い錘のやうな恰好の、小さい鼓の羯鼓と云ふものを寺院の音樂で使用することを自分に說明した。大きな佛式の御祭りの時正信と正信の父及び弟等は寺院の樂人となつて皇麞と拔頭と云ふ變つた音樂を奏する。こんな音樂は西洋人の耳には初めのうちは何の趣味もないが聞くに隨つて分つて來る、そして一種特別の不思議な興味のあることが分る。正信の來るのはいつでも自分の興味のありさうな佛教か神道の御祭りに參列するように招きに來るのである。

に雅樂の曲名なり。

Adzukizawa bears so little resemblance to Masanobu that one might suppose the two belonged to totally different races. Adzukizawa is large, raw-boned, heavy-looking, with a face singularly like that of a North American Indian.[1] His people are not rich; he can afford few pleasures which cost money, except one,—buying books. Even to be able to do this he works in his leisure hours to earn money. He is a perfect bookworm, a natural-born researcher, a collector of curious documents, a haunter of all the queer second-hand stores in Teramachi and other streets where old manuscripts[2] or prints[3] are on sale as waste paper. He is an omnivorous[4] reader, and a perpetual borrower of volumes, which he always returns in perfect condition after having copied what he deemed of most value to him. But his special delight is philosophy and the history of philosophers in all countries. He has read various epitomes of the history

---

【註】 1. 熊本にて此原書の校正を見せられし時 此比べやうは

小豆澤と正信は全然別人種だと人が想像する程此二人は似たところが殆んどない。小豆澤は大きい骨つぽい、一見愚なやうな男である、顔は奇妙に北アメリカの印度人に似て居る。家は富んで居ない、只一つ書物を買ふことを除いては金のかゝる娯樂をすることは殆どできない。その書物を買ふためにも、彼は金を得るためにひまな時に働くのである。彼は本當の紙蟲（シミ）である、生れつきの詮索家である、古文書の採集家である、古い寫本や繪本が反古同樣に賣られる寺町やその他の古色蒼然たる古道具屋古本屋を一軒一軒徘徊して居る。彼は濫讀家である、絶えず書物を借りる、そして最も價値があると思ふところを寫してのち少しも毀損しないでチヤント返してくる。しかし一番好きなのは世界各國に於ける哲學及び哲學者の歴史である。西洋哲學史要略と云ふやうなも

ヒドイと藤崎氏（小豆澤）が抗議せしに、決して侮辱にあらず、アメリカのインド人は世界に於て最も勇敢なる人種なりと云つてヘルンに慰められしよし、藤崎中佐の話し。 2. manuscripts 原稿、寫本。 3. prints 版畫。 4. omnivorous 何でも構はず食べる、それより omnivorous reader 亂讀者の意味來る。

of philosophy in the Occident, and everything of modern philosophy which has been translated into Japanese,—including Spencer's "First Principles." I have been able to introduce him to Lewes[1] and John Fiske,[2]—both of which he appreciates,—although the strain of studying philosophy in English is no small one. Happily he is so strong that no amount of study is likely to injure his health, and his nerves are tough as wire. He is quite an ascetic[3] withal.[4] As it is the Japanese custom to set cakes and tea before visitors, I always have both in readiness, and an especially fine quality of kwashi, made at Kitzuki, of which the students are very fond. Adzukizawa alone refuses to taste cakes or confectionery[5] of any kind, saying: "As I am the youngest brother, I must begin to earn my own living soon. I shall have to endure much hardship.

【註】 1. Lewes は George Henry Lewes (Lū'es) (1817–1878, 有名なる女流小說家 George Eliot の夫なり、「列傳哲學史」「ゲーテ傳」等著作多し。 2. John Fiske (1842–1901) アメリカの人、著作多し、進化論を基としたる著述もあり 「The Idea of God」「The

のは色々讀んだ、それから近世哲學に關するもので、日本語に譯してあるものは、スペンサーの原理も加へて、皆讀んだ。自分はリュイスとヂョン、フイスクを紹介してやつた、英語で哲學を勉强するのは一通りの骨折でなかつたが兩方とも充分に分つた。幸にして彼は非常に强健であるからどんなに勉强しても身體が惡くなる心配はない。神經は針金のやうに强靱である。しかも彼は全く制慾家である。客の前に茶と菓子を出すのが日本の習慣であるので自分はいつでもその茶と菓子、殊に菓子は杵築で出來る特に上等なので、學生が皆好きであるのをいつも用意して居る。小豆澤だけはどんな種類の菓子も喰べようともしない、そして云ふ「私は末兒ですから、直に獨立の生活をしなければなりません。私は大に艱難をしなければならないでせう。それですから今から菓子が好き

Destiny of Man」等あり。 3 ascetic 苦行者、禁慾者 4. withal =besides, at the same time 其上に、同時に。 5. confectionery 甘い物の總稱、cake は菓子パンの如き饅頭の皮の如きものを云ふ。

And if I allow myself to like dainties now, I shall only suffer more later on."[1] Adzukizawa has seen much of human life and character. He is naturally observant; and he has managed in some extraordinary way to learn the history of everybody in Matsue. He has brought me old tattered prints to prove that the opinions now held by our director[2] are diametrically opposed to the opinions he advocated fourteen years ago in a public address. I asked the director about it. He laughed and said, "Of course that is Adzukizawa! But he is right: I was very young then." And I wonder if Adzukizawa was ever young.

Yokogi, Adzukizawa's dearest friend, is a very rare visitor; for he is always studying at home. He is always first in his class,—the third year class,—while Adzukizawa is fourth.[3] Adzukizawa's account of the beginning of their acquaintance is this: "I watched him when

【註】 1. later on = hereafter 今後。 2. 西田千太郎氏は當時校

になつて居たらかへつて後に困りませう」小豆澤は人間學は中々修めて居る。生れつき注意深いのである、そして不思議な方法で松江にある凡ての人の履歴を知つて居る。彼は古い破れた錦繪を持つて來て校長が十四年前公開演說で主張した意見と今日の校長の意見とが全然正反對であることを證明した。そのことについて校長に尋ねると校長は笑つて「勿論それは小豆澤です。しかし小豆澤の方が正しいのです、私は當時極めて若かつたのです」と云つた。そして自分は小豆澤がいつか若い時があつたらうかと不思議に思ふのである。

小豆澤の親友横木は滅多に來ない、いつでもうちで勉强して居るからである。彼はいつでもその級（三年級）の一番で、小豆澤は四番である。彼等二人の交際の初まりの小豆澤の話しはからであ

員も得の如き地位にありし故、西田氏のこと。3. 横木は三年生の一番、小豆澤は四番なり。

he came and saw that he spoke every little, walked very quickly, and looked straight into everybody's eyes. So I knew he had a particular character. I like to know people with a particular character." Adzukizawa was perfectly right: under a very gentle exterior, Yokogi has an extremely strong character. He is the son of a carpenter; and his parents could not afford to send him to the Middle School. But he had shown such exceptional qualities while in the Elementary School that a wealthy man became interested in him, and offered to pay for his education.[1] He is now the pride of the school. He has a remarkably placid face, with peculiarly long eyes, and a delicious smile. In class he is always asking intelligent questions — questions so original that I am sometimes extremely puzzled how to answer them; and he never ceases to ask until the explanation is quite satisfactory to himself. He never cares about the opinion

【註】 1. 著者は註を加へて「此種の beautiful generosities (美はし

る「私は横木が來た時じつと見て居ました、そして餘りシャベラないで、早足で歩いて、人の目の處を眞直に見るのを見ました。そこで私は此男の特色のあることを知りました。私は特色ある人間と交るのが好きです」小豆澤の云ふことは全く本當である、横木は至極温和な外貌の下に非常に强い性格を持つて居る。彼は大工の子である、そして兩親はその子を中學校に出すことはできなかつた。しかし小學校で拔群の成績を示したのである富有な人が感心して學費を出さうと云ひ出した。彼は今學校の花である。彼は殊に長い目の著しく平和な顏と愉快さうな微笑をして居る。敎場ではいつでも敏い質問をする、其質問が餘り奇拔なので何と答へてよいか自分は時々非常に困ることがある、そして其說明が腑に落ちないうちは決して質問を止めない。自分が正しいと思つ

き義俠的行爲)は日本では珍らしくはない」と云つて居る。

of his comrades if he thinks he is right. On one occasion when the whole class refused to attend the lectures of a new teacher of physics, Yokogi alone refused to act with them,—arguing that although the teacher was not all that could be desired, there was no immediate possibility of his removal, and no just reason for making unhappy[1] a man who, though unskilled, was sincerely doing his best. Adzukizawa finally stood by him.[2] These two alone attended the lectures until the remainder of the students, two weeks later, found that Yokogi's views were rational. On another occasion when some vulgar proselytism[3] was attempted by a Christian missionary, Yokogi went boldly to the proselytiser's house, argued with him on the morality[4] of his effort, and reduced him to silence. Some of his comrades praised his cleverness in the argument. "I am not clever," he made answer: "it does not require cleverness to argue against what

【註】 1. making a man unhappy ...... と同じ、unhappy は complement なり。 2. stood by him = sided with him, aided him. 彼の

たら仲間の意見などは構はない。ある時全級が物理の新教師の講義に出ることを拒んだ時、横木だけは彼等と同一の行動を取ることを拒んだ、先生は理想通りの先生でなくともすぐ止めて貰へさうにはない、又どんなに無經驗でも眞面目に全力をつくして居る先生に不快な念を抱かす正當の理由がないと論じたのであつた。小豆澤は最後に彼に賛成した。此二人だけ講義に出席したので、終に殘りの學生も二週間の後には横木の意見の正しいことをさとるに到つた。又ある時基督教の宣教師が卑しい手段を弄して人に改宗を施さうとした時横木は大膽にその宣教師の宅に赴いて彼の仕業の不德義なることについて彼と論じ遂に彼を沈默さするに到つた。彼の仲間のうちで彼の議論の巧みなことを賞めるものがあつた。彼は答へて「僕は巧みなことはない、道德上不正なことに對して議論するのに何にも巧みである必要

味方となつた。 3. proselytism 改宗を勸誘すること。 4. morality 道德について論じたのであるから、つまり不德義なることを論じたのである。

is morally wrong; it requires only the knowledge that one is morally right." At least such is about the translation of what he said as told me by Adzukizawa.

Shida, another visitor, is a very delicate,[1] sensitive boy, whose soul is full of art. He is very skilful at drawing and painting; and he has a wonderful set of picture-books by the old Japanese masters. The last time he came he brought some prints to show me,—rare ones,—fairy maidens and ghosts. As I looked at his beautiful pale face and weirdly frail fingers, I could not help fearing for him,—fearing that he might soon become a little ghost.[2]

I have not seen him now for more than two months. He has been very, very ill; and his lungs are so weak that the doctor has forbidden him to converse. But Adzukizawa has been to visit him, and brings me this translation of a Japanese letter which the sick boy

1. delicate 蒲柳の質の、弱い。 2. 彼も又死にはせぬかさ

はない。こちらが道德上正しいと云ふことが充分分つて居さへすればよい」少くともこれは小豆澤が横木の云つたことを翻譯して自分にきかせたものに近いのである。

もう一人の訪問者の志田は餘程虚弱な神經質の子供で、心のうちは美術でみちて居る。繪畫は餘程上手である、古への日本の大家の立派な繪本を一部もつて居る。最後に來た時には自分に見せるために珍らしいもの—天女、幽靈、などの版畫を持つて來た。自分が此美しい蒼白い顔と物凄い程細い指を見た時彼も又やがて小さい靈になりはしないかと彼のために恐れずには居られなかつた。

今自分は二ヶ月以上も彼に遇はない。彼は餘程惡い、醫師が談話を禁じた程肺が惡いのである。しかし小豆澤は彼を訪ふて來て日本の手紙の此翻譯を持つて來てくれる、此手紙は病氣の少年が

恐れた。

wrote and pasted upon the wall above his bed :—

"Thou, my Lord-Soul, dost govern me. Thou knowest that I cannot now govern myself. Deign,[1] I pray thee, to let me be cured speedily. Do not suffer me to speak much. Make me to obey in all things the command of the physician.

"This ninth day of the eleventh month of the twenty-fourth year of Meiji.

"From the sick body of Shida to his Soul."[2]

【註】 1. deign (Dān) 許せ、……し給へ、(こゝでは)。 2. 疾軀、腦髓等の譯は志田の原文による、これは小豆澤氏（藤崎中佐）の

書いて寢床の上の壁に糊ではつて置いたものである。

「わが腦髓足下、足下は我を支配せり。足下の知れる如く今や我、自らを支配すること能はず。我願ふ速に我を快復せしめよ。我をして多く話さしむる勿れ。我をして萬事醫師の命に服さしめよ。

明治二十四年、十一月九日。

志田の病軀より志田の腦髓へ」

暗示による。

XIX

September 4, 1891.

THE long summer vacation is over; a new school year begins.[1]

There have been many changes. Some of the boys I taught are dead. Others have graduated and gone away from Matsue forever. Some teachers, too, have left the school, and their places have been filled; and there is a new Director.

And the dear good Governor has gone—been transferred to cold Niigata in the north-west.[2] It was a promotion. But he had ruled Izumo for seven years, and everybody loved him, especially, perhaps, the students, who looked upon him as a father. All the population of the city crowded to the river to bid

【註】 1. 其當時は九月が新學年の初めで 七月が學年の終りであ

十九

一八九一、九月四日

長き暑中休暇は終り、新學年は初まる。

隨分變つて居る。敎へた生徒のうちで死んだものもある。卒業して松江を永久に去つたものもある。又敎師で變つたものもある、代りの人々も來て居る、そして新校長が來て居る。

又なつかしき知事も行かれた、西北の寒い新潟に轉任された。榮轉であつた。しかし此人は出雲を治めたこと七年であつた、そして誰でも此知事を愛したが父のやうに思ふて居た學生等は特に愛して居た。松江市の住民が別れのために河に集

つた。 2. 新潟の位置を northwest としたるは northeast の誤り。

him farewell. The streets through which he passed on his way to take the steamer, the bridge, the wharves, even the roofs were thronged with multitudes eager to see his face for the last time. Thousands were weeping. And as the steamer glided from the wharf such a cry arose,—" *A-a-a-a-a-a-a-a-a-a !*" It was intended for a cheer,[1] but it seemed to me the cry of a whole city sorrowing, and so plaintive that I hope never to hear such a cry again.

The names and faces of the younger classes are all strange to me. Doubtless this was why the sensation[2] of my first day's teaching in the school came back to me with extraordinary vividness when I entered the classroom of First Division A this morning.

Strangely pleasant is the first sensation of a Japanese class, as you look over the ranges of young faces before you. There is nothing in them familiar to inexperienced Western

〔註〕 1. cheer 歡呼、喝采. (three cheers 萬歲三唱) の如し。

つた。汽船にのるために通る道筋の町々、橋、波止場、屋根までに人々が群をなして見納めに知事の顔を見ようとあせつた。泣いて居る人が數千あつた。汽船が波止場を離れる時、アヽヽヽヽヽヽヽヽと云ふ叫びが起つた。これは知事の行を盛んにするつもりなのだが自分には松江全市の悲みの泣聲のやうに思はれた、そして再びこんな聲を聞きたくはないと思ふ程憂を帶びたものと思はれた。

初年級の姓名と顔は皆自分に珍らしい。疑もなくこれは學校で初めて教へた日の氣分が今朝一年甲組の教場へ入つた時、非常にハッキリ自分に又かへつて來たからである。

日本の教場に入つて自分の前に若い顔がズラリと列らんだのを見渡す時の初めての氣分は奇妹に快いのである。初めての西洋人の眼には見慣

2 暫らく慣れて分らなくなつて居たが今度又初めて教場へ出た時と同じ感じが起つたのである。

eyes; yet there is an indescribable pleasant something common to all. Those traits have nothing incisive, nothing forcible: compared with Occidental faces they seem but "half-sketched," so soft their outlines are—indicating neither aggressiveness nor shyness, neither eccentricity nor sympathy, neither curiosity nor indifference. Some, although faces of youths well grown, have a childish freshness and frankness indescribable; some are as uninteresting as others are attractive; a few are beautifully feminine. But all are equally characterised by a singular placidity,—expressing neither love nor hate nor anything save perfect repose and gentleness,—like the dreamy placidity of Buddhist images. At a later day you will no longer recognise this aspect of passionless composure: with growing acquaintance each face will become more and more individualised for you by character-

【註】 此一節は日本人の顔面表情について述べたるものである、日本人の顔は passionless composure を表はして居る、即ち落ち

れない顔ばかりであるがどの顔にも共通な名状のできない愉快なものがある。ハッキリした強い印象を與ふる特色のあるものはない、西洋人の顔と比べると、それ等の顔は未製品にしか見えないほど輪廓などおだやかである。喧嘩好きも又控へ目も好奇心も又無頓着も少しも表はれて居ない。中には充分發達した青年の顔だが、何とも云へぬ程子供らしい若々しさと正直さを表はして居るのがある、平凡な顔もあれば注目すべきものもある、又、女のやうに奇麗なものも少しはある。しかし何れも皆著しい温和と云ふ特色を表はして居る、全く落ちついて素直な點を除いて愛憎その他何等の念も表はれて居ない佛像の夢みるやうな温和である。後になつて此温和な平靜なやうすにもはや氣がつかなくなるであらう、段々慣れるに隨つてどの顔にもこれまで氣づかなかつた特色が次第に表はれて諸君に個人的區別ができるやうになるであらう。しかしその初めての印

ついて、感情が表はれて居ない、「我」がない、これが顔面ばかりでなく日本人の魂にもさうしたところがある。

istics before imperceptible. But the recollection of that first impression will remain with you; and the time will come when you will find, by many varied experiences, how strangely it foreshadowed something in Japanese character to be fully learned only after years of familiarity. You will recognise in the memory of that first impression one glimpse of the race-soul, with its impersonal lovableness and its impersonal weaknesses,—one glimpse of the nature of a life in which the Occidental, dwelling alone, feels a psychic comfort comparable only to the nervous relief of suddenly emerging from some stifling atmospheric pressure into thin, clear, free living air.[1]

【註】 1. 著者 Hearn がアメリカを去つて日本に來た感じはむしあつい やうな空氣から thin, clear, free living air に歸つたやうな

象が諸君と共に殘るであらう、そして長く親しんだあとで初めて充分分る日本人の性格の或點を不思議にも豫じめ示して居たものであることを種々の經驗をへたのちにさとる時が來るであらう。初めての此印象の記憶のうちに個人性のない愛すべき點と個人性のない弱點とを有する日本人の魂を少しのぞいたことを認むるであらう、窒息するやうな氣壓から急に輕い明るい自由な自然のまゝの空氣の中へ出た時に急に清々したのにのみ比べられるやうな精神的安樂を西洋人が獨りで居て感ずるやうな人生の性質を少し見たことを認むるであらう。

心地であつた。

XX

WAS it not the eccentric Fourier[1] who wrote about the horrible faces of "the *civilizés?*" Whoever it was, would have found seeming confirmation of his physiognomical theory could[2] he have known the effect produced by the first sight of European faces in the most eastern East. What we are taught at home to consider handsome, interesting, or characteristic in physiognomy does not produce the same impression in China or Japan. Shades of facial expression familiar to us as letters of our own alphabet[3] are not perceived at all in Western features by these Orientals at first acquaintance. What they discern at once is the race-characteristic, not the individuality.

【註】 1. the eccentric Fourier. eccentric は中心を外れたる、脱線したる、風變りの、Fourier と名のつくフランス人多けれど、どの人か分らず。 2. could he have known＝if he could have known...。

二十

文明人の恐るべき顔について書いたのは奇人フーリエではなかつたか。誰にしてもこの極東で歐洲人の顔を初めて見た時どんな結果があつたかその人に分つたならその人の骨相學的學說が實際の解決を見たらしく思つたであらう。本國で容貌について「奇麗である」「人好きがする」「特色がある」と敎へられて居るものは支那や日本ではその通りの印象を與へない。西洋のイロハ文字程自分等に親しい顔面表情の種類は初めての東洋人には分らない。東洋人の初めに認むるところは民族の特性であつて個性でない。凹んだ眼、凸

3. 顔面表情のイロハとも云ふべき程我々に明白なる西洋人の顔面表情も初めての東洋人には少しも分らない。

The evolutional meaning of the deep-set Western eye, protruding brow, accipitrine[1] nose, pondrous jaw—symbols of aggressive force and habit—was revealed to the gentler race by the same sort of intuition through which a tame animal immediately comprehends the dangerous nature of the first predatory[2] enemy which it sees. To Europeans the smooth-featured, slender, lowstatured Japanese seemed like boys; and "boy" is the term by which the native attendant of a Yokohama merchant is still called. To Japanese the first redhaired, rowdy,[3] drunken European sailors seemed fiends, shōjō, demons of the sea; and by the Chinese the Occidentals are still called "foreign devils." The great stature and massive strength and fierce gait of foreigners in Japan enhanced the strange impression created by their faces.[4] Children cried for fear on seeing them pass through the streets. And in remoter districts, Japanese children are

【註】 1. accipitrine (ak-sip′-i-trin) = hawk-like 鷹の如き。 2. predatory 生物を捕へて喰ふ。 3. rowdy = rough あらい、無法の。

出した額、鷹のやうな鼻、大きな顎の進化論上の意味(侵略的勢力、習慣のしるし)は飼はれた動物が初めて生物を捕食する敵を見て直ちに其性質をさとると同じ種類の直覺力で穏やかな人種にさとらるゝのである。歐洲人に滑らかな顔付の、細つそりした、たけの低い日本人は子供のやうに見える、そして「ボーイ」は横濱の商人の日本人の從者が今日も呼ばるゝ名である。日本人にとつては初めての赤い毛の、あばれものゝ、醉いどれの歐洲水夫は惡魔か、猩々か、海の怪物に見えた、そして支那人には西洋人は今も「洋鬼」と呼ばれて居る。日本に於ける外國人の大きな身長、大きな力量、烈しい歩きぶりは彼等の顔から來る變な感じを強くして居る。子供等は彼等が往來を通つて居るのを見て恐れて泣き出した。そしてもつ

4. 顔を見ると恐ろしいが、身長や力や歩きぶりを見ると一層その恐ろしさ、氣味惡さが増す。

still apt to cry at the first sight of a European or American face.

A lady of Matsue related in my presence this curious souvenir of her childhood: "When I was a very little girl," she said, "our daimyō hired a foreigner to teach the military art. My father and a great many samurai went to receive the foreigner; and all the people lined the streets to see,—for no foreigner had ever come to Izumo before; and we all went to look. The foreigner came by ship: there were no steamboats here then. He was very tall, and walked quickly with long steps; and the children began to cry at the sight of him, because his face was not like the faces of the people of Nihon. My little brother cried out loud, and hid his face in mother's robe; and mother reproved him and said: 'This foreigner is a very good man

【註】松江の夫人とは實は著者の夫人のこと、虫眼鏡は其時與へられたるにあらずして、夫人の父即ち出雲の士族にて當時佛人の

と遍僻な處では日本の子供は歐米人の顔を初めて見て今日でも泣き勝ちである。

松江のある婦人は自分の前で、小さい時の此珍らしい追懐談を語つた。『私が餘程小さい時分に大名が武術を敎ふる西洋人を御雇になりました。私の父と大勢のサムライがその西洋人を迎ひに出ました、それから澤山の人々が見物に往來の兩側に列んで居ました、以前に西洋人の來たことは一度もありませんでしたから。そこで私共は皆見に參りました。西洋人は船で參りました、當時こちらには汽船はありませんでした。西洋人は非常にたけが高くて、長い足で早く歩きました、それから子供等はその人を見て泣き出しました、顔は日本人の顔と同じでなかつたからです。私の弟は大聲で泣き出して母の着物に顔を隱しました、そこで母は叱つて申しました「此西洋人は殿樣に仕

學生なりし人に與へしものをかくの如くに記したるものゝよし、此虫眼鏡は今も夫人が藏し居らる。

who has come here to serve our prince; and it is very disrespectful to cry at seeing him.' But he still cried. I was not afraid; and I looked up at the foreigner's face as he came and smiled. He had a great beard; and I thought his face was good though it seemed to me a very strange face and stern. Then he stopped and smiled too, and put something in my hand, and touched my head and face very softly with his great fingers, and said something I could not understand, and went away. After he had gone I looked at what he put into my hand and found that it was a pretty little glass to look through. If you put a fly under that glass it looks quite big. At that time I thought the glass was a very wonderful thing. I have it still." She took from a drawer in the room and placed before me a tiny, dainty pocket-microscope.

The hero of this little incident was a French military officer. His services were necessarily dispensed with[1] on the abolition of the feudal

【註】 1. to dispense with = to give up, to forgo. やめる。

へにこゝへ來た大變よい人だから此人を見て泣くのは失禮千萬です」しかし弟はやはり泣きました。私は恐ろしくはありませんでした、私は西洋人の顏を見上げて居ましたらその西洋人は來てニッコリ笑ひました。大きな顎ひげがありました、大變不思議な恐ろしい顏だとは思ひましたがよい顏だと思ひました。それから止つてニッコリして私の手に何か入れました、そして大きな指で私の頭や顏にさはりました、そして何だか分らぬことを云ふて行つて仕舞ました。西洋人が行つたあとで私は手に入れてあつたものを見たら、それは小さい奇麗な眼鏡でした。その眼鏡の下へ蠅を入れると中々大きく見えます。その當時私は此眼鏡は大變不思議なものだと思ひました。今でもそれをもつて居ます』此婦人は部屋の箪笥から取り出して自分の前に小さい奇麗な懷中顯微鏡を置いた。

此小さい事件の主人公はフランスの將校であつた。封建制度の廢止と共に此人の勤務は當然な

system. Memories of him still linger in Matsue;[1] and old people remember a popular snatch[2] about him,—a sort of rapidly-vociferated rigmarole,[3] supposed to be an imitation of his foreign speech.

> Tōjin no negoto niwa kinkarakuri medagashō,
> Saiboji ga shimpeishite harishite keisan,
> Hanryō na *Sacr-r-r-r-r-é-na-nom-da-Jiu*,[4]

【註】 1. 明治の初年の頃のことで、名はロレットと傳へられて居る。 2. a snatch 一ふし、一片。 3. rigmarole 出たらめ、無駄

くなつた。此人の話は今も松江に殘つて居る、そして老人達は此人に關するはやり節を覺えて居る、彼の外國語のまねと思はれるやうな早口のデタラメの一種である。

唐人ノネゴトニハ　キンカワクリ　メーダガショーサイ坊主　ガ　シッペイシテ　ハリシテ　ケイサン
ハンリヤウ　ナ　サツクル…………レナノンダウユ

口。唐人のねごと故もとより分らぬもの、終りのところはルルルルと舌をふるはせるものゝよし。

XXI

November 2, 1891.

SHIDA will never come to school again. He sleeps under the shadow of the cedars, in the old cemetery of Tōkōji. Yokogi, at the memorial service, read a beautiful address (*saibun*) to the soul of his dead comrade.

But Yokogi himself is down. And I am very much afraid for him.[1] He is suffering from some affection of the brain, brought on, the doctor says, by studying a great deal too hard. Even if he gets well, he will always have to be careful. Some of us hope much; for the boy is vigorously built and so young. Strong Sakane burst a blood-vessel last month and is now well. So we trust that Yokogi may

【註】 1. I am very much afraid of him ならば彼を恐るゝことに

二十一

一八九一、十一月二日

志田は再び學校へ來ることはない。彼は洞光寺の古い墓地の杉の木の影の下に眠つて居る。追悼會の時、横木は死んだ友人の靈に對して美はしい祭文を讀んだ。

しかしその横木自身も病んで居る。そして自分は彼に對して甚だ心配にたへない。醫師の言によれば過度の勉强から起つた何か腦の病氣で惱んで居るのである。たとへよくなつても始終注意して居らねばならない。中には横木は體格强壯で其上若いから大丈夫だらうと思つて居るものもある。强い坂根は先月血を吐いたが、今はもうよい。そんな風に横木も回復するであらうと信ぜられ

なる。

rally.[1] Adzukizawa daily brings news of his friend.

But the rally never comes. Some mysterious spring in the mechanism of the young life has been broken. The mind lives only in brief intervals between long hours of unconsciousness. Parents watch, and friends, for[2] these living moments to whisper caressing things, or to ask: "Is there anything thou dost wish?" And one night the answer comes:—

"Yes: I want to go to the school; I want to see the school."

Then they wonder if the fine brain has not wholly given way,[3] while they make answer:—

"It is midnight past, and there is no moon. And the night is cold."

"No; I can see by the stars—I want to see the school again."

They make kindliest protests in vain: the

【註】 1. rally 元氣回復する、盛りかへす、名詞も動詞も同じく rally. 2. parents watch, and friends watch for...... と同じ、friends

る。小豆澤は毎日友人の知らせをもつて來る。

しかし回復は決して來ない。その若い生命の機關の何か不思議のゼンマイが切れた。人事不省が長く續いて時々暫らくの間だけ心が生きて居る。兩親とそれから親戚友人は日夜注意してその氣のついて居る時を利用して何かやさしいことをさゝやいたり、或は「何か望みはないか」と聞いて見ようとして居る。それから或晩其返事がある。

「ハイ、僕は學校へ行きたい、學校を見たい」

そこで一同が此よい頭腦も全く駄目になつたのではないかと思ひながら返事をする。

「もう夜中が過ぎて居るし、それから月もない。其上夜は寒い」

「いえ、星で見えます—僕はもう一度學校を見たい」

一同は最もやさしくすかして見ても駄目であ

は友人、親戚、味方。 3. give way 前出。

dying boy only repeats, with the plaintive persistence of a last wish,—

"I want to see the school again; I want to see it now."

So there is a murmured consultation in the neighbouring room; and tansu-drawers are unlocked, warm garments prepared. Then Fusaichi, the strong servant, enters with lantern lighted, and cries out in his kind rough voice:—

"Master[1] Tomi will go to the school upon my back: 'tis but a little way; he shall see the school again."

Carefully they wrap up the lad in wadded robes; then he puts his arms about Fusaichi's shoulders like a child; and the strong servant bears him lightly through the wintry street; and the father hurries beside Fusaichi, bearing the lantern. And it is not far to the school, over the little bridge.

【註】 1. Master 坊っちやん、大きくなるまでは Master. 大きく

つた、死にかゝつて居る少年はたゞ最後の願を悲しげに執念深くくりかへして居る。

「僕はもう一度學校を見たい、今見たい」

そこで隣室で小聲で相談が初まる、それから簞笥の引出しが開いて暖い着物が用意された。それから房市と云ふ丈夫な下男が提灯をつけて來て、やさしい無骨な聲で叫ぶ—

「富さん、ワシの背中にのつて學校へ參りませう、ナーニ近いから、坊つちやんにもう一度學校を見せて上げます」

大事に一同が綿入で此少年を包む、それから小兒のやうに房市の肩に腕を置く、そして此丈夫な下男は寒い街を通つて安らかに彼を負ふて行く、父は提灯をもつて房市の側から急ぐ。そして小さい橋向ふの學校まで遠くはない。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

なつてから Mister。

The huge dark-grey building looks almost black in the night; but Yokogi can see. He looks at the windows of his own class-room; at the roofed side-door where each morning for four happy years he used to exchange his getas for soundless sandals of straw; at the lodge of the slumbering Kodzukai; at the silhouette[1] of the bell hanging black in its little turret against the stars.

Then he murmurs :—

"I can remember all now. I had forgotten —so sick I was. I remember everything again. Oh, Fusaichi, you are very good. I am so glad to have seen the school again."

And they hasten back through the long void[2] streets.

【註】 1. silhouette (sil″ṳ-et′) 唯輪廓だけ分るやう光線に對して

大きな薄墨色の建物は夜目に殆んど眞黑に見える、しかし横木には見える。彼は自分の教室の窓を見る、樂しかつた四ヶ年いつも毎朝下駄と音のしない草履とはきかへた屋根のある生徒昇降口を見る、今寢て居る小使の部屋を見る、小さい塔に眞黑くかゝつて居る鐘が星あかりに影をうつして居るところを見る。

それからさゝやく。

「今みんな思ひ出せる。忘れて居た—そんなひどい病氣だつた。みんな又思ひ出す。あゝ、房市、お前は本當に親切だ。僕はもう一度學校を見たので非常に嬉しい」

それから又彼等は長い人の通らない街を通つて急いで歸る。

見える人又は物の外觀、影像。 2. void—empty, vacant 空しき。

XXII

November 26, 1891.

YOKOGI will be buried to-morrow evening beside his comrade Shida.

When a poor person is about to die, friends and neighbours come to the house and do all they can to help the family. Some bear the tidings to distant relatives; others prepare all necessary things; others, when the death has been announced, summon the Buddhist priests.

It is said that the priests know always of a parishioner's death at night, before any messenger is sent to them; for the soul of the dead knocks heavily, once, upon the door of the family temple. Then the priests arise and robe themselves, and when the messenger comes make answer: "We know; we are ready."

Meanwhile the body is carried out before the family butsudan, and laid upon the floor.

二十二

一八九一、十一月二十六日

横木は明晩、友人志田の側に葬らるゝのである。

貧しい人の臨終に、友人や隣人がその家に來てできるだけの世話をする。遠い親戚へ通知をやるものもある、凡て必要な準備をするものもある、又死んだとなれば僧侶を迎へに行くものもある。

僧侶は使が行かぬうちに、檀家の人が夜、死ぬのを知つて居ると云はれて居る、死んだ人の魂が寺の戸を一度ひどくたゝくからである。それから寺僧は起きて僧衣をつける、そして使が來る時「承知して居ります、用意して居ります」と答へる。

その間に屍骸は家の佛壇の前に運ばれて床の上に置かれる。頭には枕が置いてない、抜身の刀

No pillow is placed under the head. A naked sword is laid across the limbs[1] to keep evil spirits[2] away. The doors of the butsudan are opened; and tapers are lighted before the tablets of the ancestors; and incense is burned. All friends send gifts of incense. Wherefore a gift of incense, however rare and precious, given upon any other occasion, is held to be unlucky.

But the Shintō household shrine must be hidden from view with white paper; and the Shintō ofuda fastened upon the house door must be covered up during all the period of mourning.[3] And in all that time no member of the family may approach a Shintō temple, or pray to the Kami, or even pass beneath a torii.

A screen (*biōbu*) is extended between the body and the principal entrance of the death chamber; and the kaimyō, inscribed upon a

【註】 1. 手さ足さ兩方に cross になるやうに置く時には胴の上に置くことになるが實は手なり足なりに置くことなり。 2. evil

は惡魔除けに手足のところに置いてある。佛壇の戸は開かれ先祖代々の位牌の前には蠟燭をともしてある、そして香を焚いてある。親戚友人は皆香を贈る。それ故如何に珍らしく貴くとも、外の時に香を人に贈るのは不吉とせられる。

しかし神棚は白紙で見えないやうに隱される。戸口に打ちつけてある神社のお札は凡て忌中はつゝみ隱されねばならない。凡てその間は家人は誰でも神社に近づいたり、神に祈つたり、鳥居をくゞつたりしてはならない。

屍骸と此部屋の入口との間に屛風が擴げてある、白紙の一片に書いてある戒名は屛風の上には

spirits は惡魔。 3. all the period of mourning 忌中は全く、松江ではこの忌中は五十日のよし。

strip of white paper, is fastened upon the screen. If the dead be young the screen must be turned upside-down; but this is not done in the case of old people.

Friends pray beside the corpse. There a little box is placed, containing one thousand peas, to be used for counting during the recital of those one thousand pious invocations, which, it is believed, will improve the condition of the soul on its unfamiliar journey.[1] The priests come and recite the sutras; and then the body is prepared for burial. It is washed in warm water, and robed all in white. But the kimono of the dead is lapped over to the left side. Wherefore it is considered unlucky at any other time to fasten one's kimono thus, even by accident.

When the body has been put into that strange square coffin which looks something like a wooden palanquin,[2] each relative puts also into the coffin some of his or her hair or

【註】 1. its unfamiliar jou ney 靈魂の不慣れな旅路、冥途の旅。

つてある。死人がもし若ければ屏風はさかさに置かれねばならぬが老人の場合にはさうはされない。

親戚友人は屍骸の側で祈禱する。そこには一千の祈りをくりかへす間に、數へるための一千の豆粒の入つた小さい箱が置いてある、その不慣れな旅路にある靈魂は此祈りのために助かると信じられて居る。

僧が來て讀經をする、それから葬送の準備になる。死體は溫湯で洗つて眞白の着物を着せる。しかし死人の着物は左り前に合せる。それ故偶然にでも人の着物を外の場合そんな風に合せるのは不吉と考へられる。

死體が木の駕籠のやうなものに似たと思はれる妙な四角な棺に入れられた時親戚は彼等の血を代表する男女それぞれの髮の毛や爪を切つて

2. palanquin 乘物、駕籠。

nail parings,[1] symbolising their blood. And six rin are also placed in the coffin, for the six Jizō who stand at the heads of the ways of the Six Shadowy Worlds.

The funeral procession forms at the family residence. A priest leads it, ringing a little bell; a boy bears the ihai of the newly dead. The van of the procession is wholly composed of men—relatives and friends. Some carry hata, white symbolic bannerets; some bear flowers; all carry paper lanterns,—for in Izumo the adult dead are buried after dark: only children are buried by day. Next comes the kwan or coffin, borne palanquin-wise upon the shoulders of men of that pariah caste[2] whose office it is to dig graves and assist at funerals. Lastly come the women mourners.

They are all white-hooded and white-robed from head to feet, like phantoms. Nothing more ghostly than this sheeted train[3] of an

【註】 hair or nail parings 毛や爪の切つたもの。 2. pariah caste 穢多、非人の族、出雲では「山の者」と云ふ。

少しづゝ入れる。そして棺の中へ六匣入れる、六道の辻に立つて居る地藏のためである。

家で葬列ができる。僧が小さい鐘をならして先導する、童子が新佛の位牌を持つて行く。行列の先驅は全く男子の親戚や友人である。何かの意味を表せる白い小旗を持つものもある、花を持つものもある、一同は提灯を持つ、—これは出雲では成人(オトナ)は夜葬らるゝからである、子供だけは晝葬られる。つぎに棺が來る、墓を掘つたり、葬式の助けをしたりするのを仕事として居る穢多の肩に轎(カゴ)のやうにかつがれて居る。終りに女の會葬者が來る。

此人々は頭から足まで幽靈のやうに白い頭巾をかむり白い着物を着て居る。提灯のあかりだけで照らされた出雲の葬式の行列の此白衣の一群

3. sheeted train 白衣の一列。

Izumo funeral procession, illuminated only by the glow of paper lanterns, can be imagined. It is a weirdness that, once seen, will often return in dreams.

At the temple the kwan is laid upon the pavement before the entrance; and another service is performed, with plaintive music and recitation of sutras. Then the procession forms again, winds once round the temple court, and takes its way to the cemetery. But the body is not buried until twenty-four hours later, lest the supposed dead should awake in the grave.

Corpses are seldom burned in Izumo. In this, as in other matters, the predominance of Shintō sentiment is manifest.

よりももつとまぼろしのやうなものは想像ができない。一度見たら屢々夢に歸つてくる物すごさである。

御寺で棺は玄關の前の敷石の上に置かれる、そして讀經と悲しげな音樂とで別の佛事が行はれる。それから行列は再びつくられ、御寺の庭を一度廻り、それから墓地に進む。しかし死體は二十四時間の後でなければ埋められない、死んだと思つた人が墓のうちで生きかへることのない用心である。

出雲では火葬は殆んどない。此點に於ても外の點に於けると同じく神道の感情の有力なことが明らかである。

XXIII

FOR the last time I see his face again, as he lies upon his bed of death,—white-robed from neck to feet,—white-girdled for his shadowy journey,—but smiling with closed eyes in almost the same queer gentle way he was wont to smile at class on learning the explanation of some seeming riddle in our difficult English tongue. Only, methinks, the smile is sweeter now, as with sudden larger knowledge of more mysterious things.[1] So smiles, through dusk of incense in the great temple of Tōkōji, the golden face of Buddha.

【註】 1. more mysterious things 六ッかしい英語よりもさらに不

二十三

見納めに又自分は彼の顔を見る、彼は首から足まで白裝束をつけて、幽界の旅路のために白い帶をつけて、死の床にねて居る、しかしなそのやうな六つかしい英語の說明を聞いた時のいつもの微笑と殆んど同じ奇妙な溫和な風で眼を閉ぢたまゝで微笑して居る。たゞ今の微笑は一層不可思議なことに關する一層大きな智識を得たので更に一層美はしいやうである。洞光寺の御堂の香の烟りのうちに佛の黄金の顏ばせがその通りに微笑し給ふ。

可思議のこと即ち生死に關することなど。

XXIV

December 23, 1891.

THE great bell of Tōkōji, is booming for the memorial service,—for the tsuito-kwai of Yokogi,[1]—slowly and regularly as a minute-gun.[2] Peal on peal of its rich bronze thunder shakes over the roofs of the town, and breaks in deep sobs of sound against the green circle of the hills.

It is a touching service, this tsuito-kwai, with quaint ceremonies which, although long since adopted into Japanese Buddhism, are of Chinese origin and are beautiful. It is also a costly ceremony; and the parents of Yokogi are very poor. But all the expenses have

〔註〕 1. この追悼會は四年生横木富三郎、三年生志田昌吉、三年生妹尾丑之助三人のために催されたもの、著者は都合上横木の分にしたものである、時は明治二十四年十二月二十三日の事故、當時著者ヘルンは熊本高等中學校へ轉任したあさのこさであつた、この記事は全く小豆澤（藤崎中佐）の通信せしさころによりしものを參考さして書いたもの、當時の新聞記事によれば會する

二十四

一八九一、十二月二十三日

洞光寺の大つり鐘は横木の追悼會のために徐ろに規則正しく分時砲(弔砲)のやうに鳴つて居る。その豐かな青銅のうなりの幾しきりが湖の上で動揺し、街の屋根の上に漂ぎつて、そして四方の緑りの山々に對し深い哀音となつて消える。

古風な儀式の此追悼會は哀れの深い會である、これは餘程以前日本の佛教で採用されたが支那から由來した美はしいものである。又費用のかゝる儀式である、そして横木の兩親は甚だ貧しい。

しの二百餘名(中學生全部)來賓は齋藤師範學校長以下職員及び死者の親戚、僧侶は二十餘名、佛式を營み、終りて中學校長木村牧氏及び片山教諭の祭文奉讀、ついで五年級總代遠藤評衛、四年級總代三浦倫吉、三年級總代外山林次郎、二年級總代錦織甚六、同窓會總代內田實、神門輔仁會總代今岡義一郎諸氏の祭文朗讀あり、次で參拜者一同に茶菓を供し、散會せしは五時なりしとある。

2. minute-gun 分時砲(葬式の時又は船の災難の時一分毎に打つ)。

been paid by voluntary subscription of students and teachers. Priests from every great temple of the Zen sect in Izumo have assembled at Tōkōji. All the teachers of the city and all the students have entered the hondo of the huge temple, and taken their places to the right and to the left of the high altar,— kneeling on the matted floor, and leaving, on the long broad steps without, a thousand shoes and sandals.[1]

Before the main entrance, and facing the high shrine, a new butsudan has been placed, within whose open doors the ihai of the dead boy glimmers in lacquer and gilding.[2] And upon a small stand before the butsudan have been placed an incense-vessel with bundles of senko-rods and offerings of fruits, confections, rice, and flowers. Tall and beautiful flower vases on each side of the butsudan are filled with blossoming sprays, exquisitely arranged.

【註】 1. a thousand shoes and sandals. 靴と草履の數が一千故五百人分にあたるわけなり、少し大きく云つたわけなり。

しかし凡ての費用は學生と教師の進んで寄附したもので辨じた。出雲の禪宗の各寺院から來た僧侶は洞光寺に參集した。市中の教師及び學生全部は此大寺院の本堂に入つて高い祭壇の左右に坐を取つた、外側の長い廣い階段に一千の靴と草履をぬいで疊の上に坐つた。

正面玄關の前に、高い佛壇に面して新しい佛壇が置かれた、その開いた戸のうちに漆と金の故人の位牌が光つて居る。佛壇の前の小さい臺の上に線香の束の入つた香爐と果物、菓子、米飯、及び花の供物が置いてある。佛壇の兩方にある丈の高い美事な花瓶には花の枝が一杯に巧みにさして

2. in laequer and guilding 漆を塗つた上に金文字であること。

Before the honzon tapers burn in massive candelabra whose stems of polished brass are writhing monsters,—the Dragon Ascending and the Dragon Descending; and incense curls up from vessels shaped like the sacred deer, like the symbolic tortoise, like the meditative stork of Buddhist legend. And beyond these, in the twilight of the vast alcove, the Buddha smiles the smile of Perfect Rest.

Between the butsudan and the honzon a little table has been placed; and on either side of it the priests kneel in ranks, facing each other: rows of polished heads, and splendours of vermilion silks and vestments gold-embroidered.

The great bell ceases to peal; the Segaki prayer, which is the prayer uttered when offerings of food are made to the spirits of the dead, is recited; and a sudden sonorous measured tapping, accompanied by a plaintive chant, begins the musical service. The tapping is the tapping of the mokugyo,—a huge

ある。本尊の前には大きな蠟燭立—その光つた眞鍮の臺は卷きついた怪物、上り龍下り龍になつて居る大きな蠟燭立に蠟燭が燃えて居る、佛說にある神鹿のやうな、神龜のやうな、三昧に入つた鶴のやうな形ちの香爐から香が卷き上つて居る。そして此向ふに、大きな奥の間のほの暗き處に、佛は圓滿具足の微笑をもらし給ふ。

佛壇と本尊との間に小い机が置いてある、その兩側に僧侶が相對して列をなして坐る、圓頂の列、朱の絹の僧衣、金の縫のある袈裟の立派さ。

大きな鐘が鳴り止む、靈魂に對する食物の供養の讀經である施餓鬼が行はれる、急に朗かな、音調のよい打ちものの音に伴はれた哀音の讀經で音樂的な法會が初まる。その打ちものは木魚の音である、木で作つて漆を塗つて金箔を置いた大

wooden fish-head, lacquered and gilded, like the head of a dolphin grotesquely idealised, —marking the time; and the chant is the chant of the Chapter of Kwannon in the Hokekyō,[1] with its magnificent invocation :—

"*O Thou whose eyes are clear, whose eyes are kind, whose eyes are full of pity and of Sweetness,—O Thou Lovely One, with thy beautiful face, with thy beautiful eyes,—*

"*O Thou Pure One, whose luminosity*[2] *is without spot, whose knowledge is without shadow,—O Thou forever shining like that Sun whose glory no power may repel,—Thou Sun-like in the course of Thy mercy, pourest Light upon the world!*"[3]

And while the voices of the leaders chant clear and high in vibrant unison, the multitude of the priestly choir recite in profoundest undertone the mighty verses; and the sound of their recitation is like the muttering of surf.[4]

〔註〕 1. 此追悼會にてよみたる經文は佛遺教經なりしよしにて藤崎中佐がこの全文を譯してヘルンに示せしよしなれども、その

きな魚の頭である、妙な理想化した海豚(イルカ)の頭のやうである、これで拍子を取るのである、法華經の觀世音菩薩普門品を誦んで居る、それにはかくの如き廣大な祈りがある。

眞觀淸淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰、無垢淸淨光、慧日破諸暗、能伏災風火、普明照世間。

導師等の聲々がひとき波る同音で明らかに高く歌ふと共に、その他の一同の僧の合唱は此有難い經文を深い低音で唱へる、そして彼等の讀經のひびきは寄波のつぶやきに似て居る。

內容は追悼會によむものとしては適切ならずとして法華經にかへたるものゝよし、法華經を Saddharma-Pundarika Sutra と云ふ。 2. luminosity 光明。 3. 此觀音の功德をのべた二節は漢譯法華經では以上にあたる故それをのせて置くことにした。「眞觀淸淨觀、廣大智慧觀、悲觀及ビ慈觀アリ、常ニ願シテ常ニ瞻仰スベシ、無垢淸淨ノ光、慧日諸ノ闇ヲ破シ、能ク災風火ヲ伏シテ、普ク明カニ世間ヲ照ラス」と讀む。 4. surf よせて來る波、打波。

The mokugyo ceases its dull echoing, the impressive chant ends, and the leading officiants, one by one, high priests of famed temples, approach the ihai. Each bows low, ignites an incense-rod, and sets it upright in the little vase of bronze. Each at a time recites a holy verse of which the initial sound is the sound of a letter in the kaimyō of the dead boy; and these verses, uttered in the order of the characters upon the ihai, form the sacred Acrostic[1] whose name is The Words of Perfume.[2]

Then the priests retire to their places; and after a little silence begins the reading of the saibun,—the reading of the addresses to the soul of the dead. The students speak first, —one from each class, chosen by election. The elected rises, approaches the little table before the high altar, bows to the honzon, draws from his bosom a paper and reads it in

【註】 1. Acrostic 一種の詩句にして最初もしくは最後もしくは外の文字を順序によつてされば名なり稱號なりになるもの、たさへば有名なるかきつばたの題の業平の歌「から衣、きつゝなれに

木魚はその鈍いひびきを止める、深き感動を與ふる讀經が終る、そこで重もなる司會者即ち名高き寺々の高僧は一人づつ位牌に近づく。銘々ひくゝ頭を垂れて線香に火を點じ、これを青銅の小さい鉢に眞直に立てる。銘々はしばらく經文を唱へる、その初めの音は故人の戒名の文字の音である、そして此位牌の文字の順序によつて唱へられた經文は聖い折句になる、それを香語と云ふ。

それから僧侶は席にかへる、暫らくの沈默のあとで祭文の朗讀、即ち故人の靈に告ぐる文の朗讀が初まる。各級から選擧されて一人づつ出た學生が初めに述べる。選ばれた學生は起立して、高い壇の前の小さい机に近づき本尊を拜し、懐から紙

しつましあれは、はるばるきぬるたびをしぞおもふ」は最もよき acrostic の例なり。 2. The Words of Perfume 禪宗の言葉にて香語と云ふよし。

those melodious, chanting, and plaintive tones which belong to the reading of Chinese texts. So each one tells the affection of the living to the dead, in words of loving grief and loving hope. And last among the students a gentle girl[1] rises—a pupil of the Normal School—to speak in tones soft as a bird's. As each saibun is finished, the reader lays the written paper upon the table before the honzon, and bows, and retires.

It is now the turn of the teachers; and an old man takes his place at the little table,—old Katayama,[2] the teacher of Chinese, famed as a poet, adored as an instructor. And because the students all love him as a father, there is a strange intensity of silence as he begins,—*Ko-Shimane-Ken-Jinjō-Chūgakko-yo-nen-sei.*

"Here upon the twenty-third day of the twelfth month of the twenty-fourth year of

【註】 1. 師範の女生徒が祭文を讀んだことは著者のおまけなるよし。

を取り出し、漢文を朗讀する時の節のよい朗々たる哀調で讀み上げる。かくて銘々が愛の滿ちたる悲しみと希望の言葉で 死 者 に 對して生者の愛情を語る。そして最後に學生のうちから一人のやさしい少女(師範學校の女生徒)が出て、小鳥のやうに柔和な調子で述べんがために起立する。祭文を讀み終つた時、銘々は本尊の前の机の上に紙を置いて禮して退く。

今や先生の順番である、そこで一人の老人が小さい机の處に席を取る、詩人として名高い、教師として尊敬さるゝ、漢文の先生、片山翁である。學生一同父の如く愛して居るので、翁が「故島根縣尋常中學校四年生」と初むる時不思議に一同水を打つたやうになつた。

「維レ明治二十有四年二月二十有三日

【註】 2 片山は有名なる漢學者片山兼山の孫、滋賀縣範師學校長より轉じて松江中學の教諭となりし人。

Meiji, I, Katayama Shōkei, teacher of the Jinjō Chūgakkō of Shimane Ken, attending in great sorrow the holy service of the dead [*tsui-fuku*], do speak unto the soul of Yokogi Tomisaburo, my pupil.

"Having been, as thou knowest, for twice five years,[1] at different periods, a teacher of the school, I have indeed met with not a few most excellent students. But very, very rarely in any school may the teacher find one such as thou,—so patient and so earnest, so diligent and so careful in all things,—so distinguished among thy comrades by thy blameless conduct, observing every precept, never breaking a rule.

"Of old in the land of Kihoku, famed for its horses, whenever a horse of rarest breed could not be obtained, men were wont to say: '*There is no horse.*' Still there are many fine lads among our students,—many

【註】 此譯文は實は原文、これを英譯したのがヘルンの英文である。 1. twice five years ...... 教師なるものをやつた年月を通

島根縣尋常中學校教諭　片山尚絅

辱ク追福ノ靈場ニ侍スルヲ獲テ焄蒿悽愴[2]ノ至

ニ堪ヘズ敢テ

故島根縣尋常中學校四年生横木富三郎君

靈ニ告グ、尚絅本校教諭ニ承乏[3]スル前後五年其

間學生ノ優秀ナルモノ鮮シト爲サヾルモ其忍

耐勇進勉メテ倦マズ審問愼思科ニ盈チテ[4]校則

ヲ遵守シ師訓ヲ服膺シ業ニ敏ニ行ニ愼ム

君ノ如キハ復タ得易カラズ冀北[5]ノ野良馬ナケ

レハ古人之ヲ馬ナシト稱ス本校尚ホ龍駒ナカ

ランヤ然レトモ

算すること十年になる、と譯してあるが原文は松江で五年教師をしたことになる。 2. 焄蒿は香氣の蒸しのぼりて人に感觸するもの、悽愴は鬼神彷彿として前に至るが如く精神の悚然たるなり。 3. 承乏＝任官の謙辭、空乏をうけてしばらく之を補ふの意。 4. 科＝盈チテ進ム（孟子）＝水の窪きにつきて流るゝ如くに進むの意。 5. 冀北＝名馬の產地。

ryume, fine young steeds; but we have lost the best.

"To die at the age of seventeen,—the best period of life for study,—even when of the Ten Steps thou hadst already ascended six[1]! Sad is the thought; but sadder still to know that thy last illness was caused only by thine own tireless zeal of study. Even yet more sad our conviction that with those rare gifts, and with that rare character of thine, thou wouldst surely, in that career to which thou wast destined, have achieved good and great things, honouring the names of thine ancestors, cou'dst thou have lived to manhood.[2]

"I see thee lifting thy hand to ask some question; then, bending above thy little desk to make note of all thy poor old teacher was able to tell thee. Again I see thee in the ranks,—thy rifle upon thy shoulder,—so bravely erect[3] during the military exercises. Even now thy face is before me, with its smile,

【註】1. 勉學の十階段のうち六段をすでに上つた時であるのに

君ニシテ逝ク、予其尤ヲ抜クノ嘆ニ堪ヘズ

君ハ十七年九ヶ月ト聞ク、學業専修ノ好年期ニシテ前途有爲ノ基礎殆ント六七仭ニ及ブ、而シテ病ノ爲メニ逝ク、其病因ヲ問フニ腦ニ急劇ノ症ヲ呈セリト、以テ平素ノ苦學ヲ證スヘク益々半途ニ斃ルノ愛惜スヘキヲ感ズ已矣、其成業ヲ見ルニ及ハス、若シ君ヲシテ其天壽ヲ全フシ社會ニ立ツアラシメンカ必ス其業ニ敏ニ行ヲ愼ム者以テ終始ヲ貫キ身ヲ立テ家ヲ興スヤ推テ知ルベキノミ、

君ノ教場ニ在ル手ヲ擧テ問ヲ發シ自ラ低テ筆記セル或ハ勇壮活潑銃ヲ提テ馳驅セル其聲其

…。 2. couldst thou … は if thou couldst …。 3. 銃を肩にして眞直にして居た、とあるが原文は銃ヲ提ゲテ馳驅セル…とある。

as plainly as if thou wert present in the body,[1] thy voice I think I hear distinctly as though thou hadst but this instant finished speaking;—yet I know that, except in memory, these never will be seen and heard again. O Heaven, why didst thou take away that dawning life from the world, and leave such a one as I—old Shōkei, decrepit.[2] and of no more use?

"To thee my relation was indeed only that of teacher to pupil. Yet what is my distress! I have a son of twenty-four years; he is now far from me, in Yokohama. I know he is only a worthless youth; yet never for so much as the space of one hour does the thought of him leave his old father's heart. Then how must the father and mother, the brothers and the sisters of this gentle and gifted youth feel now that he is gone! Only to think of it forces the tears from my eyes: I cannot speak —so full mv heart is.

〔註〕 1. in the body 肉體をさつて、まのあたりに現はれたやう

容尙ホ目捷ヲ離レズ而シテ今再ヒ之ヲ見ルニ

由ナシ噫天何ソ衰殘爲スナキノ尙絅ヲ殘シテ

此進取爲スコトアル可キノ

君ヲ奪フヤ尙絅ノ

君ニ於ケルハ職務ニ因テ師弟タルニ過ギズ尙

ホ其情義ノ感ズル所自ラ堪ルコト能ハズ尙絅

子アリ本年二十四歲遠ク相州橫濱ニ在リ素ヨ

リ豚犬ニシテ

君ニ比ス可キニ非ルモ老父ノ胸間夢寐ニ忘レ

ズ況ヤ俊拔ナル

君ノ親父タリ慈母タリ兄弟姉妹タルモノ此不

幸ニ遭遇スルニ於テヲヤ其中情以テ如何トナ

ス思フテ此ニ到レバ涙先ヅ胸ヲ衝キ復タ言ヲ

爲スコト能ハズ嗚呼

に……。 2. decrepit 老衰せる。

"*Aa! aa!*—thou hast gone from us; thou hast gone from us! Yet though thou hast died, thy earnestness, thy goodness, will long be honoured and told of as examples to the students of our school.

"Here, therfore, do we, thy teachers and thy schoolmates, hold this service in behalf of thy spirit,—with prayer and offerings. Deign thou, O gentle Soul, to honour our love by the acceptance of our humble gifts."

Then a sound of sobbing is suddenly whelmed by the resonant booming of the great fish's-head,[1] as the high-pitched[2] voices of the leaders of the chant begin the grand Nehan-gyō, the Sutra of Nirvana, the song of passage triumphant over the Sea of Death and Birth; and deep below those high tones and the hollow echoing of the mokugyo, the surging bass[3] of a century[4] of voices reciting

註〕 1. fish's-head 前に fish-head とあり。 2. high-pitched 高い

君ハ逝ケリ乃チ逝クト雖モ其業ヲ勉メ其行ヲ

愼メルモノハ永ク本校學生ノ模範ト爲テ朽チ

ズ是職員學友ノ感懷追慕已ム能ハズシテ玆ニ

謹テ清酌庶羞（ショシユ）[5]ノ典ヲ具シ敬ンデ

君ノ靈ヲ祭ル所以ナリ尚クハ

來リ饗（ウ）ケヨ

それからすゝりなきの聲は木魚の突然再び鳴り出したのに壓せられて、導師の高い調子の稱名合唱の聲が有難い涅槃經を誦し初むる。生死の大海を解脱して通る凱歌である、その高い音調と木魚の反響の下に妙えなる經を誦する波濤の如き一

調子の。 3. bass (bās) 低音。 4. century 百、これも大きく云つたもの。 5. 清酌は神酒、庶羞は神にすゝむるもろもろのもの。

the sonorous words, sounds like the breaking of a sea:—

"*Sho-gyō mu-jō, je-sho meppō.—Transient are all. They, being born, must die. And being born, are dead. And being dead, are glad to be at rest.*"[1]

1. 此四句の譯である、漢譯は「諸行ハ無常ナリ、是レ生滅ノ法

百の聲の低音は大海のくだくるやうに響いて聞ゆる。

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。

ナリ、生滅滅シオハリテ寂滅ヲ樂ミトナス」と讀む。

WITH KYŪSHŪ STUDENTS

I

THE students of the Government College, or Higher Middle School, can scarcely be called boys; their ages ranging from the average of eighteen, for the lowest class, to that of twenty-five for the highest.[1] Perhaps the course is too long. The best pupil can hardly hope to reach the Imperial University before his twenty-third year, and will require for his entrance thereinto a mastery of written Chinese as well as a good practical knowledge of either English and German, or of English and French. Thus he is obliged to learn three languages besides all that relates to the elegant literature of his own; and the weight of his task cannot be understood without knowledge of the fact that

【註】 1. 當時の高等中學校は本科二年豫科三年、中學卒業生は

九州學生と

一

直轄學校或は高等中學校の學生は少年とは云へない、彼等の年齢は最下級の平均十八から最上級の平均二十五に到る。恐らく此課程年限は少し長過ぎる。最良の生徒でも二十三歳以前に帝國大學に達することは殆んど望めない、そして大學に達するには英語獨語か或は英語佛語の充分なる實用的智識と漢學の完全なる智識を要するのである。かくして學生は本國の古文學に關する凡ての智識と未だ其上に三ヶ國の語を學ばなければならない、そしてこれだけの課業の如何に困難であるかはこの漢文の學問だけでも六ヶ國の語を

最下級もしくはその上に入學し、最優等に限つて豫科の最上級に入學したものである。

his study of Chinese alone is equal to the labor of acquiring six European tongues.

The impression produced upon me by the Kumamoto students was very different from that recieved on my first acquaintance with my Izumo pupils. This was not only because the former had left well behind them the delightfully amiable period of Japanese boyhood, and had developed into earnest, taciturn[1] men, but also because they represented to a marked degree what is called Kyūshū character. Kyūshū still remains, as of yore,[2] the most conservative part of Japan, and Kumamoto, its chief-city, the centre of conservative feeling. This conservatism is, however, both rational and practical.[3] Kyūshū was not slow in adopting railroads, improved methods of agriculture, applications of science to certain industries; but remains of all districts of the Empire the least inclined to imitation of Western manners and customs. The ancient

【註】 1. taciturn = habitnally silent or reserved 無口の。 2. of yore = of old time 昔の。 3. both rational and practical 合理的且

習得するに等しい勞力が要ると云ふ事實を知らないでは分らない。

熊本の學生が自分に與へた印象は出雲の生徒と初めて相知つて受けた印象と非常に違つて居た。これは熊本學生が日本人の少年時代の甚だ愉快な時期をすでに經過して眞面目な無口な成年に達して居るからばかりでない、又一方では所謂九州氣質を著しく代表して居るからである。九州は昔しの如く今日も日本の最も保守的地方となつて居る、そしてその主要の都なる熊本は保守的精神の中心となつて居る。しかしこの保守主義は合理的で又實際的である。九州は鐵道や進步し農業法や或種類の工業に科學の應用法を採用することは緩漫ではなかつた、しかし日本帝國の諸州のうちで西洋の風俗習慣をまねることを最も

實際的、其あとに說明してある通り鐵道その他を採用することは人後に落ちないが、西洋の習慣風俗をまねることは好まないのは即ちその保守主義の合理的且實際的なところ。

samurai spirit still lives on; and that spirit in Kyūshū was for centuries one that exacted severe simplicity in habits of life. Sumptuary[1] laws against extravagance in dress and other forms of luxury used to be rigidly enforced; and though the laws themselves have been obsolete for a generation, their influence continues to appear in the very simple attire and the plain, direct manners of the people. Kumamoto folk are also said to be characterized by their adherence to traditions of conduct which have been almost forgotten elsewhere, and by a certain independent frankness in speech and action, difficult for any foreigner to define, but immediately apparent to an educated Japanese. And here, too, under the shadow of Kiyomasa's mighty fortress,—now occupied by an immense garrison,—national sentiment is declared to be stronger than in the very capital itself,—the spirit of loyalty and the love of country. Kumamoto

【註】 1. sumptuary laws 奢侈禁制法、此極端なる奢侈禁制法は

好まないのである。古への士魂がなほ生きて居る、その魂が九州に於て數百年間日常生活に於て極端な簡易生活をなさしめたのである。衣服の奢侈其他種々の贅澤に對する禁令は嚴しく行はれて居た、そして其禁令はその後廢れたとは云へ、その勢力は今も人々の甚だ質素な着物や簡單率直な風俗に表はれて居る。熊本人は外では殆んど忘れられて居る動作に關する傳説を守ることや、外國人には明らかに名狀することはできぬが敎育ある日本人には直ちにそれと知られる言語擧動に於ける一種の臆しない腹藏のない處が特色だと云はれて居る。そしてこゝでは又清正の大きな城の影の下に(今は大勢の師團兵が入つて居る)國民的感情卽ち忠君愛國の念が東京と雖も及ばぬ程強いと云はれて居る。熊本は凡て此等の點を

徳川時代に諸國に行はれた、或階級には疊を敷くことを禁じ、元結にて髮を結ぶことを禁じたるところあり。

is proud of all these things, and boasts of her traditions. Indeed, she has nothing else to boast of. A vast, straggling, dull, unsightly town is Kumanoto: there are no quaint, pretty streets, no great temples, no wonderful gardens. Burnt is the ground in the civil war of the tenth Meiji, the place still gives you the impression of a wilderness of flimsy shelters erected in haste almost before the soil has ceased to smoke. There are no remarkable places to visit (not, at least, within city limits),[1]—no sights,—few amusements. For this very reason the college is thought to be well located: there are neither temptations nor distractions for its inmates. But for another reason, also, rich men far away in the capital try to send their sons to Kumamoto. It is considered desirable that a young man should be imbued with what is called "the Kyūshū spirit," and should acquire what might be termed the Kyūshū "tone." The

【註】 1. 水前寺公園などは感嘆すべきところなれども熊本市中

誇り、又その傳說を自慢して居る。實際熊本には外に誇るべきはない。たゞ廣い、散らばつた、面白みのない、不躰裁の町である、古風な奇麗な町は一つもない、大きな寺も、立派な庭園もない。明治十年の內亂に全燒したので熊本は今もなほその土地の煙りの殆んど收まらぬうちに脆弱な假小屋を急いで建てた荒野と云ふ印象を與へる。そこには行つて見るやうな著名な處はない（少なくとも市中にはない）見物すべきものもない、娛樂も餘りない。此道理から此學校は場所がよいと思はれて居る、こゝに住めるものには誘惑物も、邪魔になるものもない。しかし又別の理由から遙か離れた東京の富有な人々は熊本に子弟を送らうとする。青年が所謂「九州魂」に滲み、所謂「九州風」を得るのは望ましいことゝなつて居る。九

を少し離れたり。

students of Kumamoto are said to be the most peculiar students in the Empire by reason of this "tone." I have never been able to learn enough about it to define it well; but it is evidently a something akin to the deportment of the old Kyūshū samurai. Certainly the students sent from Tōkyō or Kyōtō to Kyūshū have to adapt themselves to a very different *milieu.*[1] The Kumamoto, and also the Kagoshima youth,—whenever not obliged to don[2] military uniform for drill-hours and other special occasions,— still cling to a costume somewhat resembling that of the ancient bushi, and therefore celebrated in sword-songs[3]— the short robe and hakama reaching a little below the knee, and sandals. The material of the dress is cheap, coarse, and sober in color; cleft stockings[4] (*tabi*) are seldom worn, except in very cold weather, or during long marches, to keep the sandal-thongs from cutting into the flesh. Without being rough, the manners

【註】 1. milieu (ミーリュー) (佛) 周圍の境遇。 2. don = do on

州の學生は此「九州風」のため日本で一種特別の學生と云はれる。自分はこれを明らかに說明する程充分此「風」について學び得なかつたが、これは必らず昔しの九州武士の擧動に近いものであるに相違ない。東京や京都から九州に送らるゝ學生はたしかに全く違つた境遇に順應せねばならない。熊本及び鹿兒島の青年は兵式體操其他特別の場合に制服を着用せねばならぬ時の外は昔しの武士の着物に多少類する（そして其爲に劍舞の詩で有名になつて居る）着物を今も着てるのである、即ち短い着物と膝の下に少ししか達しない袴と草履とである。着物の材料は安い疎末なもので色は地味である、嚴寒の時、又は草鞋の紐が肉に喰込まぬ爲にはく外は足袋は殆んどはかない。學

着る。 3. 山陽の前兵兒の歌の「衣骭に至り、袖腕に至る ……」のこと。 4. cleft stockings 指の間を割つてある靴下、即ちタビ。

are not soft; and the lads seem to cultivate a certain outward hardness of character. They can preserve an imperturbable[1] exterior under quite extraordinary circumstances, but under this self-control there is a fiery consciousness of strength which will show itself in a menacing form[2] on rare occasions. They deserve to be termed rugged men, too, in their own Oriental way. Some I know, who, though born to comparative wealth, find no pleasure so keen as that of trying how much physical hardship they can endure. The greater number would certainly give up their lives without hestitation rather than their high principles. And a rumor of national danger would instantly transform the whole four hundred into a body of iron soldiery.[3] But their outward demeanor is usually impassive to a degree[4] that is difficult even to understand.

For a long time I used to wonder in vain what feelings, sentiments, ideas might be

〔註〕 1. imperturbable = calm, unmoved 泰然自若たる 2. in a

動は亂暴ではないが柔和ではない、そして青年は一種、性格の峻嚴なる外貌を養成するやうである。全く彼等は非常な境遇に際しても冷靜なる外貌を保つことが出來る、しかし此自制の下に烈しい自信力が潜んで居て、稀には恐ろしい形ちになつて表はれることがある。彼等は又一種東洋風に疎野な人々と云つてもよい。可なり富有の家に生れながら、どれ程肉體上の困難にたへらるゝかを試みる程強い興味を外にもたない人々を自分は知つて居る。多數の人々は彼等の主義を捨つるよりはむしろ直ちに生命をなげうつのである。そして國家の危險と云ふやうな噂さでもきけば全四百の學生は直ちに變じて鐵の如き兵士の一隊となるであらう。しかし彼等の外貌は解することすらむつかしい程にいつもは極めて平靜である。

長い間自分はその微笑もしない平靜の下に如

menacing form おどかすやうな形ちで、恐るべき形ちで。 3 soldiery = soldiers の集合名詞 4. to a degree = extremely 極めて。

hidden beneath all that unsmiling placidity. The native teachers, *de facto*[1] government officials, did not appear to be on intimate terms[2] with any of their pupils: there was no trace of that affectionate familiarity I had seen in Izumo; the relation between instructors and instructed seemed to begin and end with the bugle-calls by which classes were assembled and dismissed. In this I afterwards found myself partly mistaken; still such relations as actually existed were for the most part formal rather than natural, and quite unlike those old fashioned, loving sympathies of which the memory had always remained with me since my departure from the Province of the Gods.[3]

But later on,[4] at frequent intervals, there came to me suggestions[5] of an inner life much more attractive than this outward seeming,—hints of emotional individuality. A few I

【註】 1. de facto（羅甸語）事實上。 2. on intimate terms 親密な間柄、terms＝mutual footing 關係、間柄。 3. the Province of the

何なる感情、情緒、思想が潜んで居るか知りたいといつも思つて居たが、無駄であつた。實は政府の役人である日本人の教師はどの生徒とも親密であるとは思はれなかつた、自分が出雲で見たやうな親しい關係は痕跡もなかつた、教育者と被教育者の關係は教室に集まり又別れる時のラッパの聲と共に始まり又終るやうに見えた。此點に於て自分は其後自分の幾分か誤れることを發見した、しかし實際の關係は大抵は自然的でなくて形式的であつた、そして自分が「神々の國」を出て以來自分がたへず記憶して居るあの古風な深切な同情とは全く違ふやうである。

しかし、後になつて時々此表面の見せかけよりははるかに愛すべき精神の幾分―感情的個性の暗示―を見るに到つた。偶然の會話で得たものも

Gods 出雲のことを云ふ。 4. la'er on 後になつて、後に。 5. suggestions=hints 暗示、ほのめかし、(こゝでは全部明らかに分るにあらず幾分、分るやうになつたこと)。

obtained in casual[1] conversations, but the most remarkable in written themes. Subjects given for composition occasionally coaxed out some totally unexpected blossoming of thoughts and feelings. A very pleasing fact was the total absence of any false shyness, or indeed shyness of any sort: the young men were not ashamed to write exactly what they felt or hoped. They would write about their homes, about their reverential love to their parents, about happy experiences of their childhood, about their friendships, about their adventures during the holidays; and this often in a way I thought beautiful, because of its artless, absolute sincerity. After a number of such surprises, I learned to regret keenly that I had not from the outset[2] kept notes upon all the remarkable compositions received.[3] Once a week I used to read aloud and correct in class a selection from the best handed in, correcting the remainder at home. The very best I

〔註〕 1. casual=accidental, unexpected 偶然の。 2. from the

少しはあるが最も著しいものは作文からである。作文の題は思想感情の全く思ひもかけぬ花を咲かせたことが時々ある。誤れるハニカミ、否實際如何なる種類のハニカミも全くないのは甚だ喜ぶべき事實であつた、青年は感情や希望を其まゝ書くことを恥としなかつた。彼等はその家庭について、兩親に對する敬愛について、幼年時代の幸福なる經驗について、友情について、休暇中の冒險について書く、しかもわざとらしくなく全く眞面目なので自分が美はしいと思つた風に書いてあるのが度々ある。そんなに驚いた事が度々あるので、自分はこれまで受取つた著しい作文は初めから皆ノートを取つて置かなかつたことを深く後悔するやうになつた。毎週一回自分が受取つた作文の最上のものからぬき出して教場で讀み上げて直し、その他はうちで直すのをつねとした。

outset — from the beginning 最初から。 5. received — [which were] received.

could not always presume to read aloud and criticise for the general benefit, because treating of matters too sacred to be methodically[1] commented upon, as the following examples may show.

I had given as a subject for English composition this question: "What do men remember longest?" One student answered that we remember our happiest moments longer than we remember all other experiences, because it is in the nature of every rational being to try to forget what is disagreeable or painful as soon as possible. I received many still more ingenious answers,—some of which gave proof[2] of a really keen psychological study of the question. But I liked best of all the simple reply of one who thought that painful events are longest remembered. He wrote exactly what follows: I found it needless to alter a single word:—

【註】 1. m thodically=regularly きまつて。 2. proot 證明、(此

一番最上なのは讀み上げて大勢の爲に批評することはいつでも出來るわけではなかつた、即ち次ぎの例で分る通り、きまつて批評を加へることができぬ程神聖な事に關して居るからである。

自分は英作文の題として此問題を與へた「人の最も長く記臆するものは何か」一人の學生は自分等は外の經驗を記臆するよりも、最も幸福な時を長く記臆する、何故なれば、不愉快な事や苦しい事は、できるだけ早く忘れようとするのが凡て普通人間の天性であるからと答へた。自分は更にもつと巧みな返事を澤山受取つた、中には此問題について全く鋭い心理學的研究をしたことを證明したものもあつた。しかし自分は最も痛ましい事件は最も長く記臆せらるゝと考へた一學生の簡單な答を最も愛した。彼はまさしく次ぎの通りに書いた、一語も直すに及ばなかつたのである。

問題を心理學的によく研究したことを證明する答を出した)。

"What do men remember longest? I think men remember longest that which they hear or see under painful circumstances.

"When I was only four years old, my dear, dear mother died. It was a winter's day. The wind was blowing hard in the trees, and round the roof of our house. There were no leaves on the branches of the trees. Quails were whistling in the distance,—making melancholy sounds. I recall something I did. As my mother was lying in bed,—a little before she died,—I gave her a sweet orange. She smiled and took it, and tasted it. It was the last time she smiled. . . . From the moment when she ceased to breathe to this hour more than sixteen years have elapsed. But to me the time is as a moment. Now also it is winter. The winds that blew when my mother died blow just as then; the quails utter the same cries; all things are the same. But my mother has gone away, and will never come back again."

「人の最も長く覺えて居ることは何であらうか。私は人が苦しい境遇にあつて、聞いたり見たりすることを最も長く覺えて居ると考へる。

私がやつと四つの時私のなつかしき、なつかしき母がなくなつた。冬の日であつた。風は木の間と家の屋根の廻りをひどく吹いて居た。木の枝には葉がなかつた。鵜は遠くで一淋しい音で、鳴いて居た。私のしたことを思ひ出す。母が寢床に寢て居た時一死ぬ少し前一私は母に密柑を上げた。母は微笑んで、取つて、それを味はつた。母の微笑んだのはこれが最後であつた。…母の息が絶えてから今日に到るまで十六年以上も經過して居る。しかし私に取つてはそれは一瞬間のやうである。今も又冬である。母のなくなつた時吹いた風は丁度其時のやうに吹いて居る、鵜は同じ鳴聲をして居る、凡てのものは皆同じである。しかし私の母は逝いて又再びかへり來ることはない」

The following, also, was written in reply to the same question: —

"The greatest sorrow in my life was my father's death. I was seven years old. I can remember that he had been ill all day, and that my toys had been put aside, and that I tried to be very quiet. I had not seen him that morning, and the day seemed very long. At last I stole into my father's room, and put my lips close to his cheek, and whispered, '*Father! father!*' — and his cheek was very cold. He did not speak. My uncle came, and carried me out of the room, but said nothing. Then I feared my father would die, because his cheek felt cold just as my little sister's had been when she died. In the evening a great many neighbors and other people came to the house, and caressed me, so that I was happy for a time. But they carried my father away during the night, and I never saw him after."

つぎも又同じ問に答へて書いたものである。

「私の一生の最大不幸は 父のなくなつたことであつた。私は七つであつた。私は父が終日病氣であつたことゝ私のオモチヤがかたつけられて、そして私が極靜かにしようと努めたことを思ひ出せる。私は其朝父に遇はなかつた、それで其日は大層長く思はれた。最後に私は父の部屋へそつと入つた、そして父の頰の近くに唇をやつて「お父さん、お父さん」とさゝやいた、— そして父の頰が甚だ冷たかつた。父は物を云はなかつた、私の叔父が來て、部屋の外へ私をつれ出したが何にも云はなかつた。それから私は父は死にはせんかと恐れた、妹が死んだ時その頰が冷たかつたやうに父の頰が冷たかつたからである。夕方大勢の近處の人々やその他の人々が來て、そして私をあやしてくれたので一時は嬉しかつた。しかし夜のうちに人々は私の父を持つて行つて仕舞 たので、そのゝち私は決して父を見たことはない」

II

FROM the foregoing one might suppose a simple style characteristic[1] of English compositions in Japanese higher schools. Yet the reverse is the fact. There is a general tendency to prefer big words to[2] little ones, and long complicated sentences to plain short periods. For this there are some reasons which would need a philological essay by Professor Chamberlain[3] to explain. But the tendency in itself[4] — constantly strengthened by the absurd text-books in use — can be partly understood from the fact that the very simplest forms of English expression are the most obscure to a Japanese, — because they are idiomatic.[5] The student finds them riddles,

【註】 1. characteristic は complemet なり、特色と、…。 2. prefer は to をとる（時としては above 或はまれに before） 此 to は「よりも」と譯す。 3. Professor Chamberlain は名高き日本學者

二

以上の文章から單純な文體を日本の高等學校の英作文の特色と人は想像するかも知れぬ。が事實は正反對である。小さい言葉よりも大きい言葉を取り、平易な短い文章よりも長い複雑な文章を撰ぶのは一般の傾向である。これには或る道理があるので、それを說明するにはチエムバレン博士の言語學上の論文にまたねばなるまい。しかし此傾向それ自身は—現今使用されて居る愚な教科書でたへず奬勵されて居るが—つぎの事實から幾分か分るであらう、即ち最も簡單な種類の英語の云ひ表し方は日本人に最も不明瞭である、これは熟語であるからである。學生はこれを謎

にして古事記その他の飜譯あり、東大文科大學の教授たりしことあり。むつかしい文字を當時の學生が使用することを好んだのは一つは漢學の影響なるべし。 4. But the tendency in itself... この方の理由はとにかく此傾向それ自身について云へば…。 5. 英米の小說よりも、大陸の小說の英語に譯せられたるものゝ方日本の讀者にはるかに易しいのも此理由による。

since the root-ideas behind them are so different from his own that, to explain those ideas, it is first necessary to know something of Japanese psychology; and in avoiding simple idioms he follows instinctively the direction of least resistance.

I tried to cultivate an opposite tendency by various devices. Sometimes I would write familiar stories for the class, all in simple sentences, and in words of one syllable. Sometimes I would suggest themes to write upon, of which the nature[1] almost compelled simple treatment. Of course I was not very successful in my purpose, but one theme chosen in relation to it — "My First Day at School"—evoked a large number of compositions that interested me in quite another way, as revelations of sincerity of feeling and of character. I offer a few selections, slightly abridged and corrected. Their naïveté[2] is not their least charm, — especially if one reflect

【註】 1. of which the nature = the nature of which その性質は。

のやうに思ふ、即ちその根抵の思想が彼等の思想と相異なるが故である、此思想を說明せんが爲めには先づ日本人の心理を幾分知ることが必要である、そこで簡單な熟語を拾つるのが即ち本能的に抵抗のない方面に向ふことになる。

自分は種々の工夫によつて反對の傾向を養成しようと試みた。時々自分は全く單文で、又一綴りの字でありふれた話しを一組の學生のために書いた。時々その題の性質上簡單に書かねばならぬやうな題を出して見たりなどした。勿論自分はいつでも自分の目的を達したとは云へない、しかしそれに關して撰んだ一つの題「學校へ初めて行つた日」で澤山の作文が出た、それは感情と性格が天眞に流露して居るので全く別な風に自分を感ぜしめた。彼等の天眞爛漫は中々に捨て難い美點である—殊にこれ等はもはや少年でない人々の回想であると思へば。つぎのは最もよいも

2. naïveté フランス語の形なれども英語でも此通りかく、或は naïvety ともかく、正直にして僞りのなきところ。最も少い美點であると云ふわけでない、即ち中々惡くはない（大によい）。

they are not the recollections of boys. The following seemed to me one of the best;—

"I could not go to school until I was eight years old. I had often begged my father to let me go, for all my playmates were already at school; but he would not, thinking I was not strong enough. So I remained at home, and played with my brother.[1]

"My brother[2] accompanied me to school first day. He spoke to the teacher, and then left me. The teacher took me into a room, and commanded me to sit on a bench, then he also left me. I felt sad as I sat there in silence: there was no brother to play with now,—only many strange boys. A bell rang twice; and a teacher entered our classroom. and told us to take out our slates. Then he wrote a Japanese character on the blackboard, and told us to copy it. That day he taught us how

【註】 1. この brother はうちに居て遊んで居る人故弟なるべし。
2. この brother はつれて行つてくれる人故兄なるべし、英語

のゝ一つであると自分に思はれた。

「私は八歳になるまで學校に行くことができなかつた。私はよく父にやつて下さいと願ふた、遊び友達は皆すでに學校に行つて居たからである、しかし未だ充分強くないと云ふので許して貰へなかつた。そこでうちに居て弟と遊んで居た。

「初めの日に兄は自分をつれて學校に行つた。先生に何か云つて、それから私を置いて行つた。先生は私を教室につれて行つてベンチに腰かけるように命じそれから又私を置いて行つた。私はそこに默つて居た時悲しく感じた、今一處に遊ぶ弟は居ない－只大勢の知らない子供ばかり。鐘が二度鳴つた、すると先生は教場に入つて石板を出すやうにと云つた。それから黒板にカナを一字書いてそれを寫させた。其日先生は日本の言葉を二つかくことを教へてそれから善い子供の話しを

の brother, sister は日本のに比べて不便なり、歴史傳記をよむ時殊に然り。

to write two Japanese words, and told us some story about a good boy. When I returned home I ran to my mother, and knelt down by her side to tell her what the teacher had taught me. Oh! how great my pleasure then was! I cannot even tell how I felt,—much less write it. I can only say that I then thought the teacher was a more learned man than father, or any one else whom I knew,—the most awful, and yet the most kindly person in the world."

The following also shows the teacher in a very pleasing light:[1]—

"My brother and sister took me to school the first day. I thought I could sit beside them in the school, as I used to do at home; but the teacher ordered me to go to a class-room which was very far away from that of my brother and sister. I insisted upon remaining

【註】 1. light 見方、point of view, aspect。

きかせた。家に歸つて、母のもとへ走つて行つて側に坐つて先生に敎へて貰つたことを話した。その時の嬉しさはどんなであつたらう。その時の嬉しさは話しにもできない—まして書くことはなほできない。たゞ私はその當時先生は父よりも又自分の知つて居る誰れよりももつと學者で、一世界中で一番偉るべき、しかも又一番やさしい人であると思つたことしか云へない」

つぎのも先生を甚だよく見て居る。

「私の兄と姉とが初めての日學校へ自分をつれて行つた。私はいつも内に居る時のやうに學校でも兄や姉の側に居られるものと思つた、しかし先生は兄や姉の教場と餘程離れた教場へ行くやうに命じた。私は兄や姉と居ようと頑張つた、先生

with my brother and sister; and when the teacher said that could not be, I cried and made a great noise. Then they allowed my brother to leave his own class, and accompany me to mine. But after a while I found playmates in my own class; and then I was not afraid to be without my brother."

This also is quite pretty and true: —

"A teacher — (I think, the head master) called me to him, and told me that I must become a great scholar. Then he bade some man take me into a classroom where there were forty or fifty scholars. I felt afraid and pleased at the same time, at the thought of having so many playfellows. They looked at me shyly, and I at them. I was at first afraid to speak to them. Little boys are innocent like that. But after a while, in some way or other, we began to play together; and they seemed to be pleased to have me play with them."

はそれがいけないと云つた時私は泣いて騒いた。さうすると皆で兄が兄の教場を出て私に連れだつて來ることを許した。しかししばらくして私は私の教場に遊び友達を見出した、それで私は兄が居ないでも恐れなかつた」

これも又中々美はしく又眞にせまつて居る、

「一人の先生(校長だと思ふ)が私を呼んで大學者にならねばならぬと云つた。それから誰れか呼んで四五十人の生徒の居る教場へ案内させた。私はそんなに大勢の友達をもつことを考へて恐ろしくもあり又嬉しくもあつた。彼等は私をはにかんで見、自分も彼等をはにかんで見た。初めのうちは彼等に話しをするのが恐ろしかつた。小さい子供はそんなに無邪氣なものである。しかし間もなく、どうかして一處に遊び初めた、そして彼等も私が一處に遊ぶようになつたので嬉しいやうであつた。

The above three compositions were by young men who had their first schooling under the existing educational system,[1] which prohibits harshness on the part[2] of masters. But it would seem that the teachers of the previous era were less tender. Here are three compositions by older students who appear to have had quite a different experience:—

1. "Before Meiji, there were no such public schools in Japan as there are now. But in every province there was a sort of student society composed of the sons of Samurai. Unless a man were a Samurai, his son could not enter such a society. It was under the control of the Lord of the province, who appointed a director to rule the students. The principal study of the Samurai was that of the Chinese language and literature. Most of the Statesmen of the present government were once students in such Samurai schools.

〔註〕 1. the existing educational system 現在の教育制度（その以

以上三つの作文は、教師の方の苛酷なことを禁ずる現今の 教育制度の 下で 初めての 教育を受けた青年の書いたものである。しかしその以前の教師はそれほどやさしくなかつたと見える。こゝに全く違つた經驗を したらしい 年長の 學生の 作文が三つある。

1. 「明治以前には 今日あるやうな 公立學校は日本にはなかつた。しかし士族の子弟からできた學生塾とも云ふべきものが各地方にあつた。士族でなければ その子弟は こんな 塾に 入ることはできなかつた。この塾は藩公の支配の下にあつて、その藩公は學生を管理する塾長を任命した。士族の重もなる學問は漢文學の研究であつた。今の政府の多數の 政治家は 以前かゝる 士族學校の學生

前は現在のやうな制度の小學校などはなかつた。 2. on the part of ... の方で、... にとりて ... に於て。

Common citizens and country people had to send their sons and daughters to primary schools called *Terakoya*, where all the teaching was usually done by one teacher. It consisted of little[1] more than reading, writing, calculating, and some moral instruction. We could learn to write an ordinary letter, or a very easy essay. At eight years old, I was sent to a terakoya, as I was not the son of a Samurai. At first I did not want to go; and every morning my grandfather had to strike me with his stick to make me go. The discipline at that school was very severe. If a boy did not obey, he was beaten with a bamboo, — being held down[2] to receive his punishment. After a year, many public schools were opened: and I entered a public school."

2. "A great gate, a pompous building, a very large dismal room with benches in rows, — these I remember. The teachers looked very severe; I did not like their faces. I sat

〔註〕 1. little 殆んど打ち消し。 2. being held down = being

であつた。普通の町人や百姓は寺小屋と云ふ小學校に子女を送らねばならなかつた、そこには先生が一人居て何もかも敎ゆるのであつた。それも讀み、書き、算盤と修身に過ぎなかつた。私共は普通の手紙や、極めてやさしい文をかくことを學んだ。私は八歲の時、士族でないから寺子屋へやられた。初めのうちは行きたくなかつた、そして每朝祖父に杖で打たれて漸く行つたものである。その寺小屋の掟は極めて嚴重であつた。子供がきかないと其罰を受けるやうに抑へつけられて竹で打たれた。一年たつて公立學校が開かれた、そして私はある公立學校に入つた」

2.「大きな門、堂々たる建物、腰かけの列んで居る甚だ大きい陰氣な部屋 — こんなものを覺えて居る。先生は甚だ嚴しいやうであつた、私はその顏が嫌であつた。私は敎室の腰かけに坐つて不

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

epressed おさへられて、抑へつけられて。

on a bench in the room and felt hateful. The teachers seemed unkind; none of the boys knew me, or spoke to me. A teacher stood up by the blackboard, and began to call the names. He had a whip in his hand. He called my name. I could not answer, and burst out crying. So I was sent home. That was my first day at school."

3. "When I was seven years old I was obliged to enter a school in my native village. My father gave me two or three writing-brushes and some paper; — I was very glad to get them, and promised to study as earnestly as I could. But how unpleasant the first day at school was! When I went to the school, none of the students knew me, and I found myself without a friend. I entered a class-room. A teacher, with a whip in his hand, called my name in a *large* voice.[1] I was very much surprised at it, and so frightened that I could not help crying. The boys laughed very

【註】 1. large と云ふ形容詞が少し變であるのでイタリックにし

平を感じて居た。先生は不親切に思はれた、子供のうちで私を知つて居るものも話しかけたものもなかつた。一人の先生は黒板の側に立つて姓名を呼び初めた。彼は手に鞭をもつて居た。彼は私の名を呼んだ。私は返事が出來なかつた、そして泣き出した。そこでうちへ送られた。それが私の學校での初めての日であつた」

3. 「七歳の時に村の學校に入らねばならぬことになつた。父から二三本の筆と紙を少し貰つた—私はそれを貰つて非常に嬉しかつた、そして一生懸命に勉強すると約束した。しかし學校の初めての日は如何に不愉快であつたらう。學校に行つた時、仲間のうちで私を知つて居るものは一人もない、それで私は一人の友達もなかつた。私は教室へ入つた。手に鞭をもつた先生は大きな聲で私を呼んだ。私は大層驚いて、そして泣かずには居られぬ程嚇かされた。男の子供等は大きな聲で私

たものらし。

loudly at me; but the teacher scolded them, and whipped one of them, and then said to me, 'Don't be afraid of my voice: what is your name?' I told him my name, snuffling. I thought then that school was a very disagreeable place, where we could neither weep nor laugh. I wanted only to go back home at once; and though I felt it was out of my power to go, I could scarcely bear to stay until the lessons were over. When I returned home at last, I told my father what I had felt at school, and said: 'I do not like to go to school at all.'"

Needless to say the next memory is of Meiji. It gives, as a composition, evidence of what we should call in the West, character.[1] The suggestion of self-reliance at six years old is delicious[2]: so is the recollection of the little sister taking off her white tabi to deck her child-brother on his first school-day: —

〔註〕 1. character 平凡でないどこかしつかりした處特色のある

をあざ笑つた、しかし先生はそれを叱つて一人を鞭でうつて、それから私に「自分の聲に恐れてはいけない、お前の名は何と云ふ」と云つた。私は鼻をつまらせながら名を云つた。私は其時學校と云ふ處はいやな處で泣くことも笑ふこともできない處だと思つた。私は直ぐにうちへ歸りたいばかりであつた、歸ることは私の力でできないことゝあきらめて居たが授業の濟むまでじつとして居ることは中々つらかつた。やうやくうちへ歸つて父に學校で感じたことを語つて、そして「學校へ行くのはいやだ」と云つた」

次ぎの追懐は明治時代のものであることは云ふまでもない。作文としては自分等が西洋で云ふ「特色」が表はれて居る。六歳の時の獨立心を云ふて居るのが面白い、初めて學校へ出るのだから自分の白足袋をぬいて、弟にはかして、めかしてやる小さい姉の話しも面白い。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

遠さ云ふ程の意味。 2. delicious = pleasant to the mind, delightful. 讀んで愉快である。

"I was six years old. My mother awoke me early. My sister gave me her own stockings (*tabi*) to wear, — and I left very happy. Father ordered a servant to attend me to the school; but I refused to be accompanied: I wanted to feel that I could go all by myself. So I went alone; and, as the school was not far from the house, I soon found myself in front of the gâte. There stood still a little while, because I knew none of the children I saw going in. Boys and glrls were passing into the schoolyard, accompanied by servants or relatives; and inside I saw others playing games which filled me with envy. But all at once a little boy among the players saw me, and with a laugh came running to me. Then I was very happy. I walked to and fro with him, had in hand. At last a teacher called all of us into a schoolroom, and made a speech which I could not understand. After that we were free for the day because it was the first day. I returned home with my friend. My parents were waiting for me,

「私は六歳であつた。母は早く私を起した。姉は私にはかせるために姉自身の足袋をくれた―私は嬉しかつた。父は學校まで私の伴をするやうに女中に命じた、しかし私は伴はいらないと斷つた、私は全く獨りで行かれると思ひたかつた。そこで獨りで行つた、そして學校はうちから遠くないのですぐ門の前に來た。そこに暫らくじつと立つて見た、知つた子供が一人も入つて行かないからである。男の子や女の子が女中や親戚につれられて學校へ入つて行つた、そして內の方で遊戲をして居るものがあるを見て羨ましくなつた。しかしその遊戲仲間の一人が私を見て笑つて走つて來た。そこで私は大層嬉しかつた。その子供と手を取つてアチコチ歩いた。最後に先生は一同を敎室に呼んで演說をしたが私には分らなかつた。それから初めてだと云ふので、その日はお休みになつた。私はその友人とうちに歸つた。兩親は果物

with fruits and cakes; and my friend and I ate them together."

Another writes: —

"When I first went to school I was six years old. I remember only that my grandfather carried my books and slate for me, and that the teacher and the boys were very, very, very kind and good to me, — so that I thought school was a paradise in this world, and did not want to return home."

I think this little bit of natural remorse is also worth the writing down: —

"I was eight years old when I first went to school. I was a bad boy. I remember on the way home from school I had a quarrel with one of my playmates, — younger than I. He threw a very little stone at me which hit me. I took a branch of a tree lying in the road, and struck him across the face with all

や菓子を準備して私を待つて居た、そして友人と私は一處に喰べた」

又一人が書く。

「私が初めて學校へ行つた時は 六歳であつた。祖父が私の ために 本と石盤を 持つて 行つたこと丶先生や友達が 私に 實際非常に 親切で 丁寧であつたことだけを覺えて居る、それで私は學校は此世界で極樂であると思つた、そしてうちへは歸りたくはなかつた」

自分は此短い 心からの 後悔も 又書いて 置くだけの價値があると思ふ。

「初めて學校へ行つた時は八歳であつた。私はいたづら小僧であつた。學校からの歸途友達の一人（私よりも若い）と喧嘩したことを覺えて居る。其子供は私に極めて小さい石をなげた、そして私にあたつた。私は路に落ちて居る木の枝をとつて力一杯彼の顔を打つた。それから路の眞中に泣い

my might. Then I ran away, leaving him crying in the middle of the road. My heart told me what I had done. After reaching my home, I thought I still heard him crying. My little playmate is not any more in this world now. Can any one know my feelings?"

All this capacity of young men to turn back with prefect naturalness of feeling to scenes of their childhood appears to me essentially Oriental. In the Occident men seldom begin to recall their childhood vividly before the approach of the autumn season of life. But childhood in Japan is certainly happier than in other lands, and therefore perhaps is regretted earlier in adult life. The following extract from a student's record of his holiday experience touchingly[1] expresses such regret:

" During the spring vacation, I went home to visit my parents. Just before the end of

【註】 1. touchingly = in a pathetic manner 人の心に感動を與へ

て居るのを打ち捨てゝ逃げ出した。心のうちで惡いことをしたと思つた。うちについてからまだ泣いて居るのが聞えるやうに思はれた。この小さい遊び仲間は今では此世の人でない。誰か私の心のうちの分る人はあらうか」

これ等の青年が全く自然の感情で幼年時代の場面を想ひ起すことのできる力は自分には根本的に東洋的だと思はれる。西洋では人生の秋が近づかない以前に幼時をハッキリ想ひ出すことは餘りない。しかし日本では幼年時代はたしかに何れの國に於けるよりも幸福である、その理由で成年になつてから思ひ慕はれることも早いのであらう。休暇中の自分の經驗を學生が記したものから、つぎに拔いたものを見るとその幼時追惜の念が哀れに表はれて居る。

「春期休業の間に、兩親にあひに歸省した。學

るやうに。

the holidays, when it was nearly time for me to return to the college, I heard that the students of the middle school of my native town were also going to Kumamoto on an excursion, and I resolved to go with them.

"They marched in military order with their rifles. I had no rifle, so I took my place in the rear of the column. We marched all day, keeping time[1] to millitary songs which we sung all together.

"In the evening we reached Soyeda. The teachers and students of the Soyeda school, and the chief men of the village, welcomed us. Then we were separated into detachments, each of which was quatered in a different hotel. I entered a hotel, with the last detachment, to rest for the night.

"But I could not sleep for a long time. Five years before, on a similar 'military excursion,' I had rested in that very hotel, as a student of the same middle school. I remem-

【註】 1, keeping time = moving in unison 足並を揃へながら。

校へ歸るべき間際の、丁度休暇の終りの少し前に、私は郷里の中學生がやはり熊本へ遠足に行くことを聞いたので一處に行くことにきめた。

「彼等は小銃をもつて隊をなして行進した。私は小銃をもたないから隊の殿りについた。軍歌を合唱して、それに合せながら終日行進した。

「夕方添田に到着した。添田學校の職員生徒、及び村の重もなる人々は私共を歡迎した。それから幾隊かに分れて、それぞれ別の宿屋に陣取つた。私は最後の一隊と共に宿屋へ入つて泊つた。

「しかし私は長い間眠ることができなかつた。五年以前同じ「行軍」に此中學校の生徒として正しくこの宿屋に泊つた。私は疲勞したことや愉快

bered the fatigue and the pleasure; and I compared my feelings of the moment with the recollection of my feelings then as a boy. I could not help a weak wish to be young again like my companions. They were fast asleep, tired with their long march; and I sat up and looked at their faces. How pretty their faces seemed in that young sleep!"

であつたことを思ひ出した、そして私は當時の少年時代の感情を追懐して今の私の感情と比べて見た。私は私の仲間の如く再び若くなりたいと云ふ愚かな願を起さずには居られなかつた。彼等は皆遠足で疲れて熟睡して居た。私は起きて彼等の顏を眺めた。彼等の若い寢顏は如何に美しく見えたらう」

III

THE preceeding selections give no more indication of the general character of the students' compositions than might be furnished by any choice made to illustrate a particular feeling. Examples of ideas and sentiments from themes of a graver kind would show variety of thought and not a little originality[1] in method, but would require much space. A few notes, however, copied out of my class-register, will be found suggestive, if not exactly curious.

At the summer examinations of 1893 I submitted to the graduating classes, for a composition theme, the question, "What is eternal in literature?" I expected original answers, as the subject had never been discussed by us,

〔註〕 1. originality 獨創力、斬新、新機軸（人のまねをしないで

三

以上の抜書きは或特別の感情を說明せんがために或特種のものを撰び出したのでそれ以上學生の一般作文の性質を示すことはならない。もつと眞面目な種類の題から思想感情の例を擧ぐれば、種々變つた思想や、餘程斬新な書き方も分るであらうが、それはなかなか長くなる。しかし自分の教場用手帳からぬき出した少しの抜書きは珍らしくはなくとも、多少暗示する處があらう。

一八九三年（明治二十六年）の夏の試驗に自分は卒業の組に作文の題として「文學に於て不滅なるものは何ぞ」と云ふ題を與へた。こんな題について議したことはないのと、又西洋思想に關する

自分でやること。

and was certainly new to the pupils, so far as their knowledge of Western thought was concerned.[1] Nearly all the papers proved interesting. I select twenty replies as examples. Most of them immediately preceeded a long discussion, but a few were embodied in the text of the essay: —

1. "Truth and Eternity are identical: these make the Full Circle, — in Chinese, Yen-Man."

2. "All that in human life and conduct which is according to the laws of the Universe."

3. "The lives of patriots, and the teachings of those who have given pure maxims to the world."

4. "Filial Piety, and the doctrine of its teachers. Vainly the books of Confucius were burned during the Shin dynasty; they

【註】 1. so far as ... was concerned ... に關する限りでは（學生の西洋思想の智識に關する範圍內では此問題はたしかに新しい、即

學生の知識と云ふ點から見てもたしかに新しい題であるから、斬新奇拔な答案が出ることゝ豫期して居た。果して殆んど凡ての答案は面白かつた。私は例として二十の答を撰ぶ。長い議論の前に直ぐつぎのやうな言葉が出て居るのが大多數であつたが、中には論文のうちに含まれたのも少しはあつた。

1. 「眞理と不滅は同一である、この二つは漢語で云へば圓滿をつくる」

2. 「人生行爲にありて宇宙の法則にしたがへるものは皆」

3. 「愛國者の傳、及び世界に純粹な格言を與へた人の敎訓」

4. 「孝行、及びこれを敎ゆる人々の敎訓。秦の時孔子の書を燒いたが其効はなかつた、今や文明

ち學生が西洋思想を澤山知つて居れば、著者から見れば original な答案は得られなかつにかも知れぬ)。

are translated to-day into all the languages of the civilized world."

5. "Ethics, and scientific truth."

6. "Both evil and good are eternal, said a Chinese sage. We should read only that which is good."

7. "The great thoughts and ideas of our ancestors."

8. "For a thousand million centuries truth is truth."

9. "Those ideas of right and wrong upon which all schools of ethics agree."

10. "Books which rightly explain the phenomena of the Universe."

11. "Consience alone is unchangeable. Wherefore books about ethics based upon conscience are eternal."

12. "Reasons for noble action: these remain unchanged by time."

13. "Books written upon the best moral means of giving the greatest possible happiness to the greatest possible number of people, — that is, to mankind."

世界の凡ての國語に譯せられて居る」

5. 「倫理と科學的眞理」

6. 「善惡共に不滅である と 支那の聖人は云った。 私共は善なるものをのみ讀むべきである」

7. 「祖先の偉大なる思想觀念」

8. 「十億世紀の間眞理は眞理である」

9. 「凡ての倫理學說が同意する正邪の觀念」

10. 「宇宙現象を正しく說明する書物」

11. 「良心だけは變らない。 故に良心に基づいた倫理學の書物は不滅である」

12. 「高尙な行爲の道理、 これは時の爲めにかわらない」

13. 「最大多數の人々 即ち 人類に最大の幸福を與ふる最もよい 道德上の 方法について書いた書物」

14. "The Gokyō (the Five Great Chinese Classics)."

15. "The holy books of China, and of the Buddhists."

16. "All that which teaches the Right and Pure Way of human conduct."

17. "The Story of Kusunoki Masashigé, who vowed to be reborn seven times to fight against the enemies of his Sovereign."

18. "Moral sentiment, without which the world would be only an enormous clod of earth, and all books waste-paper."

19. "The Tao-te-King."

20. Same as 19, but with this comment. "He who reads that which is eternal, *his soul shall hover eternally in the Universe.*"[1]

【註】 1. こゝの文も少し變れる故イタリツクにした。

「文學に於て不朽なるものは何ぞ」に對する答案としてはこゝに

14. 「五經」

15. 「支那及び佛教徒の聖い書物」

16. 「人間行爲の 正しき 清き方法を教ゆるものは皆」

17. 「七たび生きかへりて 天皇の爲に 敵を亡ぼさうと誓つた楠正成の話し」

18. 「道徳的感情、 それがなければ 世界はたゞ一大穢土、書籍は反古に過ぎない」

19. 「老子道德經」

20. 19 と同じ、たゞつぎの註がある、「不滅のものを讀む人、その人の魂は宇宙の間を永久に徘徊する」

西洋趣味のもの 一つもないのが 不思議なれども 此の時代には未だ西洋文學の飜譯も餘りなく、其上（殊に九州のこと故）漢文などの盛んに讀まれた時代故 これ等の答案は當然であらう。

IV

SOME particularly Oriental sentiments were occasionally drawn out through discussions. The discussions were based upon stories which I would relate to a class by word of mouth, and invite written or spoken comment about. The results of such a discussion are hereafter set forth.[1] At the time it took place, I had already told the students of the higher classes a considerable number of stories. I had told them many of the Greek myths; among which that of Œdipus and the Sphinx[2] seemed especially to please them, because of the hidden moral, and that of Orpheus,[3] like all our

【註】 1. set forth = make known, publish 發表する、示す。
2. Œdipus and the Sphinx — the Sphinx は女の頭さ胸、犬の體、蛇の尾、鳥の翼、獅子の足、人間の聲をもつた怪物である。Thebes を亡ぼさうさして Juno 神が下したのであつた、そこで此 Sphinx は謎を問ふて解くことのできないものを丸呑みにして喰つた、大恐慌が起つた、Thebes の王が賞をかけて此謎を解

四

特に或る東洋的な感情が折々議論の間に表はれて來た。その議論は自分が教場で口演する話しに基づいたのである、そしてその話しについて話しで或は書いて批評をさせるのである。こんな議論の結果は後に發表してある。その議論のあつた頃には上級の學生には澤山の話しを既にして置いた。自分は多くのギリシヤの神話を物語つた、そのうちでエディパスとスフィンクスの話しが其内に潜んで居る教訓のあるので特に面白かつたやうである、それからオルフユースは外の音

くものを尋れた、その謎は「朝は四足、日中は二足、夕方は三足で歩くものは何」と云ふのであつた、Œdipus は「人間」と解いた、怪物はこれをきくと共に自ら頭を岩に打ちつけて死んだと云はれて居る、Œdipus 自身について別に長き話しあり、ギリシヤに於ける悲劇の主人公である。 3. Orpheus その音樂をもつて河の流れをも止め、山をも動搖させ、猛獸をも柔順ならしめたと云はれる音樂の大天才、その妻 Eurydice 早く死して地獄にありしとき Orpheus その音樂の力を以てこゝに入り、再びその妻を此世につれかへらうとした、その條件は Euridice は夫のあとより歩くこと、Orpheus はその地獄の最後のはてに達するまで後ろを顧みないことであつた、Orpheus は今少しのところで思はず後ろを顧みたので再びその妻を永久に失つた。

musical legends, to have no interest for them. I had also told them a variety of our most famous modern stories. The marvelous tale of "Rappacini's Daughter"[1] proved greatly to their liking; and the spirit of Hawthorne might have found no little ghostly pleasure in their interpretation of it. "Monos and Daimonos"[2] found favor; and Poe's wonderful fragment, "Silence,"[3] was appreciated after a fashion that surprised me. On the other hand, the story of "Frankenstein"[4] impressed them very little. None took it seriously. For Western minds the tale must always hold a peculiar horror, because of the shock it gives to feelings evolved under the influence of Hebraic ideas concerning the origin of life, the

【註】 1. Rappacini's Daughter. Hawthorne の短篇小說集 Mosses from an Old Manse のうちに出て居る、以太利の醫師で植物學研究に耽つて居る Rappacini と云ふ人、娘に幼時より次第に毒を喰べさせて來たので 生長するに及んで 此娘にふれることは燒けた鐵にふれるやうな結果を來す程になつた、此娘は美はしかつたので父は別に一人の青年を選んで 知らないうちに 同じ實驗を施すことになつた、いよいよ結婚する時父は此事を二人に告げて彼等二人の極めて强い力を有せることをきかせる、二人は驚いて解

樂に關する傳說と同じく彼等に何の興味もなかつたらしい。自分は最も有名なる近世の話しを種々話した。「ラツパシ.ニの娘」と云ふ不思議な話しは大層彼等の氣に入つた、そしてハウソーンの靈は彼等のこの話しの解釋をきいて少なからざる喜びを得たことであらう。「モノスとダイモノス」も氣に入つた、ポーの優れた短篇「沈默」は珍らしい理由で感心されたので自分は驚いた。それに反して「フランケンスタイン」は餘り感心されなかつた。誰も眞面目に考へなかつた。西洋人には此話しはいつでも一種の恐怖を抱かせるのである、これ生命の源、神の禁止の恐ろしい性質、及び自

毒劑を飲んで此毒を取り去らうと試みたが、青年は助かつたが娘は死んだ。 2. Monos and Daimonos これは不明。 3. Silence は Edgar Allan Poe (1809—1849) アメリカの詩人小說家の作、三ページ程の短いもので作者は Silence—a Fable と名づけて居る。何よりも silence が最も恐ろしいことなどを示したもの。
4. Frankenstein 詩人 Sherry 夫人の作、Frankenstein なる學生か解剖學教室その他より骨、皮膚、筋肉等の材料を集め來つて人體を完全に作り出すと共に、それが生命を得て、種々の罪惡を犯す、Frankenstein はそのために煩悶する話し、シエレー、バイロン、シエレー夫人の三人が不思議な恐ろしい話しを競爭的に書いたうち、シエレー夫人のが最上であつたと云はれて居る。

tremendous character of divine prohibitions, and the awful punishments destined for those who would tear the veil from Nature's secrets, or mock, even unconsciously, the work of a jealous Creator.[1] But to the Oriental mind, unshadowed by such grim faith, — feeling no distance between gods and men, — conceiving life as a multiform whole ruled by one uniform law that shapes the consequence of every act into a reward or a punishment, — the ghastliness of the story makes no appeal. Most of the written criticisms showed me that it was generally regarded as a comic or semi-comic parable. After all this, I was rather puzzled one morning by the request for a "very strong moral story of the Western kind."

I suddenly resolved — though knowing I was about to venture on dangerous ground — to try the full effect of a certain Arthurian[2]

〔註〕 1. 人間が造物者(神)のまねをしたり、神と同じ智識を得ようとしたりすると必ず恐るべき罰をうける。アダム、イヴでも又天から火を盗んだプロミサース(これはギリシヤだが) でも皆ひどい罰をうけた。 日本の浦島は神女との約を破つたので老人に

然の秘密から幕を取り去らうとし、又嫉妬深い造物者の作物をたとへ知らずになりとも嘲りでもすれば、必ず恐るべき天罰のあること、などに關するヘブリユの思想の影響を受けて生長發達し來つた感情に大打撃を與ふるからである。しかしこんな怖ろしき信仰に暗まされて居ない東洋人にとつては—神と人との隔てを感じないので—又人生を因果應報の一の定則で支配される多樣な集合であると考へて居るので—此話しの怖ろしさは更に分らない。作文で批評したものを見ると大槪は喜劇的な或は半ば喜劇的なたとへ話しと考へられて居ることが分つた。仕舞に或朝自分は「西洋の甚だ强い道德的の話し」をと云ふ要求の出たので大分當惑した。

自分は不意にアーサー王の或傳說を話してその效目を試みようと決心した（これは自分は危い處へ無理に入らうとして居ることを知つて居た

なつただけ。 1. Arthurian legend 紀元五世紀から六世紀にかけて英國及びウエールスに Arthur と云ふ王が居た、この王の事を傳へたのは十二世紀の Geoffrey of Manmouth であつた、それが次第に潤色されてフランスに Morte Arthur が出た、Sir Thomas Malory の Morte d'Arthur はもとは此フランスの本を基として譯されたものと傳へられて居る。

legend which I felt sure somebody would criticise with a vim.[1] The moral is rather more than "very strong;" and for that reason I was curious to hear the result.

So I related to them the story of Sir Bors,[2] which is in the sixteenth book of Sir Thomas Mallory's "Morte d'Arthur,"[3] — "how Sir Bors met his brother Sir Lionel taken and beaten with thorns, — and of a maid which should have been dishonored, — and how Sir Bors left his brother to rescue the damsel, — and how it was told them that Lionel was dead." But I did not try to explain to them the knightly idealism imaged in the beautiful old tale, as I wished to hear them comment, in their own Oriental way, upon the bare facts of the narrative.

Which they did as follows: —

"The action of Mallory's knight," ex-

【註】 1. vim=power, energy 元氣、力。 2. Sir Bors も Sir Lionel も皆 Arthur 王の knight 即ち武士である、話しはこゝに出て居る通り。 3. Sir Thomas Mallory は 1430 頃に生れ 1470 後に死

が）これは誰が必ず元氣よく攻撃を加へるだらうと思はれた。教訓はむしろ十二分に「甚だ强い」のである、それでその理由で自分はその結果をきくことに好奇心をもつたのである。

そこで自分はサー、トマス、マローリーの「アーサーの死」の第十六章にあるサー、ボルスの話しを彼等に物語つた、「サー、ボルスが自分の弟のサー、ライオネルが捕へられて刺（トゲ）で打たれて居るのに遇ふたこと、又辱しめられようとした婦人に遇ふたこと、及びサー、ボルスが弟を捨てゝ少女を救つたこと、ライオネルが死んだことをきいたこと」などを物語つた。しかし自分は美はしい昔しの物語に表はれた武士の理想を彼等に說明しようとはしなかつた、これ即ち自分が物語の事實だけによつて彼等が東洋風に批評を加へることを願ふたからである。

其批評を彼等は次のやうに與へた。

巖井は叫んだ「もし基督教は凡ての人間は同胞

んだと云はれるだけで、事蹟は傳らず、Morte d'Arthur はフランス語にて「アーサーの死」と云ふ意味。

claimed Iwai,[1] "was contrary even to the principles of Christianity, — if it be true that the Christian religion declares all men brothers. Such conduct might be right if there were no society in the world. But while any society exists which is formed of families, family love must be the strength of that society; and the action of that knight was against family love, and therefore against society. The principle he followed was opposed not only to all society, but was contrary to all religion, and contrary to the morals of all countries."

"The story is certainly immoral," said Orito.[2] "What it relates is opposed to all our ideas of love and loyalty, and even seems to us contrary to nature. Loyalty is not a mere duty. It must be from the heart, or it is not loyalty. It must be an inborn feeling. And it is in the nature of every Japanese."

"It is a horrible story," said Andō.[3] "Philanthropy itself is only an expansion of frater-

【註】 1. 巖井敬太郎氏（長崎縣人）明治三十三年の政治科出の法學士、大正六年頃、神奈川縣內務部長の時休職となる。 2. 織戶(?)

であると公言して居るのが事實なればマロリーの武士の行爲は基督教の主義にも相反して居ます。世界に社會がなければこんな行爲は正しいかも知れません。しかし家族から出來た社會の存する以上、家族の愛情はその社會の勢力でなければなりません、そしてその武士の行爲は家族の愛情に反して居ます、隨つて社會にも反して居ます。彼の守つて居る主義は全社會に反して居るのみならず又凡ての宗教にも反して居ます、又凡ての國々の道德にも反して居ます」

織戶は云つた「此話しはたしかに不道德です。そこに書いてあることは愛と義の私共の精神に反して居ます、そして私共には自然にも反して居るやうに思はれます。義とは只一片の義理ではなく、心から出たものでなければなりません、でなければ義ではありません。それは生れながらの感情でなければなりません。そしてそれはどの日本人の心にもあります」

安東は云つた「それはいやな話しです。博愛と

折戶(?)不明。　3 安東俊明氏(熊本縣人)、明治三十一年の英法科出の法學士、札幌の辯護士、北海道著名の憲政會員。

nal love. The man who could abandon his own brother to death merely to save a strange woman was a wicked man. Perhaps he was influenced by passion."

"No," I said: "you forget I told you that there was no selfishness in his action, — that it must be interpreted as a heroism."

"I think the explanation of the story must be religious," said Yasukōchi.[1] "It seems strange to us; but that may be because we do not understand Western ideas very well. Of course to abandon one's own brother in order to save a strange woman is contrary to all our knowledge of right. But if that knight was a man of pure heart, he must have imagined himself obliged to do it because of some promise or some duty. Even then it must have seemed to him a very painful and disgraceful thing to do, and he could not have done it without feeling that he was acting against the teaching of his own heart."

"There you are right," I answered. "But

【註】 1. 安河内麻吉氏、明治三十年英法出身の法學士、現福岡

云つても實は兄弟の愛情を擴げたものに過ぎません。たゞ知りもしない婦人を救ふために自分の兄弟の死ぬのを顧みなかつた人は惡人です。多分此人は私情にかられたのです」

自分は云つた「否、此人の行爲には利己主義などは少しもない、英雄的行爲と解釋されねばならないと云つたことを君は忘れて居る」

安河内は云つた「此話しの解釋は宗教的でなければならないと思ふ。變に思はれるが、しかしそれは私共が西洋の思想を充分知らないからでせう。勿論知らない婦人を救ふ爲に自分の弟を捨てることは私共の理解して居る正義と違つて居ます。しかしもし其武士が清い心の人であつたら何かの約束か義務のためにさうしなければならないと思つたに相違ありません、それにしても、さうするのは餘程苦しい又恥づべきことのやうに思はれたに相違ありません、それで良心の命ずる處に反したことをして居ると感じないでは居られなかつたでせう」

自分は答へた「それはまちがつて居ない。しか

縣知事。

you should also know that the sentiment obeyed by Sir Bors is one which still influences the conduct of brave and noble men in the societies of the West, — even of men who cannot be called religious at all in the common sense of that word."

"Still, we think it a very bad sentiment," said Iwai; "and we would rather hear another story about another form of society."

Then it occurred to me to tell them the immortal story of Alkestis.[1] I thought for the moment that the character of Herakles[2] in that divine drama would have a particular charm for them. But the comments proved I was mistaken. No one even referred to Herakles. Indeed I ought to have remembered that our ideals of heroism, strength of purpose, contempt of death, do not readily appeal to Japanese youth. And this for the reason that no

【註】 1. Alkestis 又は Alcestis は Admetus の妻、ギリシヤの悲劇作者 Eurides; 480 ?—406 B.C.) の神劇の女主人公。アポロの神はもし何人か彼のために命を捨てゝ無限の愛を示すものあれば Admetus に不死不滅の力を與ふることを約す、そこで死の神に襲はれた時 Alkestis 喜んで夫のために犠牲となつた。 Admetus

し又かう云ふ事も知るべきである、即ちサーボルスが服從した感情は西洋社會の勇敢なる又高尙なる人々の行を今日も支配して居る感情である、又宗教的と云ふ言葉の普通の意味では宗教的と云へない人々の行爲でもそれに支配されて居るのである」

嚴非は云つた「それでも、私共はそれを甚だ惡い感情と思ひます、そして私共は外の種類の社會に關する外の話しをきゝたいと思ひます」

そこでアルケスティスの不朽の話しをしようと思ひついた。その神劇に於てヘラクリースの性格は彼等にとつて特別の興味があらうと其時思つた。しかし批評を聞いたら自分の誤つて居ることが分つた。一人もヘラクリーズのことに云ひ及んだものはなかつた。實際自分等の勇氣、意力、死を顧みぬことの理想は直ちに日本の少年を感ぜしめないことを記憶して居るべき筈であつた。こ

はその父が僅かに殘れる數年を捨てゝ自分を救はざりしを怒りて父を罵つて父子相爭ふ。その時 Admetus のもとにありし Herakles は地獄に行つて死の神を征服して Alcestis をつれてかへつた。Euripides は Alcestis の犧牲的精神と Admetus 及び Admetus の親の利己心との對照を示した。 2. Herakles 普通 Hercules ハーキュリーズとかく、ギリシヤ、ローマの神話では非常に強き勇士で、勇氣、剛毅等の理想を現實にした神として崇拜される。

Japanese gentleman regards such qualities as exceptional. He considers heroism a matter of course — something belonging to manhood and inseparable from it. He would say that a woman may be afraid without shame, but never a man. Then as a mere idealization of physical force, Herakles could interest Orientals very little: their own mythology teems with impersonations of strength; and, besides, dexterity, sleight, quickness, are much more admired by a true Japanese than strength. No Japanese boy would sincerely wish to be like the giant Benkei; but Yoshitsune, the slender, supple conqueror and master of Benkei, remains an ideal of perfect knighthood dear to the hearts of all Japanese youth.

Kamekawa[1] said: —

"The story of Alkestis, or at least the story of Admetus, is a story of cowardice, disloyalty, immorality. The conduct of Admetus was abominable. His wife was indeed noble and virtuous — too good a wife for so

〔註〕 1. 龜川德太郎氏、此人も夭折。

れ即ち日本人はこんな性質を例外視しては居ないからである。彼は勇壯を當り前のこと、男子に附隨して離るべからざるものと思つて居る。女子は恐れても恥とするに足りないが、男子は斷じていけないと云ふ。それから腕力の表はれたものとしてもヘラクリースは東洋人を餘り感心させない、彼等の神話には力に人性を與へたもので充滿して居る、それから又日本人は力よりも熟練、早業、敏捷をはるかに貴ぶのである。日本少年にに本當に巨人辨慶になりたいと心から思ふものはない、しかし辨慶の勝利者、即ち細い柔かな義經は凡ての日本少年の心になつかしい完全な武士の理想となつて居るのである。

飯川が云つた、

「アルケスティスの話し、或は少くともアドミータスの話は臆病と不義と不德の話しです。アドミータスの行爲は言語道斷です。妻の方は全く高尙で德が高い、そんな恥知らずの男にはよすぎた

shameless a man. I do not believe that the father of Admetus would not have been willing to die for his son if his son had been worthy. I think he would gladly have died for his son had he not been disgusted by the cowardice of Admetus. And how disloyal the subjects of Admetus were! The moment they heard of their king's danger[1] they should have rushed to the palace, and humbly begged that they might be allowed to die in his stead. However cowardly or cruel he might have been, that was their duty. They were his subjects. They lived by his favor. Yet how disloyal they were! A country inhabited by such shameless people must soon have gone to ruin. Of course, as the story says, 'it is sweet to live.' Who does not love life? Who does not dislike to die? But no brave man — no loyal man even — should so much as think about his life when duty requires him to give it."

"But," said Midzuguchi,[2] who had joined

【註】 1. their king's danger. 死の神が入り來つて Admetus を

妻です。私はアドミータスの父はもし子供が不肖でなかつたら子供のために死ぬことを喜んだらうと信じます。私はアドミータスの臆病なのでいやな思をして居なかつたら、子供のために喜んで死んだであらうと思ひます。それから又アドミータスの臣下の不忠なことはどうでせう。王の危険を聞くや否や、彼等は宮殿へかけつけて恭々しく王の代りに死ぬことの許しを願ふべき筈でした。王がどんなに臆病で殘酷でも、さうするのが彼等の義務でした。彼等は臣下です。君の御恩で生きて居たのです。しかもどんなに不忠でしらう。こんな恥知らずの人々の居る國はすぐに亡びて仕舞ふに違ひありません。勿論話しにある通り「生きるは樂し」であります。生を愛しないものはありませうか。死ぬことを嫌はないものはありませうか。しかし勇敢な人—義にあつい人でも—は義務の要求する場合には自分の生命のことなどは考へてもなりません」

水口は云つた、此人は少し後れて來たので話し

さめたこと。 2. 水口、不明。或は溝口三始氏か、(三十二年土木工學出の工學士、東部鐵道管理局在勤)。

us a little too late[1] to hear the beginning of the narration, "perhaps Admetus was actuated by filial piety. Had I been Admetus, and found no one among my subjects willing to die for me, I should have said to my wife: 'Dear wife, I cannot leave my father alone now, because he has no other son, and his grandsons are still too young to be of use to him. Therefore, if you love me, please die in my place.'"

"You do not understand the story," said Yasukōchi. "Filial piety did not exist in Admetus. He wished that his father should have died for him."

"Ah!" exclaimed the apologist in real surprise,—"that is not a nice story, teacher!"

"Admetus," declared Kawabuchi,[2] "was everything which is bad. He was a hateful coward, because he was afraid to die; he was a tyrant, because he wanted his subjects to die for him; he was an unfilial son because he

【註】 1. a little too late 少しおくれて來たので話しの初めに間に合はなかつた … too late はいつも間に合はない、駄目のこと。

の初めを聞かなかつたのである、「しかし、アドミータスは多分孝行の志に導かれたのでせう。私がアドミータスで私の臣下のうちに私の爲に喜んで死ぬものがなかつた時には私の妻にかう云つたらうと思ひます、「妻よ、私は今父を獨りにして捨てることができない、外に子供がないから、そして孫は餘り小さくて役に立たないから。それで私を思ふ親切があれば私の代りに死んでくれ」

安何内は云つた「君は話しを知らないのだ。アドミータスに孝行の心などはなかつた。彼は親が自分の代りに死んでくれることを願つたのだ」

さきの辯護人は全く驚いて叫んだ「アヽ、それは、先生、よい話しではありません」

川淵は云つた「アドミータスはどこからどこまで惡者でした。死ぬことを恐れたから憎むべき臆病者です、自分のために臣下の死ぬことを願つたから暴君です、自分の代りに老父の死ぬことを欲したから不孝者です、それから男子のくせに恐れ

2. 川淵楠茂氏（高知縣人）、明治二十七年帝大法科に進みたるも肺患のため夭折す。

wanted his old father to die in his place; and he was an unkind husband, because he asked his wife — a weak woman with little children — to do what *he* was afraid to do as a man. What could be baser than Admetus?"

"But Alkestis," said Iwai, — "Alkestis was all that is good. For she gave up her children and everything, — even like the Buddha (*Shaka*) himself. Yet she was very young. How true and brave! The beauty of her face might perish like a spring-blossoming, but the beauty of her act should be remembered for a thousand times a thousand year. Eternally her soul will hover in the universe. Formless she is now; but it is the Formless who teach us more kindly than our kindest living teachers, — the souls of all who have done pure, brave, wise deeds."

"The wife of Admetus," said Kumamoto,[1] inclined to austerity in his judgments, "was simply obedient. She was not entirely blameless. For, before her death, it was her highest

【註】 1. 隈本繁吉氏(筑後の人)明治三十年、歴史科出の文學士、

てできもしないことを自分の妻（小さい子供のあるかよわい婦人）から求めたから不親切な夫でした。アドミータスよりも下等なものはあり得るでせうか」

巖井が云つた「しかしアルケスティス、此婦人はどこまでも善い人でした。丁度釋迦のやうに子供その外何物をも捨てました。しかも大層若い人でした。どんなに眞心のある勇敢な人でせう。彼女の美貌は春の花のやうに朽ちも致しませうが美はしい行爲は百萬年の間も記臆されませう。彼女の魂は永久に宇宙に殘るでせう。今や彼女は形體はありません、しかし私共の生きた最も親切な教師よりももつと親切に私共を敎ゆるものは形體を有しない人々、即ち淸い勇ましい賢い行をした人々の魂です」

裁判が嚴し過ぎる傾きのある、隈本が云つた、「アドミータスの妻はたゞ素直であつたと云ふに過ぎません。此人も全く惡くないことはない。即ち死ぬ前に自分の夫の愚なことをひどく叱責す

臺灣總督府高等商業學校長。

duty to have severely reproached her husband for his foolishness. And this she did not do, —not at least as our teacher tells the story."

"Why Western people should think that story beautiful," said Zaitsu,[1] "is difficult for us to understand. There is much in it which fills us with anger. For some of us cannot but think of our parents when listening to such a story. After the Revolution of Meiji, for a time, there was much suffering. Often perhaps our parents were hungry; yet we always had plenty of food. Sometimes they could scarcely get money to live; yet we were educated. When we think of all it cost them to educate us, all the trouble it gave them to bring us up, all the love they gave us, and all the pain we caused them in our foolish childhood, then we think we can never, never do enough[2] for them. And therefore we do not like that story of Admetus."

The bugle sounded for recess. I went to

【註】 1. 財津(?)不明。 2. 充分には出來ない、即ちいくらつく

るのが彼女の最高義務でした。ところがそれをしませんでした—少なくとも先生に聞いた處だけではそれをしませんでした」

財津は云つた「西洋人が其話しを立派だと思ふのは私共には理解ができません。怒りたくなる事が澤山あります。そんな話しをきいて居ると私共の兩親の事を思はずに居られません。明治維新の後一時隨分困難なことがあつた。恐らく兩親が飢にせまつたことは幾度もあつたでせう、それでも私共はいつも澤山喰べて居ました。時としては生活するだけの金も得られなかつたでせう、それでも私共は敎育を受けました。私共を敎育するに要した費用、私共を育てた面倒、私共に與へた慈愛、何にも分らぬ幼年時代に兩親にかけた心配、それ等のことを考へると私共はどんなにつくしても足りないと思ひます。それでそのアドミータスの話しは好みません」

休憩のラッパが鳴つた。自分はタバコを吸ひに

してもも充分とは云はれない。

the parade-ground to take a smoke. Presently a few students joined me, with their rifles and bayonets — for the next hour was to be devoted to military drill. One said: "Teacher, we should like another subject for composition, — not *too* easy."

I suggested: "How would you like this for a subject, 'What is most difficult to understand?'"

"That," said Kawabuchi, "is not hard to answer, — the corret use of English prepositions."

"In the study of English by Japanese students, — yes," I answered. "But I did not mean any special difficulty of that kind. I meant to write your ideas about what is most difficult for all men to understand."

"The universe?" queried Yasukōchi. "That is too large a subject."

"When I was only six years old," said Orito, "I used to wander along the seashore, on fine days, and wonder at the greatness of the world. Our home was by the sea. After-

練兵場に出かけた。やがて銃劍をつけた少數の學生が自分の側に集つた一つぎの時間が兵式體操であつたからである。一人は云つた「先生今度又作文の題を一つ出して下さい一餘りやさしくないのを」

自分は云つた「「最も難解のものは何ぞ」と云ふ題は如何です」

川淵は云つた「その答はむつかしいことはありません、「英語の前置詞の使用法」です」

「英語を勉强する日本の學生にとつてはさうです。しかし私はそんな特種の困難を意味したのではない。諸君が凡ての人々に解し難いと思ふものについて考を書くと云ふ意味でした」と自分は云つた。

安河内は尋ねた「宇宙ですか。これは問題は大きすぎます」

織戸は云つた「私がやつと六歲の時でした、天氣のよい時海岸をさまようて、いつも世界の大きな事を不思議に思ひました。私共の家は海岸にあ

wards I was taught that the problem of the universe will at last pass away, like smoke."

"I think," said Miyakawa,[1] "that the hardest of all things to understand is why men live in the world. From the time a child is born, what does he do? He eats and drinks; he feels happy and sad; he sleeps at night; he awakes in the morning. He is educated; he grows up; he marries; he has children; he gets old; his hair turns first gray and then white; he becomes feebler and feebler, — and he dies.

"What does he do all his life? All his real work in this world is to eat and to drink, to sleep and to rise up; since, whatever be his occupation as a citizen, he toils only that he may[2] be able to continue doing this. But for what purpose does a man really come into the world? Is it to eat? Is it to drink? Is it to sleep? Every day he does exactly the same thing, and yet he is not tired! It is strange.

〔註〕 1. 宮川和一郎氏、(後、杉井さ改性) 明治三十一年土木工學

りました。そのいち宇宙の問題は煙のやうに終には消え去るものだと教へられました」

宮川は云つた「私は最大の難問題は何故人間が此世に生きて居るかそれを解することであると考へます。小兒の生れ落つる時から何をしますか。喰べたり飲んだり喜んだり悲しんだりする、夜には眠り、朝には起きる。教育を受け、生長し、結婚し、子供をもち、年を取る、髮の毛は初めゴマ鹽になりついで白くなる、次第次第に弱くなつて—それから死ぬ。

「一生のうち何をしますか。此世に於ける本當の仕事は喰つて飲んで眠て起きることです、だから公民としてどんな職業をもつて居るにしても、彼はこんな事を續けて行くためにのみ働いて居るのです。しかし本當に人間の此世に來たのは何の目的あつてでせう。喰ふためでせうか。飲むためでせうか。眠るためでせうか。毎日全く同じ事をしてそれでよく飽きないことです。不思議です。

出身の工學士、今、小石川區雜司ヶ谷町一四四に居住。 2. that he may ... がために、in order that he may ...。

"When rewarded, he is glad; when punished, he is sad. If he becomes rich, he thinks himself happy. If he becomes poor, he is very unhappy. Why is he glad or sad according to his condition? Happiness and sadness are only temporary things. Why does he study hard? No matter how great a scholar he may become, what is there left of him when he is dead? Only bones."

Miyakawa was the merriest and wittiest in his class; and the contrast between his joyous character and his words seemed to me almost startling. But such swift glooms of thought — especially since Meiji — not unfrequently make apparition in quite young Oriental minds. They are fugitive as shadows of summer clouds; they mean less than they would signify in Western adolescence; and the Japanese lives not by thought, nor by emotion, but by duty.[1] Still, they are not haunters[2] to encourage.

【註】 1. 日本人は空想を直ちに實行しようとすることはない、

「賞められて喜び、罰せられて悲む。金もちになれば幸福と思ひ、貧乏すれば不幸になります。境遇によつて喜んだり悲しんだりするのは何故でせう。幸も不幸も一時のものに過ぎません。何故に一生懸命に勉强するのでせう。どんな大學者になつても死んだら何が殘りますか。骨ばかりです」

宮川は級中最も快活で最も機智に富んで居る、彼の陽氣な性格と此言葉との對照が殆んど驚くべきことゝ思はれた。しかしかやうに不意に來る憂愁は（殊に明治以後）全く若い東洋人の頭に時々現はれる。夏の雲の影のやうに早く消え去るのである、西洋の青年に於けるよりは意味は淺い、日本人は思想や感情で生きないが義務で生きて居る。それでも此屢々來て惱ます思想は歡迎し奬勵すべきものではない。

空想は空想として、行爲は常規、義務によるのであるとの意味。
2. haunters 屢々現はれて來て惱ますもの。

"I think," said I, "a much better subject for you all would be the Sky: the sensations which the sky creates in us when we look at it on such a day as this. See how wonderful it is!"

It was blue to the edge of the world, with never a floss[1] of cloud. There were no vapors in the horizon; and very far peaks, invisible on most days, now massed[2] into the glorious light, seemingly diaphanous.[3]

Then Kumashiro,[4] looking up to the mighty arching, uttered with reverence the ancient Chinese words:—

"*What thought is so high as It is? What mind is so wide?*"

"To-day," I said, "is beautiful as any summer day could be,—only that the leaves are falling, and the semi are gone."

"Do you like semi, teacher?" asked Mori.[5]

"It gives me great pleasure to hear them,"

【註】 1. a floss ケバ、ワタゲ、即ちちり程の雲と云ふ意。

自分は云つた「諸君にとつてもつとずつとよい問題は今日のやうなこんな日に大空を見て起す感覺、即ち大空だと考へる。實に立派ではないか」

空は世界のはてまで青い、雲の片一つない。地平線にはもやがない、大抵の日には見えないずつと遠い一圍の山々も悉く立派に輝いてすき通つて居るやうだ。

それから神代は蒼空を見上げながら恭々しく古への漢語を發した。

「かくの如き高き思想ありや、かくの如き廣き心ありや」

「今日はどんな夏の日にもない程此上もなく奇麗だが」自分は云つた「たゞ木の葉が落ちかけて、蟬は居ない」

「先生は蟬がお好ですか」と森が尋ねた。

自分は答へた「蟬を聞いて居ると大層愉快

2. massed 密集した、一塊となつた。 3. diaphanous ダイアフエーナス — transparent 透明の。 4. 神代 (?) 不明。 5. 森賢氏 (?) 三十三年の法學士、大藏省の海外駐劄財務官。

I answered. "We have no such cicadæ in the West."

"Human life is compared to the life of a semi," said Orito, — "*utsusemi no yo.* Brief as the song of the semi all human joy is, and youth. Men come for a season and go, as do the semi."

"There are no semi now," said Yasukōchi; "perhaps the teacher thinks it is sad."

"I do not think it sad," observed Noguchi.[1] "They hinder us from study. I hate the sound they make. When we hear that sound in summer, and are tired, it adds fatigue to fatigue so that we fall asleep. If we try to read or write, or even think, when we hear that sound we have no more courage to do anything. Then we wish that all those insects were dead."

"Perhaps you like the dragon-flies," I suggested. "They are flashing all arohnd us; but they make no sound."

〔註〕 1. 野口彌三氏、明治三十年英法科出の法學士、大阪第一

す、西洋には蟬は居ない」

緑戸は云つた「人生を蟬の一生にたとへて空蟬の世と申します。人間の歡樂や靑年時代は蟬の歌ほどに短いのです。蟬の如く人間はしばらく來て又行くのです」

安河內は云つた「今は蟬は居ません、多分先生は悲しいと思ひなさるでせう」

野口は云つた「私は悲しいとは思ひません。蟬は勉强の邪魔をします。その聲を憎みます。夏蟬の聲を聞いて、そして疲れて居る時は疲勞は益々增加して眠つて仕舞ます。讀んだり書いたり、或は考へようとしてさへ其聲をきくともう何にもする勇氣がなくなります。そんな時にあんな蟲みな死ねばよいと思ひます」

自分は云ふて見た「とんぼは好きでせう。とんぼはチラチラ飛び廻つて音がしない」

銀行支店支配人。

"Every Japanese likes dragon-flies," said Kumashiro. "Japan, you know, is called Akitsusu, which means the Country of the Dragon-fly."

We talked about different kinds of dragon-flies; and they told me of one I had never seen, — the Shōro-tombo,[1] or "Ghost dragon-fly," said to have some strange relation to the dead. Also they spoke of the Yamma[2]— a very large kind of dragon-fly, and related that in certain old songs the samurai were called Yamma, because the long hair of a young warrior used to be tied up into a knot in the shape of a dragon-fly.

A bugle sounded; and the voice of the military officer rang out, —

"*Atsumar É!*" (fall in!)[3] But the young men lingered an instant to ask, —

"Well, what shall it[4] be, teacher? — that which is most difficult to understand?"[5]

"No," I said, "the Sky."[6]

【註】 1. Shōrō-tombo 精靈とんぼのよみちがい。 2. Yamma やんま、地方によりては山とんぼと云ふ處より見れば山とんぼ

「日本人は皆とんぼが好きです」と神代は云つた「日本は御承知の通り秋津州と云はれますが、とんぼの國と云ふ意味です」

自分等はとんぼの種々の種類について語つた、彼等は自分の見たことのない一種のとんぼ、死人に何か不思議な關係があると云はれる精靈とんぼの話をした。又餘程大きな種類のとんぼ、ヤンマのことを語つた、そしてある昔しの歌に若い武士が長い髮の毛をとんぼの形ちにいつも結んで居たのでサムライのことをヤンマと云つたことのある話しをした。

ラッパが鳴り出した、將校の聲はひゞいた。

「集まれ―」しかし若い人々はしばらくためらふて尋ねた。

「ところで、先生、何になさるのですか、―最も難解のものはと云ふですか」

「否」私は云つた「大空」

即ちやんまなるべし。 3. fall in = get into line, take one's place in the ranks 即ち集れ。 4. it 話しは初めにかへりて作文の題。 5. やはり初めの通り that which is most difficult to understand ? と云ふのになさるのですか。 6. いや、それは止めて the Sky と云ふ題にしよう。

And all that day the beauty of the Chinese utterance haunted me, filled me like an exaltation: —

" *What thought is so high as it is? What mind is so wide?*"

其日は終日漢語の美はしさが自分につきまとうて離れずに、何かの歡喜のやうに自分の心をみたした。

「かくの如き高き思想ありや、かくの如き廣き心ありや」

V

THERE is one instance in which the relation between teachers and students is not formal at all, — one precious survival of the mutual love of other days in the old Samurai Schools. By all the aged Professor[1] of Chinese is reverenced; and his influence over the young men is very great. With a word he could calm any outbusrt of anger; with a smile he could quicken any generous impulse. For he represents to the lads their ideal of all that was brave, true, noble, in the elder life, — the Soul of Old Japan.

His name, signifying "Moon-of-Autumn," is famous in his own land.[2] A little book has been published about him, containing his portrait.[3] He was once a samurai of high rank

〔註〕 1. 此漢文の先生の名は秋月胤永、悌次郎は稱、韋軒は號、

五

教師と學生との關係は少しも形式だけでない例— 古への武士の學校で昔し互に相愛した尊き名殘—が一つある。漢文の老先生は誰にも愛されて居る、そして青年に對する感化は甚だ大きい。一言で如何なる怒りの破裂をも靜め、一笑で如何なる尊き志をも勵まし得る。即ち此人は古への勇壯、誠實、高尚なるものゝ理想、即ち古日本の魂を青年に對して代表して居るからである。

秋月と云ふ此人の名は、その國では有名である。此人の肖像を入れた此人に關する小冊子が出版された。昔し會津の大藩に屬する身分の高い武

(現六高の漢文の教授秋月胤繼氏の養父)。 2. his own land 日本。 3. 此人の古稀(七十)の祝賀會を學校で舉行し職員生徒一同の祝文詩歌を呈した、これを印刷した一小冊子「鐘四餘響」のことである。此人の閲歴と愛誦する詩の作者なるが故等とで學生に敬愛された。會津の藩主に從つて副將として幕府のために戰つたが、亂平いたのち終身禁錮に處せられ三年程經て特旨を以て赦された、官吏になることは辭したが大學と第一高等中學校の教師にはなつた、明治二十二年に止めて退職したが二十三年九月平山校長に懇請されて熊本に赴任した。

belonging to the great clan of Aidzu. He rose early to positions of trust and influence. He has been a leader of armies, a negotiator between princes, a statesman, a ruler of provinces — all that any knight could be in the feudal era. But in the intervals of military or political duty he seems to have always been a teacher. There are few such teachers. There are few such scholars. Yet to see him now, you would scarcely believe how much he was once feared — though loved — by the turbulent swordsmen under his rule. Perhaps there is no gentleness so full of charm as that of the man of war noted for sternness in his youth.

When the Feudal System made its last battle for existence, he heard the summons of his lord, and went into that terrible struggle in which even the women and little children of Aidzu took part. But courage and the sword alone could not prevail against the new methods of war; — the power of Aidzu was broken; and he, as one of the leaders of that

士であつた。年若くして信任、權勢の地位に上つた。軍隊の司令官、王侯の間の談判者、政治家、諸州の支配者、—封建時代の武士のやれることは皆やつた。軍務政務の暇ある毎にいつも人の敎師であつたやうである。今やかゝる敎師もない。かゝる學生もない。しかも今此人を見て、此人の下に居た騷亂好きな劍士に如何に恐れられた(愛されると共に)かを信ずることができない。若い時峻嚴で名高い武士が打つて變つて溫和になつた程人の心を引きよせるものはない。

封建制度が生存のために最後の戰をした時、藩公の命に應じて恐るべき戰に加はつた、此戰には會津の婦人小兒も加はつた。しかし勇氣と劍だけでは新しい戰法に勝つことはできなかつた、會津の軍勢は破れた、そして會津軍の首領の一人なる

power, was long a politicnl prisoner.

But the victors esteemed him; and the Government he had fought against in all honor took him into its service to teach the new generations. From younger teachers these learned Western science and Western languages. But he still taught that wisdom of the Chinese sages which is eternal, — and loyalty, and honor, and all that makes the man.

Some of his children passed away from his sight. But he could not feel alone; for all whom he taught were as sons to him, and so reverenced him. And he became old, very old, and grew to look like a god, — like a Kami-Sama.

The Kami-Sama[1] in art bear no likeness to the Buddhas. These more ancient divinities have no downcast gaze, no mediative impassiveness.[2] They are lovers of Nature; they haunt her fairest solitudes, and enter into the

【註】 1. これは復數。 2. 佛像の眼を見れば地藏でも觀音でも

彼は長く國事犯の囚人であつた。

しかし此勝つた人々は彼を尊んだ、此人が敵として戰つた政府は新青年を敎ゆる役に、禮を厚くして此人を迎へた。新青年は若い人々から西洋の科學と西洋の語學を學んだ。しかし彼はやはり支那の聖人の不朽の智慧を敎へた—そして忠義、名譽、その他人間をつくるものを敎へた。

此人の子供のうちで死んだものも幾人かある。しかし此人は淋しく感ずることはできなかつた、即ち彼の敎へたものは子供と同じになつて又彼を尊敬したからである。そして彼は老いて、甚だ老いて神樣のやうに見えて來た。

美術で見る神樣は佛樣と少しも似て居ない。此佛樣より古い神樣はうつむいた目つきや、虛心に默想に耽つて居る處がない。神は自然を愛する、自然の最も美はしい奥にも入る、樹木の精にもな

何でも downcast gaze (うつむいた眼付) をもたないものはない、眼付は必ず下を向いて居る。

life of her trees, and speak in her waters, and hover in her winds. Once upon the earth they lived as men; and the people of the land are their posterity. Even as divine ghosts, they remain very human, and of many dispositions. They are the emotions, they are the sensations of the living.[1] But as figuring in legend and the art born of legend, they are mostly very pleasant to know. I speak not of the cheap art which treats them irreverently in these skeptical days, but of the older art explaining the sacred texts about them. Of course such representations vary greatly. But were you to ask what is the ordinary traditional aspect of a Kami, I should answer: "An ancient smiling man of wondrously gentle countenance, having a long white beard, and all robed in white with a white girdle."

Only that the girdle of the aged Professor was of black silk, just such a vision of Shintō he seemed when he visited me the last time.

[註] 1. 神道の神は生きた人間の感情感覺をそのまゝに表はし

る、河や水に音をさせ、風にものつて徘徊する。昔し人間と同じく此地上に住んだ、そして此國の人々はその子孫である。神としても餘程人間らしい、そして種々の性癖をもつて居る。神は人間の感情であり又人間の感覺である。しかし傳說や、傳說から生れた美術に表はれた處では此等の神は大概愉快にできて居る。今日の不信仰な時代に不謹愼につくられた安つぽい美術について云ふのではない、神に關する古い貴い文を說明する古い美術について云ふのである。勿論神の表し方は種々違つて居る。しかし神の普通の傳說的の形ちはと問ふ人があれば自分は「長い白いひげをはやした白いきものと白い帶をした非常に溫和な容貌の、にこにこした老人」と答へる。

老敎授の帶だけは黑かつたが、先日自分を訪問された時丁度神道のこんな幻像に見えた。

て居る。酒も魚もめしあがるのも此理由。

He had met me at the college, and had said: "I know there has been a congratulation[1] at your house; and that I did not call was not because I am old or because your house is far, but only because I have been long ill. But you will soon see me."

So one luminous afternoon he came, bringing gifts of felicitation, — gifts of the antique high courtesy, simple in themselves, yet worthy a prince: a little plum-tree, every branch and spray one snowy dazzle of blossoms;[2] a curious and pretty bamboo vessel full of wine; and two scrolls bearing beautiful poems, — texts precious in themselves as the work of a rare calligrapher and poet; otherwise precious to me, because written by his own hand. Everything which he said to me I do not fully know. I remember words of affectionate encouragement about my duties, — some wise, keen advice, — a strange story of his youth. But all was like a pleasant dream; for his mere

【註】 1. Hern 先生即ち著者の長男の誕生のこと。

學校で自分にあつて云つた「あなたの處に御慶事があつたさうです、私の參らなかつたのは老年だからでも、御宅が遠いからでもありません、たゞ長い間病氣して居ましたからです。しかし何れ御伺ひ致します」

そこで或天氣のよい午後、祝ひの品々をもつて參られた、一物それ自身は簡單だが王侯にも恥かしくない昔し風の極めて禮儀正しい贈りものであつた、即ち大枝小枝が雪の如く花の咲きほこれる小さい梅の木、酒の入つた不思議な綺麗な竹の器、綺麗な詩を書いてある二つの卷物であつた、本文は非凡の書家兼詩人の作品としてそれだけで貴いものである、さらに此人自身の手になつたので自分には別段に貴いのである。自分に云はれたことは完全には分らない。自分の務めについて優しい奬勵の言葉、何か賢こい强い助言、及び此人の青年時代の不思議な話し、を自分は覺えて居る。しかし何れも愉快な夢のやうであつた、此人

2. 實際は梅の盆栽。

presence was a caress,[1] and the fragrance of his flower-gift seemed as a breathing from the Takama-no-hara. And as a Kami should come and go, so he smiled and went, — leaving all things hallowed.[2] The little plum-tree has lost its flowers: another winter must pass before it blooms again. But something very sweet still seems to haunt the vacant[3] guest-room. Perhaps only the memory of that divine old man; — perhaps a spirit ancestral, some Lady[4] of the Past, who followed his steps all viewlessly to our threshold that day, and lingers with me awhile, just because he loved me.

【註】 1. caress なでさすること（其人の居ることだけで自分が愛撫される心地がした）。 2. hallowed 清められて。

が只そこに居ることだけが一の愛撫であつて、梅花の芳香は高天原からの微風のやうであつた。そして神の來往する時のやうに、そんな風に此人は微笑して歸つた—あとに殘つたものは皆淸められた。小さい梅花は落ちた、再び花さくまでには今一冬來なければならない。しかし此空しい客座敷に何か非常に快きものが殘つて居るやうである。恐くはその神々しい老人の記臆だけであらうか、或はその日此人の足について見えないやうに入り來つて彼が自分を愛したと云ふので暫らく自分の家に止まつて居る古への靈、過去のある女神とも云ふものゝ爲であらうか。

3 vacant 客の去つたあとの空しき。 4 Lady of the Past 過去の女神。

TO OCHIAI[1]

Kobe, February, 1896.

Dear Ochiai,—I am delighted that you have taken up medicine, for two reasons. First, it will assure your independence—your ability to maintain yourself, and to help your people. Secondly, it will change all your ideas about the world we live in, and will make you large-minded in many ways, if you study well. For in these days, you can not study medicine without studying many different branches of science—chemistry, which will oblige you to understand something of the nature of the great mystery of matter,—physiology, which will show you that the most ordinary human body is full of machinery[2] more wonderful than any genius ever invented,—biology, which will give you perceptions of the eternal laws which shape all form and regulate all motion,—histology, which will show you that all life is

【註】 1. 現岡山高等學校教授、落合貞三郎氏。同じく松江中學出身なれども教師日記へ入るには餘りに若かつた。 高等學校の

落合氏へ

神戸、一八九六、二月、

落合君、——君が醫學を選んだのを二つの理由で喜ばしく思ふ。第一にそれが君の獨立、君自らを養つて君の家族を助けることのできる能力、を保證します。第二にそれは私共の生活する世界に關する君の思想を變へます、そして、もし君がよく勉强すれば多くの點に於て君を考の大きな人にします。その理由は、今日醫學を學べば必ず種々異なつた科學の各部門、即ち、物質の大秘密の性質を幾分君に理解せしめないではおかない化學、——最も尋常の人體と雖も如何なる天才の發明した機械よりももつと不思議な機械でみちて居ることを君に示す生理學、——凡ての形ちを作り、凡ての運動を調整する永久不變の法則を君に理解せしむる生物學、——凡ての生命は人間に

三部醫科に入つて先生の賞贊を得た手紙は即ち此手紙。しかし氏は後文科に轉じ英文科を出た。

2. machinery=machines 集合名詞。

shaped, after methods that no man can understand, out of one substance into millions of different forms,—embryology, which will tell you how the whole history of a species or a race is shown in the development of the individual, as organ after organ unfolds and develops in the wonderful process of growth. The study of medicine is, to a large extent, the study of the universe and of universal laws,—and makes a better man of any one who is intelligent enough to master its principles. Of course you must learn to love it, —because no man can do anything really great with a subject that he does not like. There are many very horrible things in it which you will have to face; but you must not be repelled by these, because the facts behind them are very beautiful and wonderful. There is so much in medicine—such a variety of subjects, that you will have a wide choice before you in case some particular branch should not be attractive to you.

Also do not forget that your knowledge of English will be of great use to you in medicine,

は分らない方法によつて一つの物質から數百萬の異なつた形ちに作られることを君に示す組織學、——一種族一人種の全歴史は、機關は代る代る生長の不思議なる順序によつて展開發達するが故に、一個體の發達によつて示されることを君に敎ゆる發生學を學ばねばなりません。醫學の研究は大部分宇宙及び宇宙の法則の研究です、そしてその原理を充分に理解するだけの明のある人をはるかに賢くします。勿論君はそれを愛するやうにしなければなりません、そのわけは自分の好まないことについて實際何人も立派なことのできるわけはないからです。醫學には君がまのあたり出合はねばならない甚だいやなことが澤山あります、しかしそれで君はいやになつてはいけない、その背後にある事實は甚だ美はしく不思議であるからです。醫學には甚だ澤山のことがある、そんなに種々の科目があるから、もしある科目が君の氣に入らねば又ひろく選擇の餘地がありませう。

それから英語は君が醫學をやるのに大層役

and that, if you love literature, medicine will give you plenty of chance to indulge that love. (Some of our best foreign authors, you know, have been practising physicians.[1]) In Kōbe I find that some of the best Japanese doctors find English very useful to them, not only in their practice, but also in their private studies. But you will also have to learn German; and that language will open to you a very wonderful literature, if you like literature—not to speak of[2] the scientific advantages of German, which are unrivalled.

Well, I trust to hear good news from you later on.[3] Take great care of your health, I beg of you, and believe me ever anxious for your success.

Very truly always,

LAFCADIO HEARN.

【註】 1. Oliver Wendell Holmes (米), Conan Doyle (英) やドイツのシルレルなどその例なり、Practising Physicians は醫學者でなく醫學を實際にやる人、即ち病院に出るなり開業するなりし

に立つこと、又君が文學が好きなら醫學はその好みに耽るのに澤山の機會を與へることを忘れ給ふな。(君の知つて居る通り、私共の一番よい外國の著述家は醫者でした) 神戸に於て一番よい日本の醫師は開業して居るからばかりでなく、又自分の勉强のためにも、英語は大層役に立つて居たことを知つて居る。しかし君は又ドイツ語をやらねばならないでせう、そして文學が好きならドイツ語は君に甚だ立派な文學をあけて見せるだらう、ドイツ語の科學的方面に長所のあることは云ふまでもない、その點では世界無比です。

とにかく今後君からよい便りを得ることを信じます、お大事になさい、どうぞ、そして御成功をいつも祈つて居ます。

いつも甚だ忠實なる

ラフカデイオ　ヘルン。

て居る人。それ故日本の森鷗外氏はこの例に入らず。 2. not to speak of = without speaking of. 云ふもさらなり、云ふまでもなく、云ふに及ばず。 3. later on 後に、今後。

TO BASIL HALL CHAMBERLAIN[1]

February 25, 1894.

Dear Chamberlain,—...... Surely, as you say, it were[2] better for Japan to have any civilized religion than none,—and the danger is that of having none. You can't imagine how many compositions I get containing such words as—"Is there a God?—I don't know"—which, strange as it may seem to you, does'nt rejoice me at all. I am agnostic[3], atheist, anything theologians like to call me; but what a loss to the young mind of eighteen or twenty years must be the absence of all that sense of reverence and tenderness which the mystery of the infinite gives. Religion has been very much to me, and I am still profoundly religious in a vague way. It will be a very ugly world when the religious sense is dead in all children. For it is the poetry of

【註】 1. 既出。手紙中の………は略したところあるシルシなり。 2. it were=it would be……… 3. agnostic 不可知論者、人間の知識には際限あり、分ることゝ分らぬことゝあり、神の存在の如き

ベーシル、ホール、チエムバレン氏へ

一八九四、二月二十五日、

チエムバレン樣、——(前略)全く君の言の通り、日本にとつては何かよい宗敎のある方が何もないよりよいでせう、そして何もないのが危險です。私の手許に集る作文のうちに「神の存在は——私に分らない」と云ふやうな文句のあるのがどんなに多いか君には想像ができないでせう、と云へば不思儀に聞えるかも知れないがその文句は少しも私の氣に入らない。私は不可知論者、無神論者、その外神學者が勝手な名をつけるものですが、十八や二十の青年が宇宙の神秘に對して敬虔と哀愁の念を起さないのはどんなに損失でせう。宗敎は私にとつては一大事でしたが今もなほ私はハッキリしない意味で非常に宗敎的です。凡て子供に宗敎的觀念のないのは全く困つた世の

はあるともないとも證明のできぬこと故分らずと云ふ論者、スペンサー、ハツクスレーなどの人々は agnostics なり、此名はハツクスレーのつけたもの。

the young, that should color all after-thought[1], —or at least render cosmic emotions[2] possible later on[3]......

Two gleams of sunshine[4] :—

You know there are men in this world that we love the first time we look at their faces, and never cease to love. I have met two such Japanese,—needless to say never of *this* generation. The first was Koteda Yasusada, now Governor of Niigata. The second was Akizuki of Aidzu, an old man of seventy-three, Professor of Chinese in the college. I have often spoken of him.

He came to-day to see my boy (for he had been away in Tokyo for some months[5]). He brought gifts,—a beautiful plum-tree in blossom, a most quaint vase full of sake, and (most precious of all) two kakemono written by himself, inscribed with poems in honour or in congratulation—what should I say—of *Herun-San-no-o-Ko-san*. He is a great Chinese

[註] 1. after-thought 何か事をやつたあとで考へること。なまけて居ては今日樣にすまないと云ふが如きも此一種の宗教心なり。
2. cosmic emotions 世界大宇宙大の感情 たとへば一身一家の利害

中です。即ち宗教心は凡ての思慮反省を彩るべき、或は少なくとも後に世界大の感情を可能ならしむべき青年の詩ですから——

愉快であつたこと二つ、

御存じの通り、此世には初めて顔を見て好きになつて、そして決して嫌にならない人があります。私はこんな日本人に二人遇つたが現代の人でないことは云ふまでもない。第一の人は今新潟縣知事の籠手田安定氏でした。第二は學校の漢學の先生、七十三の老人會津の秋月氏でした。私は此人のことを度々話しました。

今日此人は私の子供を見に來ました（數ヶ月東京へ行つて居て不在でしたから）みやげをもつて來てくれました、奇麗に花の咲いた梅と、酒の一杯入つた甚だ寄妙な瓶と、それから(一番貴重なもの（自分で書いたかけものゝ双幅で、それには、何と云ふのでせう、ヘルンさんの御子さんの御祝

損得の如き感情でなく世界人類人道のためと云ふが如き博大なる感情。 3. later on 後に、後になつて。 4. 日光の二つの輝きとは二つ嬉しい事と云ふ意味。 5. 前章には病氣であつたとある。

scholar, and famous for calligraphy too. So I had this Soul of old Japan in my house for an hour; and the Presence, like the perfume of the plum-blossoms, filled all the place and made it somewhat divine. Were there real Kami, I know they would come and smile and look just like that divine old man with his long grey beard.

The other gleam of sun was less bright, but it was cheerful,—a visit to the jiujutsu private school.[1] Its teacher, Arima Sumihito,[2] long of the Nobles' school, is at all events[3] a man. He is a pupil of Kano, speaks English perfectly,—the handsomest Japanese I know,—cynically polite,—a fine aristocrat; in short, one of those types so different from the rest that I never thought before of writing about him. The type is impossibly reserved,—not attractive,—but decidedly interesting. Well, I studied some marvellous things during the exhibition there; and as I watched the jiujutsu, and studied the surroundings, the idea came to me

【註】 1. 柔術の私塾—しかし實は高等學校の柔道場。 2. 有馬純臣、學習院出の柔道家、英語さ柔道の先生、のち學習院より洋行の

ひ御喜びの歌が書いてあります。漢學の大家であり、その又上有名な書家です。それで私は一時間私の家に舊日本の魂をとめて置いたのです、そして其人の光來がその梅の花の香のやうに家の中をみたして、何となく神聖にしました。眞の神があるものなら、その神は丁度あの白いあごひげのある聖い老人のやうな顏をして來て微笑したらうと云ふことを私は知つて居ます。

今一つ愉快なことゝ云ふのはそれ程あざやかなものではないが、しかし喜ばしいものでした、それは柔術道場に行つて見たことです。その教師の有馬純臣と云ふのは長く學習院に居た人で、たしかに立派な人です。嘉納の門人で完全に英語を話します、私の知つて居る最も立派な容貌の日本人で、皮肉に見える程丁寧で、立派な貴族です、つまり私が前に此人のことを書かうと思ふたことのない程そんなに他の人々と違つた型の人です。此型の人は不可能と思はれる程打解けません、

途中死去。 3. at all events=certainly ; in any case たしかに、とにかく。

of a possible normal change, or reform, in the whole existing educational system. "Here," I said, "is the old samurai school,—severely simple, healthy, lovable, romantic. The students delight in this return to the old ways, —the squatting on the floor,—the perfect natural freedom,—the faultless discipline of self-control,—the irreproachable politeness,— the brotherhood between teacher and pupil —" Now could not schools be established for *all* teaching in this very way? I think they could. It seems to me now an enormous mistake for the Japanese to have tried to adopt the Western school-system, to have built monstrosities of brick, and destroyed the Oriental relation of pupil to teacher.

LAFCADIO HEARN.

人好きもしません、しかしたしかに興味のある型です。ところでそれから柔術を見て、そして周圍をよく見て居る間に色々不思議なことを學びました。それから私の心に現在の敎育制度全部に適當な變更又は改良のできさうな考が浮びました。私は云つた「こゝに非常に簡單な、健全な、愛すべき、空想的な古武士の學校がある。學生は古への習慣即ち、床の上に坐ること、全く自然の自由、自制の完全なる訓練、非難のうちどころのない禮義、敎師と生徒の間の友情にかへることを非常に喜ぶ」ところで丁度こんな風に學校をたてゝ凡ての敎育をやることができないものでせうか。私はできると思ふ。日本人にとつては西洋の學制を採用しようとつとめて、煉瓦の異様なものをたてゝ、そして生徒と敎師の東洋風の關係を破壞したのは大きな誤りと私は思ひます。

ラフカディオ　ヘルン。

TO BASIL HALL CHAMBERLAIN

March 9, 1894.

Dear Chamberlain,—...... "Dai-Kon" for *Dai Konrei*, I suppose,—the Great Wedding. Their Imperial Majesties have given us all—teachers and functionaries—the sum of *fifty yen*, wherewith to make ourselves jocund. At the school a new Japanese song was sung; and we all bowed to the pictures of their Augustnesses, and then there were military salutes[1], and then, in the refectory, we drank the Imperial healths. (The ceremony of bowing is much less elaborate and graceful than in the ordinary middle schools. Only two bows are given, instead of six.) Then "Ten-no-Heika-Banzai!"—and such a yell!—like a real college-yell in the West. "Ten-no-Heika-Banzai!"—not a yell, the second time,—but a clear roar, that did my heart good to hear. I wondered what the *third* cheer would be like.

【註】 1. military salutes 陸軍や海軍の吉凶の場合に大砲又は小銃

ベーシル、ホール、チエムバレン氏 へ

熊本、一八九四、三月九日、

チエムバレン樣、——(前略)「大婚」は大婚禮と云ふことでせう。兩陛下は私共一同、敎師と事務員、に酒肴料として五十圓賜はつた。學校では新しい歌は歌はれた、そして一同は御眞影の前に敬禮した、それから軍隊式の禮式をした、それから食堂で聖壽萬歲の祝盃をあげた。(敬禮の儀式は中學校に於けるよりは丁寧優美の點に於てはるかに劣つて居る。こゝでは六度でなく僅かに二度の敬禮をするだけであるから)それから「天皇陛下萬歲」その叫びと云つたら全く西洋の大學の叫びのやうであつた。「天皇陛下萬歲」二度目のは叫びではない、全く怒鳴りである、それを聞いて胸が清々しました。三度目のはどんなだらうと思

なうつたり、捧げ銃をしたり、萬歲を唱へたりすること。こゝではあとにある萬歲の三唱等を云ふものならん。

"Ten-no-Heika-Banzai!" A tremendous roar followed and suddenly broke into a furious song,—the song of the overthrow of the Tokugawa dynasty. "They are very, very much excited," said one of the teachers,—"and that song is not a good song; it is vulgar!" I tried to get the song; but every one to whom I applied made unfavourable criticisms about it. What the fault was, I can't imagine; but the song went on till I thought the roof surged up and down at every lilt in it. It was a very quick, swinging, devil-may-care[1] sort of a song,—not at all like the solemn military measures of to-day.—Then the pendulum moved a little more to the right[2]. It always does when I hear such singing. I think then, the Soul lives; while *that* remains there is always hope.[3]

To-night a procession of students with E-NOR-MOUS lanterns,—and then an enter-

【註】 1. devil-may-care = reckless. 向ふ見ずの。 これは多分當時流行した「宮さん、宮さん、お馬の前に.........」など云ふ歌であつたらう。 2. the pendulum.........to the right. (時計の)ふんどんが少し右の方(即ち正し方へ)動いたと云ふことなれどもヘルン

た。「天皇陛下萬歲」すさまじい怒鳴りが續いたがそれが突然勇ましい歌となつた、何でも德川幕府滅亡の歌であつた。「皆非常に興奮して居る」と一人の先生が云つた「それからあの歌はよい歌ぢやない、下等だ」私は歌を得ようとしたが、私の賴んだ人は皆その歌についてよくない批評をした、どこが惡いのだか私には想像がつかない、しかし其歌は續いた、仕舞にはその歌の抑揚につれて屋根がゆらぐかと思はれた。それは非常に早い、よく上り下りする、向ふ見ずのやうな種類の歌でした、今日の嚴肅なる軍隊風の調子と少しも似て居ない。そこで私の溜飮が少し下がつたやうな氣がした。こんな歌を聞くといつでもさうです。その時魂が生きて居ると云ふ氣がします、それが生きて居ればいつでも望みがあります。

今夜は大變な提灯をもつて學生が行列をし

はこれを少し氣もちがよくなつたと云ふ意味に度々手紙に使用した、これはヘルンだけの expression で外の手紙に說明して居る、それは pendulum to the left の方でこれは悲觀的と云ふことだと云つて居る。 3. 此の soul は日本人のか自分のか、或はたゞ soul と云ふものかの三通りに取れるが、譯者は理由ありて日本人のに取る。

tainment at the school. What it will be like, I don't know. I am going to see,—and will tell you all about it to-morrow.

Do you think I am right or wrong about the following matter? I am asked advice sometimes, and I urge those who ask it to follow a course of practical science or of medicine, and to leave law, literature, and philology alone (unless, in the case that they seem to have extraordinary natural talent for languages). The other day I got a letter from Kyoto, full of English mistakes, from a student[1] who wanted to know about taking a philological course;—and I wrote him, very strongly advising him to study anything else by preference. The utter incapacity of most of the students to turn literary and language studies to any high account seems to me proof that only rare talents should be even allowed the chance to follow such studies.

Saturday, 10th March:—This morning I returned home from the college at 2.30,—after

【註】 1. 後英文學をやつた現四高教授大谷正信氏のこと、何れ中

てそれから學校で宴會をします。どんなものだか私は知らない。見に行くつもりです、そして明日詳しく御話します。

つぎの事について 私はまちがつて 居るか居ないかどう御考ですか。私は時々相談をかけられます、そしてそれを求める人に應用科學か醫學をやるやうに、そして法律や文學や言語學（語學の非常な天才をもつて 居ると 思はれる場合で なければ）はやるなと切に勸めます。先日も京都から一學生が まちがひだらけの 英語の 手紙をよこして言語學 をやることについて 知りたいと 云つて來ました、そこで私は何か外のものを選んで勉强するやうに大に勸めてやりました。文學や語學の研究を 役に立てる 能力のないことが 即ちこんな研究に従事する 機會は たゞ 稀有の天才にのみ初めて許さるべきことの證據と私には思はれる。

三月十日、土曜日、——今朝、私は珍らしい宴會の一夜のゝち 二時半に學校から歸りました。

學を出て高等學校へ入學したばかりのこと故、英語のまちがひの多いこと勿論なり。

a night of curious festivities. About 6.00 on Friday afternoon the lantern procession left the college. There were about 400 students, —each carrying a small red lantern,—and to every hundred there was a monstrous egg-shaped red lantern, borne at the head of the column. The teachers and students sang their new song, and other songs through the city, and shouted "Banzai." At nine they returned to the college, and the festivities began.

These were chiefly theatrical, with some recitation thrown in. Unfortunately the college has no real hall,—only an enormous shed used for drilling-purposes in wet weather, and the shed is not enclosed at the sides.[1] Kneeling on the floor, with the north wind on one's back, from 9.00 P.M. till 2.00 A.M. was trying. Still I find I *can outkneel*[2] the Japanese *in Yōfuku.*

A word about the performances.

The students had arranged a nice little stage, and some scenery.[3] The performance

【註】 1. sides だけで四方とも三方とも見られるが、實際は二方。
2. Outkneel 膝を折つて坐する點で勝つ。全くヘルンは日

金曜午後六時頃、提灯行列が學校を出た。四百人程の學生が居て、銘々小さい赤い提灯をもつてそして百人毎に大きな玉子形の赤い提灯があつて、列の先頭に押立てられた。教師と學生は新らしい歌やその他の歌をうたつて市中を練りあるいて「萬歲」を唱へた。九時に學校に歸つて、そしてお祭りさわぎが初まつた。

重に芝居がゝつたもので、暗誦も少し入つて居た。不幸にして學校には本當の大講堂がなく、たゞ雨天の時に使はれる大きな假屋があるだけで、その假屋も兩側は圍ふてない。北風を背に受けて九時から二時まで床の上にペタリと座つて居るのはつらいことでした。それでも私は洋服をきてすはることでは日本人よりも强いことに氣がつきます。

その演藝について一言。

學生はちよつと氣のきいた舞臺と背景を準備した、演藝は武士の詩吟で初まつた、銘々の靑

本人よりも坐るこさ上手であつた。 3. Scenery 書割、道具立、舞臺面、背景。

opened with *samurai* sword-songs,—each young man having the appropriate costume, with a white band about his hair, sleeves strung back, etc. This was greatly and deservedly applauded.

Then came a comedy. Some peasants appeared from different sides, singing real peasant songs, met, greeted each other, and squatted down in the middle of an imaginary field. Surveyors come to survey. Peasants protest, interfere, attack,—the instruments are slung about,—a great fight occurs;—policemen run in, and arrest all parties concerned. Next scene shows the police court. The trial is, of course, made very funny by the answers and protests of the peasants. Just after the judge has pronounced sentence of two months' imprisonment and costs comes a telegram announcing the Imperial Wedding-anniversary. Prisoners are discharged; and judge, attorneys, police, peasants, and surveyors dance a dance of exultation. The acting in this piece seemed to be very fine:

年は白鉢卷をして、タスキをかけなどして、それぞれ適當な風をして居た。これが大喝采をうけたが、うけるだけのことはありました。

つぎに喜劇があつた。數人の農夫が本當の百姓歌を歌ひながら、それぞれ違つたところから入場して、出遇つて、お互に辭讓して、野原と想はれる處の眞中に腰を下す。測量師が來て測量する。農夫が故障を云つて、妨害して、くつてかゝる、器械が投げとばされる、——大喧嘩になる、巡査がかけつける、そして關係者一同を拘引する。つぎは法廷の場。その取調べは農夫の答や抗辯によつて勿論甚だおかしくされる。丁度判事が二ヶ月の禁錮と訴訟費用支拂の宣告を終つた時、大婚記念發表の電報が來る。罪人は放免になる、そこで判事も辯護士も巡査も農夫も測量師も欣喜雀躍の踊りをやる。此喜劇のしぐさは非常によかつたやうです。私には農夫の役をやつた人々のすぐれて居るのをよく理解することができた。

I was able to appreciate the excellence of the peasants' parts.

To not bore[1] you with too many details, I will only mention one remarkable series of subjects—what subjects? *Je vous le donne en mille.*[2]—Why,[3] Commodore Perry and the Shogunate. The Commodore speaks English, and is surrounded by armed marines. Shogun's interpreter asks him, "Why have you come to this country?" Perry makes appropriate answer, explains,—says he has a letter from the Great American People. Interpreter reads letter. Replies that the letter is too difficult to answer at once,—so much time will be required . . . "Sir, next year come to Nagasaki, and wait there for the Shogun's order. Do you know Nagasaki?" Perry answers that he knows Nagasaki, but does not propose to know the Shogun. He will return to await the *Emperor's* orders.

Next scene, Ronins, Samurai, aged teacher. Aged teacher advises his young men what to

【註】 1. To not bore you = Not to bore you. 此方普通。
2. 「私はそれをあなたに千(澤山)あげる」と云ふフランス語。

餘りくだくしいことを書きすぎて君を困らせぬために、私はたゞ著しい題を一つだけ申しませう、どの題にしませうか。いくらでもありますが。さう、「ペリー提督と幕府時代」にします。ペリーは英語を話す、周圍に武裝した水兵が居る。將軍の通譯は「何故、此國に來ましたか」と問ふ。ペリーは適當な返事をして說明する、大アメリカ人民よりの手紙を携へて居ると云ふ。通譯が手紙を讀む。手紙は直ちに返事のできない程むつかしい、それだけの時間がかゝると答へる。・・・「來年長崎へお出でなさい、そしてそこで將軍の命をまちなさい。長崎を知つて居ますか」ペリーは長崎を知つて居ると答へるが、將軍を知つて居るとは云はない。皇帝の命令をまつために長崎に歸つて來ると云ふ。

つぎの場、浪人、サムライ、老先生。老先生は青年になすべきことを忠告する。時はまさに

3. 此 why は感詞、さうだねーコーット、など云ふこさにあたる。

do. Times are about to change. The duty will be to work,—to work earnestly to make Japan great.

Last scene. Banquet of Ministers in Tokyo. One student very cleverly represented Count Ito. The Minister of England arises and makes a speech about—the Imperial Wedding-festival. The French Minister[1] speaks on the same subject in French. The German in German. The Chinese in Chinese. The Russian Minister, the Spanish, and the Italian, do not, however, speak in their own tongues. The speeches are humorous; but more humorous still the interpreter's part, by a young man with a magnificent voice, ringing like a gong,—who imitates, with very artistic exaggeration, the solemn musical antique method of reading official texts.

I may also mention a really magnificent Daikokumai—Kyūshū style, quite different from anything in Izumo, and extremely picturesque in costume and movement. Also

【註】 1. 此フランス公使になつた人は前にあつた宮川和一郎(杉

變らうとして居る。働くこと、日本を偉大にするために熱心に働くのが義務だととく。

最後の場。東京で公使の宴會。一學生が巧みに伊藤伯に扮した。英國公使は立つて大婚の祝賀演說をする。フランス公使は同じくフランス語で話す。ドイツ公使はドイツ語で。支那公使は支那語で。しかしロシヤ公使、スペイン公使、及びイタリヤ公使はそれぞれの國語では話さない。演說は滑稽だが通譯の役が一層滑稽です、それは鐘のやうに鳴る立派な聲の青年で公文書を讀む嚴肅な音樂的な昔しの風を大げさにまねをすることが甚だ巧みです。

私は又全く立派な大黑舞のことを云はせて貰ひたい、それは出雲のと全く違つて居る九州風で、そしてキモノや擧動は極めて綺のやうです。やはり雨具をきて農夫に變裝した武士が、野中で極小さい奇妙な俗歌を歌つて刀をかくして鬼を

井氏)であつた、チエムバレン氏への別の手紙に出て居る。

samurai in raincoats, disguised as peasants, singing a very small weird humble song in a field, with their swords hidden,—waiting for Demons, who are duly slaughtered.

Well, you would be bored if I told you any more on paper in this mere hasty fashion. Suffice to say the evening was a very pleasant one for me. I could not understand the dialogue, but I could understand the acting. It seemed to me very good indeed,—like the acting of Latin students. I do not think English students are naturally good actors at all. The enormous difference in the acting of French and of English boys was strongly impressed on me in early days.

Then I could but remark the extremely strong national feeling that characterized the greater part of the performance,—the real enthusiasm of the young men,—but always with the fond regret for old samurai days,—sword-days. Whatever the officials be, the students certainly have the feeling that should be the strength of Japan.

At a little after 2.00 I fled,—too many

まつて居る、その鬼は正しく殺される。

しかしこんなホンノ大急ぎの仕方でモット書いたら君もウンザリするでせう。とにかく其晩は私に取つては甚だ愉快でした。私には問答は分らなかつたが、しぐさは分りました。私には非常によくできたやうに思はれた、フランスあたりの學生の芝居のやうに。英國の學生は生れつき少しもよい役者ではないと思ふ。フランスの學生と英國の學生との芝居の非常に違ふことは私の少年時代に強い印象を與へました。

それからその演藝の大部分の特色をなして居た非常に強い國民的感情、青年の眞の熱情、しかし昔しの武士時代、兩刀の時代を忍ぶ情を認めないでは居られなかつた。役人はどうでも、學生はたしかに日本の力となるべき熱情をもつて居ます。

二時少しすぎに私は逃げて歸つた、餘り大勢の學生が私に酒を強ゆるので。私は十五杯も飲ま

students urging me to drink sake. I had to drink about fifteen cups, and have a headache as I write.

Faithfully,

LAFCADIO HEARN.

ねば ならなかつたので この手紙を書いて居ると頭痛がします。

忠實なる

ラフカディオ ヘルン。

TO BASIL HALL CHAMBERLAIN

Kumamoto, June, 1896.

Dear Chamberlain—...... Some splendid boys will go to Tokyo this summer, but I suppose as you no longer teach you are not likely to see them. Still, I would like to mention one name. Yasukōchi Asakichi, whom I have taught for three years, is the finest Japanese student I ever met. Though a heimin, he is patronized by the lord of Fukuoka, and will probably be sent abroad. He studies law, I am sorry to say, but he is right,—having a special high talent for it. He is extraordinarily solid in character,—massively, not minutely, practical,—straight, large, thorough, and I think will become a great man. He is not only first in English, but easily first also in everything he studies,—and, quite unlike the average student, regards his teachers only as helps to his own unaided study—instead of as bottles of knowledge to be emptied slowly upon lazy sponges.

ベーシル、ホール、チエムバレン氏へ

熊本、一八九四、六月、

チエムバレン様――(前畧) 今年の夏はできる學生が幾人か東京へ行きますが、君はもう教へないから逢ふこともないでせう。それでも一人だけ名を云つて置きたい。私が三年間教へた安河内麻吉は私がこれまで逢つたうちで一番よい日本の學生です。平民ですが福岡の藩主のひいきを受けて居ます、そして多分洋行もされるでせう。法律をやつて居るのが殘念です、しかしその方面の才能は充分にあるから、それが至當です。性格は非常にシッカリして居ます、コセコセしないで大きく實行的で、眞直に、大きく、綿密周到です、それで私は彼が大人物になると思ひます。英語が一番よいのみならず、彼のやるものは何でも無造作に一番です、そして普通の學生とちがつて、教師を知識の瓶と見てそろそろとスポンジで吸ひ取るのだと考へないで、自分の一本立の勉强を助けてくれるものとしてのみ見て居ます。その友人川淵も殆

—A comrade, Kawafuchi,[1] is nearly as clever, though less solid. What a pity, however, that the really fine heads take always to law. The science-classes show no such young men: they are mediocre in the extreme……

Every once in a while,[2] some delightful, earnest, sweet-souled man—a Tempo—comes down here and lectures. He tells the boys of their relation to the country's future. He reminds them of their ancestors. He speaks to them of loyalty and honour. He laments the decay of the ancient spirit, and the demoralizing influence of Western manners and Western religion and Western business methods. And as the boys are good, their hearts get full, and something brightens their eyes in spite of the fashion of impassiveness.[2]—But what are their thoughts after?

A striking example was afforded me the other day, by a conversation with the remarkable student I told you of before,—Yasukōchi Asakichi. I will try to reproduce it thus:—

【註】 1. 安河內は卒業の當時の 番、川淵は二番。 2. once in a while=at long intervals これに every つけたもの故、折々。

んど同じ程の秀才ですが性格は少し弱い。しかし本當に頭のよいのはいつも法科に行くのは困りますな。理工科の方にはこんな青年は居ない、此上もなく平凡です(中略)

折々愉快な、熱心な、心の美はしい人(天保の人)がたいか來て演說をします。學生に國家の將來と學生の關係をきかせる。祖先のことを思はせる。忠義と名譽のことをとく。古への精神の衰へたことをなげく。西洋の風俗、西洋の宗教、西洋の商業方法の人を墮落せしむることをなげく。そこで學生が正直だから胸が一杯になる、そして感情を色に出さないのが習慣だが何か眼を輝かせるものがある。しかしあとで何と考へるだらう。さきに話したあの秀才の學生、安河内麻吉との會話によつて、先日、著しい例が私に與へられた。つぎに私はそれをかゝげて見ます。

「先生、あなたが日本へ初めてお出でになつた時、あの古風な日本人について先生の意見はどんなでしたか、きかせて下さい。どうか全く遠慮のないところを願ひます」

2. 感情を色に表さないのが日本人ことに九州男兒のキマリ(流行)なれども感激して眼から涙がでさうになる。

"Sir! What was your opinion of the old-fashioned Japanese when you came first to Japan? Please to be quite frank with me."

"You mean old men like Akizuki-San?"

"Yes."

"Why, I thought them divine,—Kami-Sama; and I think them more divine now that I have seen the new generation."

"Akizuki is a type of the ideal old samurai. But as a foreigner you must have perceived faults."

"How, faults?"

"From your Western standpoint."

"My Western standpoint is philosophical and ethical. A people's perfection means their perfect fitness for the particular form of society to which they belong.[1] Judging from such a standpoint the man of the Akizuki type was more perfect than any Western type I have ever met. Ethically, I could say the same."

【註】 1. 其人の屬する社會に適するか適しないかで、其人のよいか惡いかは定まる、全く違つた社會の人と比べては話しにな

「秋月さんのやうな老人のことですか」

「ハイ」

「さうですな、私は聖い、神様だと思ひました、それから新時代の人々を見てから、一層聖いと思ひます」

「秋月さんは理想的の古武士の典型です。しかし外國人としては先生は缺點をお認めになつたに相違ありません」

「どうして、缺點と云ふのは」

「先生の西洋の立脚地から」

「私の西洋の立脚地は哲學的倫理的です。人の完全と云ふのは、その人の屬する特別の形ちの社會に完全に適合することを意味するのです。そんな見方から見ると秋月の型の人は私がこれまで遇つたどの西洋風の型よりも完全でした。倫理的にも同じことが云へます」

らず、しかしその社會と別の社會(たとへば日本の昔しの社會と西洋の今日の社會と)を比べて優劣をつけることはできる。

"But in a Society of the Western type, could such men play a great part?"

"By their unaided exertions?"

"Yes."

"No; they have no business capacity, and no faculty for certain combinations."

"That is true. And in what did their goodness seem to consist to you?"

"In honour, loyalty, courtesy,—in supreme self-control, – in unselfishness,—in consideration of the rights of others,—in readiness to sacrifice self."

"That also is true. But in Western life are these qualities sufficient to command success?"

"No."

"And the Oriental system of morals cultivated these; and the result of that cultivation was to suppress the individual for the sake of the whole?"

"Yes."

"On the other hand, the Western form of society developes the individual by encourag-

「しかし西洋風の社會に於て、こんな人々は大きな役がつとまりませうか」

「その人々の一本立ちの力でですか」

「ハイ」

「イヤ、その人々は商才がない、それから或種類の策略がない」

「本當です、それで先生はどんなところにその人々の美點があると御考ですか」

「名譽、忠誠、禮義、非常な自制力、無私、他人の權利を尊重すること、容易に自分を犧牲にすること、などの點です」

「それも本當です、しかし西洋の生活でこんな性質は成功を得るに充分ですか」

「イヽエ」

「それで東洋の道德制度がこんな性質を養成したのです、その養成の結果は全體のために個性をおさへることになつたのでせう」

「さうです」

「それに反して、西洋の社會の形ちは利己主義、競爭、利益のための爭ひ、その外そんなもの

ing selfishness—competition, struggle for gain —and all that?"

"Yes."

"And Japan, in order to keep her place among nations, must do business and carry on industry and commerce in the Western manner?"

"Perhaps."

"I do not think there is a perhaps. There is only a must. We must have manufactures, commerce, banks, stock-companies—we must do things in the Western way, since our future must be industrial and commercial. If we should try to do things in the old way, we should always remain poor and feeble. We should also get the worst in every commercial transaction."

"Yes."

"Well, how can we do any business,—or attempt any enterprise,—or establish any large system,—or carry on any competition,—or do anything on a large scale,—if we live by the old morality?"

を奬勵して個性を發達させるのですね」

「さう」

「それで日本も列國の間に立つて自分の位地を保つためには西洋風に仕事をして殖產商業をやらねばならないでせう」

「さうかも知れない」

「さうかも知れないと云ふことはないと思ひます、必ずさうあるべきです。私共は製造工業、商業、銀行、株式會社をもたねばならない—日本の將來は工業的商業的でなければならない以上は私共は西洋風に仕事をせねばなりません。昔風に事をやらうとしたら私共はいつでも貧乏で衰へて居らねばなりません。私共は又あらゆる商賣上の取引に敗けてばかり居らねばなりません」

「さう」

「ところで私共が古い道德によつて生活すればどうして商賣をやれませう、冒險企業ができませう、或は大組織ができませう、競爭がやれませう、或は大規模で仕事ができませう」

"Why?"

"Because if we can do something advantageous to ourselves or our interests only by hurting some one else, we cannot do that according to the old morality."

"Yes."

"But to do business in a Western way we must not be checked by any such scruples; the man who hesitates to obtain an advantage simply because he knows some one else will be injured by it, will fail."

"Not always."

"It must be the general rule when there are no checks upon competition. The cleverest and strongest succeed; the weak and foolish fail: it is the natural law—the struggle for life. Is Western competition based upon love of one's fellow man?"

"No."

"Sir, the truth is that no matter how good the old morality was, we cannot follow any such moral law and preserve our national independence and achieve any progress. We must try to substitute law for morality."

「何故」

「そのわけは他人に損をかけて初めて自分等や自分等の利益に好都合なことができるものなら、道德に從つて居てはそれができなくなりますから」

「さう」

「ところで西洋風に商賣をするにはそんな良心の咎めなどに煩はされてはなりません、他人がそのために損害をうけることを知つて居ると云ふことだけで利得をためらつて居る人は失敗します」

「さうとも限らない」

「競爭に何の制限もない場合にはそれは普通の規則である筈です。最も怜悧な最も强い人が成功して、弱い愚かなものが失敗する、それが自然の法則、生存競爭です。西洋の競爭は博愛を根據として居ますか」

「イヽエ」

「先生、古への道德がどんなによくてもそんな道德法に隨つて國家の獨立を保つて進步をとげることはできません。私共は道德と法律とを入れ替へるやうにやつて見ねばなりません」

"It is a bad substitute."

"It is not a bad substitute in England. Besides, at last, men through the influence of law will learn to be moral by reason, not by emotion.[1] We must forsake our Past."

And I could say nothing......

Ever,

LAFCADIO HEARN.

【註】 1. 感情でなく、道理に訴へてかくすべきもの、國法には隨ふべきもの、さ云ふ事を覺えて行つて最後に正しき國民になれる

「悪い入替だね」

「英國では悪い入替ではありません、その上最後に人間は法律の影響によつて、感情からではなく、道理の上から道徳的になるやうに習ひませう、私共の過去はすてねばなりません」

そして私は何も云へませんでした。(後略)

永久の友人なる

ラフカディオ ヘルン。

と云ふ意味。

大正九年二月　七　日印　刷
大正九年二月十一日發　行

版權所有

英語教師の日記と手紙

定價壹圓七拾錢

譯註者　田部隆次
東京府下西大久保三〇八番地

發行者　中土義敬
東京市神田區錦町三丁目七番地

印刷者　村岡儆三
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所　福音印刷株式會社
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發行所　北星堂書店
東京市神田區錦町三丁目七番地
（振替口座 東京 一六〇二四番）

（新井製本）

（大賣捌所は裏面にあります）

特約大賣捌所

東京の部

東京市神田區表神保町三　東京堂書店

東京市京橋區元數寄屋町　北隆館書店

東京市日本橋區數寄屋町　林平書店

東京市神田區表神保町　有精堂書店

地方の部

大阪市東區南本町四丁目（振替大阪六十九番）　三宅莊藏書店

名古屋市西區玉屋町一丁目（同東京一九五三番）　小澤百架堂

弊店發行の圖書は總て右大賣捌店に多數備へ有之候間精々御注文の程偏に奉希上候

（販賣全國各書店）

北星堂英文教科書

JONATHAN AND HIS CONTINENT —*By Max O'Rell*	Price .30	Postage .04
ON PEACE AND HAPPINESS—*By Lord Avebury*	Price .35	Postage .04
THE PLEASURES OF LIFE—*By Lord Avebury*	Price .30	Postage .04
READINGS FROM MODERN PROSE WRITERS —*Compiled by Hokuseido*	Price .40	Postage .04
HALF HOURS WITH MODERN WRITERS —*Compiled by Hokuseido*	Price .40	Postage .04
A GOLDEN TREASURY OF ENGLISH IDIOMATIC SENTENCES	Price .35	Postage .04
SELECT PIECES FROM EMINENT AUTHORS	Price .40	Postage .04
CULLINGS FROM GREAT WRITERS	Price .30	Postage .04
SMILES CHARACTER (*Selection*)	Price .40	Postage .04
A MISCELLANY OF TYPICAL PROSE	Price .40	Postage .04
UNION FOURTH READER (*Selection*)	Price .40	Postage .04
GEMS OF WORLD LANGUAGE	Price .65	Postage .06
ART AND REASON	Price .50	Postage .04
LIFE AND HUMANITY	Price .40	Postage .04

北星堂出版圖書

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英文法の先生 全一冊 定價一圓

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英作文の先生 全一冊 定價一圓

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英文手紙の先生

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英語會話の先生

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英語字引の引き方 全一冊 定價廿錢

東京物理學校講師 田中伴吉先生著 方程式本位 新化學講義 全一冊 定價二圓五十錢

東洋大學教授文學士 田部重治先生著 ペーター文藝復興 全一冊 定價三圓五十錢

東洋大學教授文學士 田部重治先生著 日本アルプスと秩父巡禮 全一冊 定價一圓卅錢

北星堂出版圖書

學習院教授 南日恒太郎先生著 英文藻鹽草 全一冊 定價一圓卅錢

學習院教授 南日恒太郎先生著 英詩藻鹽草 全一冊 定價一圓卅錢

學習院教授 田部隆次先生譯註 小泉八雲 英語教師の日記と手紙 全一冊 定價一圓七十錢

國民英學會講師 清水起正先生著 イデオム研究 新英文解釋 全一冊 定價一圓四十錢

國民英學會講師 清水起正先生著 文法應用 新和文英譯

早稲田大學 正則英語學校講師 山崎貞先生著 受驗準備 英文和譯の考へ方 全一冊 定價一圓四十錢

早稲田大學 正則英語學校講師 山崎貞先生著 受驗準備 和文英譯の考へ方 全一冊 定價一圓四十錢

第一高校教授村田祐治先生 逗子海成中教頭宇高兵作先生 共著 英文譯し方應用自在

東京日日新聞記者（元ヘラルド記者） 花園緑人先生著 英字新聞の研究 全一冊 定價一圓卅錢

北星堂出版圖書

北星堂英文講義叢書

著者	書名	定價
南日恒太郎先生校閲 清水起正先生譯註	原文譯文詳註 ユース、オヴ、ライフ講義	全一冊 定價一圓卅錢
清水起正先生 吹田佳三先生 共著	原文譯文詳註 オン、ピース、エンド、ハッピネス講義	全一冊 定價一圓
清水起正先生 吹田佳三先生 共著	原文譯文詳註 キャラクター講義	全一冊 定價一圓卅錢
南日恒太郎先生校閲 吹田佳三先生譯註	英文研究 トルストイ短篇講義	全一冊 定價八十錢
南日恒太郎先生校訂 蜷川行道先生譯註	原文譯文詳註 プッシング講義	全一冊 定價一圓卅錢
清水起正先生譯註	原文譯文詳註 ユーニオン第四讀本講義	近刊 定價一圓卅錢
清水起正先生 吹田佳三先生 共著	原文譯文詳註 プレージャー、オヴ、ライフ講義	近刊

以下逐次刊行

RETURN TO → CIRCULATION DEPARTMEN
202 Main Library

LOAN PERIOD 1 HOME USE	2	3
4	5	6

ALL BOOKS MAY BE RECALLED AFTER
1-month loans may be renewed by calling
6-month loans may be recharged by bringing books t
Renewals and recharges may be made 4 days pri

DUE AS STAMPED BELOV

RECEIVED BY		
MAR 22 1977		
CIRCULATION DEPT.		

FORM NO. DD 6, 40m, 6'76

UNIVERSITY OF CALIF
BERKELEY, C.

YA 03770

M112257

DS804
H315
Case B

THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA LIBRARY